Bö-tanz 天狼新星・第二章／誘導原型／はなださとし

天狼新星　第二章　誘導原型

パンドラの箱に最後まで閉じこめられていた魔物。

汝の名は、Faint Voice・・・

主な登場人物

深尾博之（ふかお・ひろゆき）、中央憲兵隊捜査官、大尉。
　南の海に浮かぶ孤島にある第７軍事研究所で起こった「とある事件」の捜査のために、中央憲兵隊から単身で送り込まれた捜査官。１週間という短い捜査期間しかあたえられてはいない。

霧生尚道（きりゅう・なおみち）、電脳情報軍、中尉。
　サイバーテロに対する対抗部隊として創設されたサイバーフォース・レッドベレーの指揮官。士官学校では深尾の同期生。サイバーフォースの演習中に事故が起こり、隊員の一人を失う。

岡昌夫（おか・まさお）、電脳情報軍、一等通信兵。
　サイバーフォース・レッドベレーのｄＢ（ダイレクト・バインダー）。ｄＢは電脳部隊の防御と攻撃両面の要となる重要な役割を受け持つ。演習中の事故で、部隊を守る代わりに、自ら量子コンピュータ内にトラップされてしまう。

中谷晋也（なかたに・しんや）、第７軍事研究所、憲兵隊、曹長。
　中央憲兵隊から派遣された深尾捜査官を補佐する憲兵隊員。深尾からの指示を的確にこなす、優れた捜査官である。

大河内志帆（おおこうち・しほ）、三豊生命科学研究所・主任研究員。量子心理学博士。
　太陽系外探査プロジェクトで探索に搭載される「量子通信システム」の開発を行う研究者。突然ホストコンピュータを破壊するという暴挙を行い、現在営倉に収監されている。

君島寛（きみじま・ひろし）、太陽系外探査プロジェクト、プトジェクトリーダー。
　宇宙物理学博士であり、帝都総合大学の宇宙物理学研究室の教授。本プロジェクトのリーダーとして太陽系外探査機の計画と製作を行ってきた。大河内志帆の大学院時代の指導教官であった。

小宮孝夫（こみや・たかお）、同プロジェクト、サブリーダー。
　君島博士の研究室の助手。プロジェクトでの実務面を一手に引き受けている。大学院時代は大河内志帆と同期。

サイバーフォース隊員
サイバーフォース・レッドベレーは霧生中尉と岡一等通信兵の他に、以下の優秀な隊員により構成されている。
・**佐伯（電脳情報軍、曹長）**、主に攻撃の主軸。
・**小島（電脳情報軍、一等兵）**、インタラプタ（情報還元銃）のオペレータ
・**吉井（電脳情報軍、一等兵）**、守備及び支援担当
・**小田（電脳情報軍、一等兵）**、データ走査・分析担当。

犀川杏子（さいかわ・きょうこ）第７軍事研究所、医療研究棟、看護士。
　岡一等通信兵の病室担当の看護士。電脳世界から返ってこない岡をひたすら待ち続ける。

大河内遙（おおこうち・はるか）
　大河内志帆の娘。

大河内宙（おおこうち・そら）
　大河内志帆の息子。遥とは双生児として誕生している。

Faint Voice （フェイント・ヴォイス）
　「量子通信システム」の名前。それは「量子的に絡み合った」二つの生体素子で構成されている。

Lost prophet （ロスト・プロフェット）
　電脳世界のあるサイバーテロリストに付けられた呼び名。このクラッカーは第７軍事研究所のホストサーバに幾度も侵入しているらしい。

#01 Start Something ―戦闘*開始*―

薄暗い空間に満ちている様々な音。
滴り落ちる水滴／トランスがあげる低周波の唸り／が定期的に空気の圧縮と解放を繰り返すエアコンプレッサー／錆びた蝶番の軋み／古い金属製のドアが風にあおられて、開いては閉じ、閉じては開き・・・
舞台の上には瓦礫がうずたかく積まれている。
倒壊したコンクリート壁／傾いだ金属製のドア／屑鉄と癒着したかのように捨て置かれているテレビモニター／溶けかかり、ねじ曲がった鉄骨が一角獣の角よろしく天に向かって突き立っている・・・
錆び付き朽ち果てた手術台や薄汚れたプラスチック・チューブの束。使用目的分からない多種多様な機械の残骸。ここは、まるで廃墟と化した病院にしか見えない。しかし、実際、ここは病院などではなかった。それとほぼ同等の設備が備わった研究機関なのである。
ここは電子戦略軍総幹部直轄の軍事研究施設「第７軍事研究所」である。いや、「・・・であった。」と言うべきなのかも知れないが、そのどちらも正確な表現であるとは言えない。ここは、第７軍事研究所「であり」、同時に「であった」のだ・・・
不意に日が陰ったかのように、劇場が暗くなる。暗黒の中に響く音。雨音？ いや、サンドノイズだ。揺れ動きながらも、その音量が大きくなっていく。時折、思いついたかのように「パチッ」というスイッチングノイズが割り込んでくる。雑音の向こうに、微かだが、人の声のようなものを聞き取ることが出来る。女の声だ。デジタル録音された女の声。伸びきったカセットテープを再生しているかのようにピッチが揺らぎ、遅くなり早くなり、しばしば途切れ、反転再生されることもある。女の声は何度も同じフレーズを繰り返している。

女の声　宙。知ってる？　やがてこの世界は燃え尽きるの・・・　おおいぬ座にある小さな星が爆発して、世界を焼き尽くす・・・　本当よ、宙。これは本当のこと。でも、誰も信じないの・・・　宙は、宙だけは分かってくれるよね・・・

音に呼応して、今まで朽ちたかのように瓦礫の中で横たわっていたブラウン管がサンドノイズでちらつき始める。
ふと見ると舞台上に一人の少年が膝を抱えながら座っているのが分かる。右腕が、何故か、肩の上まで持ち上げられているのが不自然だ。微動だにせず、食い入るようにテレビ画面のサンドノイズを見続けている。
サンドノイズの中に間欠的に何かの映像がインポーズされていく。何かの映像・・・　それはロケットの打ち上げ映像だ。メインエンジンから勢いよく白煙を吹き出し、１機のロケットが大空を目指し飛び立っていく。無音の映像、それがサンドノイズの中から湧き上がり、そしてまたノイズの中に沈み込み・・・ 舞台上のすべてのモニターがその無音の映像を映し出している。雨音のようなノイズ。そして、女の呟き。それに単調なピアノの音が重なる・・・
力強く天を目指すロケット。それが何の前触れもなく、不意に、爆散する。ロケットは何度かの小爆発を繰り返しながら、完全に砕け散る・・・
雨音のようなノイズ、女の呟き、と単調なピアノの音。爆発の炎が、それを見つめている少年の顔を赤々と浮かび上がらせる。爆発を境に、女の声が止み、そして少年の不自然に上げられていた右腕がゆっくりと下がり始める・・・
白煙を残し、幾千もの破片と化したロケット。ノイズが、歯の浮くような振動が徐々に高まっていく。劇場中が震えているかのようだ。そして、その振動が極限まで高まったまさにその時、少年がすっくと立ち上がる。断ち切れるノイズと映像。一瞬の沈黙、駆け去る少年・・・

　と、叩き付けるような音響［Start Something/Lost Prophets］。
客席上のキャットウォークから叫び声。そこには２名の武装した兵士（小田、吉井）がいる。

小田　こちら小田。７８番ルーターにヤツの姿はありません。
吉井　周囲の端末を走査。この周辺に気配なし。霧生中尉。気を付けて下さい。ヤツはすでにメインフレームに・・・

と、客席後方・側方のドアが「突入！」のかけ声と共に蹴破られたように開き、雪崩れ込んでくる武装兵士達。皆、レーザーサイトをつけた自動小銃で武装している。その中の指揮官らしき男（霧生中尉）が叫ぶ。

桐生　ヤツはこの中にいる。２班に分かれ捜索を開始。小田、吉井、すぐに本隊に戻れ。

キャットウォークの２兵士、「了解。」と答え、撤退を開始。
客席先方にいた一人の兵士（佐伯）が呟き、横の兵士（小島）がそれに答える・・・

佐伯　・・・メインフレームか。ここまで到達したのかよ、マジで。
小島　なんか感じるぜ。ヤツはきっとここにいる・・・
佐伯　あのな。お前の直感とやらが当たった試しは・・・

と、霧生のそばにいた一人の兵士（岡）が叫ぶ。

岡　中尉。ブリップです。ヤツのブリップを確認・・・
霧生　どこだ。
岡　それが・・・
霧生　どうした？
岡　・・・我々の７ｍ前方。
佐伯　（驚いて）ｄＢ、今なんて言った！？

舞台中央に一人の男がしゃがみ込んでいる。何の前触れもなく、不意に現れたといった風。全身を覆う黒い薄手のマント。それがゆっくりと立ち上がる・・・
岡のリアルタイムカメラがその男を捉え、そして急速にズームアップ。その映像が巨大スクリーンに大写しになる男の顔・・・
血の気の失せた青白い頬。銀色の頭髪が蛇のようにうねる下に灰色の瞳。死人のようの表情。そこには何の感情も浮かんではいない。
男の顔の映像にスーパーインポーズされるタイトル：

「*Bö-tanz XXIV*」
「天狼*新*星　*Sirius: Hyper nova*」
「第二章：誘導原型　*Chapter II: Induced Proto-type*」

男は口に何かをくわえている。電子部品、小さな基盤のようなものかも知れない。唇の端から垂れ下がった細いリード線／口の中で明滅している赤と青の LED／よだれが糸を引いて流れ落ちている・・・

現れた男に向かい、霧生が問いかける。

霧生　お前がそうなのか？　ロスト・プロフェット・・・

その問いかけに、答えるものはいない。

霧生　（ひとりごちて）墜ちた予言者・・・

と、佐伯が叫ぶ。

佐伯　やっとお出ましかい。ちょこまか逃げやがって。
岡　キャプチャー・フィールド展開！

ハブノイズとともに、振動する光が銀髪の男を包む。
光に固定される男。しかにその表情は微動だにしない・・・

岡　トラップ完了。
佐伯　消滅してもらうぜ。小島、インタラプタ！

小島、背負っていたショットガン（スパス１２）を抜き放ち、舞台上の男に向ける。

小島　ロックオン！
霧生　岡、部隊全体をシールドしろ。
岡　レベル２、で防御シールド展開。
小島　インタラプタ、オールクリア。発砲します。

引き金を引こうとした刹那、爆音とスパークが劇場を満たす。

霧生　なにがあった？
岡　攻撃？　ヤツの？　違う！
霧生　どうした？
岡　霧生中尉、外部からの攻撃です。誰かがメインフレームに物理的な攻撃を行っている！
小島　（銃口を向けたまま、岡を見る）
佐伯　物理的攻撃？
岡　コンピュータ自体を破壊しようとしている。
霧生　岡、外部の警備部隊に連絡！

爆音とスパークが再び劇場を満たす。
銀髪の男を固定していた光が揺らぎ、男の身が自由になる。
一歩後ずさる男。

佐伯　逃がすか！

男を追って舞台上に駆け上がる佐伯と小島。
と、爆音とスパークが三度劇場を満たす。
光の中へ消える銀髪の男。

岡　そっちへ行くな！　逆送電流の餌食になるぞ。
小島　しかし・・・
岡　ノイズに還元されたいのか！　ネットワークが分断され始めた。このままでは、

我々の部隊が危ない。
霧生　ｄＢ、帰還シークエンスを！
岡　帰還シークエンス開始。全員のポイントを固定。
霧生　吉井、小田。聞こえたか？　帰還だ！

爆音が轟く。目も眩む光。
岡が倒れ込む・・・

霧生　ｄＢ、大丈夫か！　お前自らの情報を・・・
岡　もう防御シールドが持たない。不測の事態です・・・　急がないと・・・　佐伯と小島のランディング・ポイント確保。帰還。

爆音と光。その中に飲み込まれる佐伯と小島。
同時に倒れ込む岡。

霧生　岡！
岡　大丈夫です。全員生還させます。小田、吉井のランディング・ポイント確保。コネクション確立。帰還！

爆音が轟く・・・　息も絶え絶えの岡。霧生も爆発の影響を受け倒れ込む。

岡　シールドが保ちません。苦しいでしょうがもう少しの辛抱です。霧生中尉のランディング・ポイント確保・・・
霧生　岡、お前も一緒に戻れ。
岡　はい。中尉の帰還を確認でき次第・・・
霧生　なにを言っている！
岡　私はｄＢです。全員を帰還させる義務がある・・・　霧生中尉。中尉のコネクションが確立しました。
霧生　岡・・・
岡　帰還！

爆音。目も眩むばかりの光。霧生の「岡！」という叫びがエコーとなって劇場に響き渡る・・・
そして、劇場が闇に包まれる。

#02 Red Cap　ー特捜憲兵ー

舞台上に一人の男。深尾博之（ふかお・ひろゆき）が現れる。

深尾　・・・小さな島。南海に浮かぶ、とても小さな島。そんな風に思っていた。島の外周は50㎞程度。車で一周するのに１時間も要しない。そんな小さな島だ。だが、この島にはこの国最大の軍事研究機関である「電子戦略軍　第七軍事研究所」とそれに併設された「大型ロケット発射場」が存在している。熱帯地方の離れ小島。一昔前ならリゾート地にでもなったのだろうが、この島には白い砂浜もマングローブの林も、そして珊瑚礁もない。あるのはコンクリートの建物とコンクリートの道路。海岸線のほとんどは護岸工事が施されて・・・　そう、見渡す限り、視界のすべてが、灰色なんだ。いや、厳密にえば、一面灰色というわけではなかった・・・

舞台後方に一人の兵士が現れる。ＭＰの中谷晋也（なかたに・しんや）である。

中谷　（敬礼し）この島のＭＰの中谷です。深尾大尉。遠路はるばるの来訪、歓迎いたします。

深尾　それにしてもすごいところだね。南の島と言うイメージから遠くかけ離れている・・・

中谷　はい。始めて来られた方は、皆そうおっしゃいます。

深尾　島のすべてがコンクリートに覆われて・・・　まるで灰色の要塞だ。

中谷　灰色の要塞・・・　確かにそうかもしれません。ただ、コンクリートの外壁をよく見てください。若干緑色に変色しているのが分かりますか？　高温多湿という熱帯特有の気候のためか、藻類なのか苔なのか、とにかくそのようなものがすぐ生えてしまうんです。そして、根のようなものをコンクリートの内部までのばし、それを伝って雨露が染み込んでいく・・・　それが建築物の寿命を縮めてしまうんです。実際、この島の建造物の寿命は１５年そこそこです。

深尾　１５年・・・

中谷　そうです。ですが、ここにいる学者連中に言わせれば、この耐用年数の短さは苔の所為ではなく、コンクリートに含まれる海砂、つまり、海の砂を使っていることが原因なんだそうです。砂に含まれている塩が内部の鉄骨や鉄筋をぼろぼろにしてしまう・・・　でも、建設時の砂利や砂の大半は現地調達となっておりますので・・・　実を申しますと、ここから見える建造物の３分の１が、寿命が尽きて半ば廃棄されているも同然なものなのです。

深尾　どうして取り壊さない。

中谷　解体費用がかさむからでしょうか？　自分にはよく分かりません。ただ、耐用年数を過ぎた建物は単に放置されているわけではなく、使われなくなった研究機器・装置の保管庫になっています。まあ、これもすべて廃棄物みたいなものですが・・・

深尾　老朽化した建物を解体することなく、開いている土地に次から次へと研究施設を建設する・・・　そして、島は灰色の・・・いや、「緑がかった灰色の要塞」と化した。そんなところか・・・

中谷　（笑って）はい。深尾大尉。ここが、総司令官室です・・・

と、唐突に正面をノックする。それに呼応しノックのＳＥ。
足を揃え、敬礼する兵士。

中谷　板倉少将閣下。第七憲兵隊の中谷です。電子戦略軍中央憲兵隊捜査官、深尾大尉

をお連れいたしました。

踵を返し、退場する兵士。舞台の上は、深尾だけとなる。

深尾　・・・私がこの島、第７軍事研究所に来た経緯は、こうだ。最近、この研究所でちょっとした事件があった。ここで行われているプロジェクトのひとつ「太陽系外探査プロジェクト」の中核研究者の一人が、突然コンピュータシステムを破壊するという奇妙な事件だ。それもハードウエアレベルの物理破壊、つまり、鉄パイプでコンピュータを殴ったのだという。物理的被害もさることながら、更に運が悪かったのは、その時ちょうど、サイバーフォース、つまりサイバーテロリズムに対するカウンターアタックのために組織された特殊電脳部隊の演習が行われていたということだ。サイバーフォースは遺伝情報・意識情報レベルで自己をサイバースペースに送り込まれた電脳兵のことだ。つまり、その時点で、光ソリトン通信網とメインフレームのシリコンウエハー上に電脳兵が存在していたことになる。イメージしづらいことなのだが、どうやらそんなことらしい。メインフレームの物理破壊を受けた電脳兵達は、驚いたことだろう。まさか内部からこのような攻撃を受けようとは予想だに出来なかったからだ。いや、単に驚いただけではなく、現に一人の電脳兵士が・・・

と、舞台後方に一人の初老の男。君島寛（きみじま・ひろし）が現れる。

君島　で、中央憲兵隊は捜査官、つまり君を送り込んできた。内部での調査では不十分だというわけですな？

深尾　いえ、そんなことはありません。総司令官の板倉少将にも申し上げたとおりですが、これは形式だけの捜査であると思ってください。

君島　形式だけの・・・

深尾　そうです。中央憲兵隊にも立場というものがあるのです。ご理解いただけないでしょうか？　で、あなたが「太陽系外探査プロジェクト」の君島博士ですね？

君島　自己紹介が遅れてしまって申し訳ない。私がプロジェクトリーダーを務めている君島だ。今回の事件で齟齬が生じたが、プロジェクトは数日程度の遅れで、どうにか実行できそうな状況にまで回復している。

と、その傍らに現れる男。小宮孝夫（こみや・たかお）である。

小宮　いいかね。もう、終わった事件なんだ。内部調査も終了し、軍法会議での判決も下っている。今さら、なにを捜査しようと言うのかな？　いいですか、これ以上の妨害はたくさんなんです。君も我々の邪魔にならぬよう「形式だけの捜査」を進めてくれないかな。

深尾　分かっています。ご迷惑はおかけいたしません。で、あなたが・・・

小宮　小宮。プロジェクトのサブをやっています。

深尾　小宮博士ですね。大学では君島博士と同じ研究室の・・・

小宮　そうです。

深尾　事件の経緯は報告書を読みましたので、理解しているつもりです。容疑者の女性は、今・・・

小宮　容疑者ではありません。犯人です。今は営倉に閉じこめている。

深尾　彼女に会うことは可能ですか？

小宮　こちらの憲兵に聞けばいいでしょう？

深尾　・・・そうですね。あなた方にひとつお聞きしたいのですが、どうして彼女は突然コンピュータを破壊したのだと思われますか？

君島　　それは・・・
小宮　　報告書に書いてあるとおり、「乱心した」と言うことでしょう。
深尾　　何の前触れもなく、突然に？
小宮　　・・・いえ、おかしかったんですよ、昔から。だから、このプロジェクトに加えることにも私は反対したんです。私は大学院時代、彼女と同期だったんですが、ほんとおかしなことばかり言っていました。あの頃すでに、あの女は狂っていたんですよ！
君島　　（たしなめて）小宮くん！
小宮　　先生。しかし、これは事実です。　深尾大尉。あの頃の彼女は、おかしな強迫観念に囚われていて、この世が滅びるとか、やがて世界が・・・
君島　　止めたまえ！
小宮　　・・・先生。でも・・・
君島　　深尾大尉。まことに申し訳ないが、私たちにもスケジュールというものがある。探査ユニットの打ち上げ準備を急がねばならないのだ。今日はこの辺で・・・
深尾　　分かりました。もう結構です。

　　退場しようとする二人。深尾、それを制し・・・

深尾　　すみません、もう一つだけ。あなた方の「太陽系外探査プロジェクト」についてお尋ねしたいのですが・・・　探査船を太陽系の外に飛ばす・・・　未開の地である外宇宙を探索する。とてもロマンのある研究だと思います。しかし、そのような研究に対し、どうして電子戦略軍が巨額の研究費を投入しているのですか？科学者の夢のために金を出すほど軍部はロマンチストじゃない。
君島　　・・・・・・
深尾　　コメントできないと言うことですか？
小宮　　そう。軍事研究上の秘密です。
深尾　　・・・やはり、そうですか。では、答えなくて結構です。単に、報告書を読んでもピンと来なかった・・・　それだけのことですから。

　　退場する二人。

深尾　　・・・「太陽系外探査プロジェクト」。裏があって当然だ。調べようと思えば調べられないこともないが・・・　まあ、無理はよそう。今回は「形式だけの捜査」なんだ。中央憲兵隊は「内部調査資料の裏を取りました」という形式上の報告を欲しているだけだ。でなければ、私一人だけを派遣するだけではすまないはずだ。通り一遍の聞き取りを行い、一週間の後、帰る。ただそれだけのこと・・・

　　と、舞台奥にＭＰの中谷。

中谷　　・・・この奥が、独房となっております。差し出がましいようですが、やはり大尉一人でお入りになられるのは・・・
深尾　　大丈夫だ。私も素人ではないから・・・　君はここで待機していてくれないか？何かあったら、大声をだす。
中谷　　しかし、どんな大声をだされても、ここでは聞こえません。
深尾　　大丈夫。私の悲鳴は人並みはずれて大きいから。自分の叫び声で自分の鼓膜を二度破ったことがあるぐらいだ。
中谷　　二度も！
深尾　　三度やったら、単なるアホだが・・・　いや、今度がその三度目にならないように祈っていてくれ。

中谷　　（笑って、敬礼する）分かりました。ここでお待ちいたします。

中谷、退場する。
唐突に、暗がりから女の声、「誰・・・」
と、イスに腰掛けている女がゆっくりと照明に浮かび上がっていく・・・　カメラが女を正面から捉えていて、スクリーンにその顔が浮かび上がる。白髪交じりの女。目が深く落ちくぼみ、やつれ果てた表情ではある。その瞳は虚ろで、口調はゆっくりとしていて気怠い。左腕に機械の様なものがつなぎ止められており、そこからいくつかのリード線が首や胸に向けのびている。画面上にはポリグラフのような波形がオーバーレイされている。彼女の名前は大河内志帆（おおこうち・しほ）。今回の事件の犯人とされた女である。

大河内　誰？
深尾　中央憲兵隊本部から調査にきた深尾と言います。
大河内　中央憲兵隊の深尾・・・
深尾　はい。
大河内　調査？
深尾　今回の事件のです。
大河内　事件？
深尾　ええ。少しの間、私と付き合っていただけませんか？
大河内　いいですわ。退屈していたところですから・・・
深尾　（笑って）では退屈しのぎに、ちょっと教えていただけませんか？　「太陽系外探査プロジェクト」について・・・　この目的は何ですか？
大河内　太陽系外の探査。
深尾　それでは答えになっていません。何のために探査するんです。
大河内　人類の未来のため・・・
深尾　（ため息をつき）質問を変えましょう。あなたはこのプロジェクトの中で、どんな役割を担っていたのですか？
大河内　役割？
深尾　そうです。プロジェクトにおけるあなたの役割は？
大河内　つ・・・通信。
深尾　通信？　どうして通信なのですか？　あなたは量子心理学の博士号をお持ちだ。そして、三豊生命科学研究所から客員研究員としてこのプロジェクトに参加しているはずだ。言うなればあなたは医学博士だ。
大河内　資料をお読みになったのかしら・・・　私の研究についてなんと書かれています
深尾　三豊生命科学研究所での研究内容は「意識の量子解析とその情報化アルゴリズム」・・・・
大河内　そう。意識の量子的通信・・・
深尾　意識の量子的通信？　それは一体？
大河内　意識そのものが・・・　量子力学的現象なのを、ご存じ？
深尾　いえ、詳しくは・・・
大河内　そう。その通信手段の構築が私の役割・・・・
深尾　だから、具体的に・・・
大河内　通信手段の構築が私の役割・・・・
深尾　（首を振り）分かりました。質問を変えましょう。このプロジェクトに関して、あなたの意にそぐわないことはあったのですか？　または人間関係でのトラブルは？
大河内　いえ・・・
深尾　そんなはずはないでしょう。あなたはプロジェクトリーダーである君島教授と今

回初めてあったわけではありません。それにサブリーダーの小宮博士も含めて・・・あなたは、量子心理学の博士号を取得する前に、君島教授の下で宇宙物理学の博士号を取ったんでしたよね。

大河内　よくご存じで。

深尾　資料に書いてありますから・・・

大河内　その通りですわ・・・ でも、あの頃、彼はまだ「助」教授・・・でしたけど・・・

深尾　あなたは、君島研究室で若干２５歳という若さで宇宙物理学博士となった。あの頃でも希だったでしょう。

女　飛び級で・・・大学院へ行きましたから・・・ 不思議なことではなかった・・・

深尾　優秀だったんですね。

女　・・・・・・

深尾　君島助教授をはじめ大学側も学位取得後、すぐに助手としてあなたを迎え入れようとしていた。しかし、あなたは大学から姿を消す。そして、助手の職には、同時期に博士号を取得した小宮さんが就いた・・・

女　（笑う）

深尾　おかしいですか？

女　いえ・・・　さして能力の高くない彼が職にありつけたのも・・・私のおかげというわけだと思うと、ほほえましくて・・・

深尾　どうして、姿を消したのですか？　大学からも、そして学会からも・・・　あなたはせっかくの宇宙物理学者への道をあっさり諦めてしまった。何故ですか？

女　心の病にかかり実家へ戻った・・・　小宮は・・・　小宮はそう言っていませんでした？

深尾　ええ。

女　では・・・それでかまいません・・・

深尾　私はあなた自身の口からそれを聞きたいのです。

女　もう調べは着いているんでしょう？ その頃私が心療内科に通院していたことや、それから・・・　確かに私は・・・　少しだけ心のバランスを失っていました。これで結構かしら・・・　納得していただけた？

画面にオーバーレイしているポリグラフの波形が、彼女の感情の高ぶりに呼応して激しく揺れ動く。

女　こんなことをして、何の意味があるんです。軍法会議の判決はすでに下っているんでしょう？　もう終わったことなの。すべてが終了しているの、今さら・・・

女の言葉が、不意に途切れる。ポリグラフの波形もまた、もとの平穏なものに戻り・・・

女　・・・深尾大尉。私、とても疲れました。今日はもう休ませていただけませんか？

と、深尾の答えも待たず、立ち上がり退場する女。
舞台袖に現れる中谷。

中谷　大尉。大丈夫でしたか？

深尾　ああ。だが、薬物投与の度が過ぎている。これでは・・・　いいか、看守長に伝えてくれないか？　彼女に対するいかなる投薬も即刻中止すること。トリアゾラム、クロルプロマジンだけでなく、弱い精神安定剤の投与もだ。食事に混ぜ込むのも当然禁止だ。もし、薬物使用の兆候が見られたら、中央憲兵隊本部を通じ、正式に抗議すると釘を刺してくれ。

中谷　　了解しました。
深尾　　それから、もう一つ。体内に埋め込まれたポリグラフのプローブもすべて即刻除去すること。頼んだぞ。
中谷　　はい。

敬礼し、退場する中谷。深尾もまた退場する。
暗転。

#03 Cyber-Force　ー電脳部隊ー

舞台袖に一人の軍服姿の男。霧生尚道（きりゅう・なおみち）が現れる。と、サイバーフォースの面々（佐伯、小島、小田、吉井）がばらばらに登場する。

小田　霧生中尉。岡は大丈夫なんですか？
霧生　一命は取り留めている。しかし・・・
佐伯　しかし？
霧生　あの事故の最中で我々を帰還させるため、相当量の記憶が消費された。再起は・・・
小島　不可能。
佐伯　不可能ってお前！（小島に掴みかかろうとする）
霧生　（制して）止めろ、佐伯。不可能ではない・・・
佐伯　岡に会うことは出来ませんか？
霧生　面会は出来ない。そのような決まりになっている。
佐伯　どうしてですか？　同じ仲間なのに・・・
吉井　俺たちはただ応援したいだけだ。奴を勇気づけたい。
霧生　君たちが行ったところで、状況は好転しない。
吉井　遠くからだっていい。岡は何処に入院しているのか教えてください。
霧生　出来ない。「決まり」なんだ・・・　理解してくれ。

諦め、または、ふてくされる隊員達。黙り込んでいた小田が口を開く。

小田　サイバーフォースは、我々はどうなるんですか？　ｄＢなしでは、サイバースペースへの侵入は出来ません。もし、こんな時に奴らの侵入を受けたら・・・
小島　ロスト・プロフェットは消滅した。
佐伯　俺はそうは思わねえ！
小島　消滅した。俺は見た。
佐伯　いや。俺は見てねえ！
小田　霧生中尉。我々はどうなるんです？　ｄＢなしでどうするんです？
霧生　考えはある。もし、襲撃を受けたときには、私がｄＢとして電脳空間への侵入を決行する。
吉井　中尉自ら？
佐伯　無理だ！
小島　佐伯！
小田　危険です。
吉井　ｄＢにはきわめて高いサイバースペースへの適合性が要求される。
霧生　私の適合性はＡ＋（Ａプラス）だ。
吉井　それに、もし何かあったら、中尉自身が危険だ！
小島　岡のように・・・
霧生　電脳空間への侵入演習は明後日に行う。
小田　中尉！
霧生　演習とは行っても実践的なものだ。気を引き締めてかかれ。詳細は明日。解散。

皆、渋々立ち上がり、敬礼をし退場する。
舞台後方に深尾。

霧生　やっと来たか？
深尾　ああ。
霧生　何年ぶりだ？

深尾　さあね。
霧生　相変わらずだな・・・　元気だったか？
深尾　まあな。お前は？
霧生　・・・ぼちぼちだ。見ての通りな・・・　本来なら、友人としてお前を迎えに行くべきだったんだが、ちょっとごたごたしていて・・・
深尾　友達甲斐のない奴だなんて思ったりしないよ。（霧生に近づき肩に手を置く）災難だったな・・・
霧生　そうでもないさ。
深尾　強がるな。かなりやばいんだろ？　ｄＢを失ったらサイバーフォースは防御・機動両面の能力を奪われたことになる。違うか？
霧生　・・・俺がいる。
深尾　（笑って）そうだな。お前は優秀だからな・・・　お前は同期の中でもずばぬけて優秀だった。俺なんか足元に及ばないぐらい・・・　でも、どうして前線に立とうとする。あえて危険に身をさらそうとする。それも中尉なんて階級のままで。お前ぐらいの実力があれば、当然、少佐か中佐・・・
霧生　安楽椅子に腰掛けて、チェスの駒のように兵隊を動かし、そして一喜一憂する。そんな生き方が嫌いなんだ。
深尾　お前らしい言いぐさだな・・・　分かったよ。
霧生　・・・・・・
深尾　しかし、サイバーフォースは完全に実用段階へ入っていたんだな。未だ研究途上にあるのかと思っていたが・・・
霧生　無理を押してやっているんだ。いわゆる「緊急の要請」という奴で・・・
深尾　緊急の要請か・・・

照明が深尾だけのサスとなる。

深尾　ことの始まりはこんな風だった・・・　ある「サイバーテログループ」が大国のFire Wall を易々と越え、情報ネットワークを攪乱、ライフラインや交通・医療サービスを含む都市機能を完全に麻痺させた上、原子力発電所の制御を支配下においた。警察機関・軍事関連施設のコンピュータネットワークも同様の攪乱を受け、何の対応もとれぬまま、事態は最悪の結果に向かって突き進むことになった。幸運なことにメルトダウンは１週間を待たずして収束したが、その間にたくさんの者が死に、それ以上の者が重篤な放射線障害を負うこととなった・・・　驚くべきは、この未曾有のサイバーテロが、たった７人のクラッカーにより引き起こされたものであるということだ。クラッカー達はカリブ海に浮かぶ小さな島から大国に向け攻撃を仕掛けたのだ。そして、テロ発生から 72 時間後に行われた特殊部隊の攻撃の際に、彼らは死体として発見されることになる。いや、正しくは死んだに等しい状況で横たわっていたのだという。離島の掘っ立て小屋の中で、ハイスループットのサーバシステムに光ソリトンケーブル、そして自家発電装置とともに・・・　クラッカーたちは皆「体感ゲーム」にでも使われているような生体-シリコンパッドを、耳の後ろとこめかみにペーストで貼り付けた状態で、全員ベッドに横たわっていたという。呼吸こそしていたが、もう二度と目覚めることはないように思われた。実際、極秘に運ばれた軍の医療機関で、クラッカーたちは時をおかずして眠るように息を引き取った・・・

先ほどからニュース映像や遺伝子工学・情報工学の解説番組的なイメージ映像がノイズとともにスクリーン上に投影されている。

深尾　彼らはこのサイバーテロのためにウイルスやワームを使ったわけではない。彼ら

自身が、正しくは彼ら自身の意識が、ネットワークの中に入り込み、ウイルスとして機能したんだ。光ソリトンケーブルの中に自らを、その意識を、情報としてアップロードしたのだ。政府による全ネットワークの物理切断により、その意識は二度と持ち主の下に戻ることはなかったが・・・　このような意識のアップロードについては、技術的に可能であるという研究成果がショウジョウバエからサルに至るまで、様々な生き物での実証例として示されてきた。遺伝情報・意識情報を含め生体を光ソリトン通信網に送り込むことを、ソリトナイズ－ソリトン化と呼ぶが、しかし、人間での実験は一切行われてこなかった。果たして人の意識が高速転送に耐えられるのか？　重篤な精神障害を引き起こすのではないか？　その問いに答えられる者が一人もいなかったからだ。だが、彼らはそのラインをあっさりと越え、その上「ネットワーク攪乱」そして「原発のオペレーション・システムの支配」というミッションを完璧にこなしてしまった・・・　この事件を教訓としてすべての国々が、極秘に軍事目的でのソリトナイズの研究を開始した。我が国ではここ第７軍事研究所で。そして生まれたのが・・・

霧生に明かりが射す。スクリーン映像は消え、元の照明となる。

霧生　それが、我々のチーム、サイバーフォースだ。これがサイバー・ウォー、電脳戦において最も有効な戦闘形態なんだ。ソリトナイズしたサイバーテロリストの攻撃を撃退できるのは、同じくソリトナイズした電脳兵だけだ。資質があり、訓練を積んだ兵士であれば、ソリトナイズし、ネットワーク内で様々なミッションを十分に行うことが出来る・・・

深尾　しかし、実情はどうなんだ？　当事者の忌憚なき感想を聞かせてくれないか？

霧生　・・・基本的に誰でもソリトナイズできる。しかし、それには電脳空間に高い親和性を示す者の存在が不可欠だ。それなしでは電脳空間での簡単なミッションもこなすことは出来ない上に、現実へ帰還すること自体が出来なくなる。現実と我々を直接に繋ぐ者。我々はそれをダイレクトバインダー、ｄＢと呼んでいる。天賦の才能を与えられた者だけがｄＢになれる。

深尾　それが岡通信一等兵。

霧生　そうだ。

深尾　彼に会うことは？

霧生　（首を横に振る）

深尾　そうか・・・　資料では演習中の事故となっているが・・・

霧生　演習ではない、実戦だ。うすうす感ずいていることとは思うが・・・

深尾　この研究所に対するサイバーテロが？

霧生　あれが始めてのことではない。ここは何度もサイバーテロの標的になっている。

深尾　電子戦略軍は公式の発表をしていないが・・・

霧生　別に箝口令が惹かれているわけではない、上層部が発表しないので、みんなも口に出さないだけだ。この研究所の中で、ロスト・プロフェッツの名を知らない者はいない。

深尾　ロスト・プロフェット？

霧生　墜ちた予言者。サイバーテロリストの名前だ。彼が名乗ったのか、でなければ、ここの研究者が名付けたか・・・　なぜか、そう呼ばれている。何処の国から仕掛けているのか、またはこの国の中からなのか、まるで見当も付かない。神出鬼没。そして、その攻撃は多彩だ。一度は島のネットワーク全体の外部との接続を物理的に切断したこともある。　・・・あの時、あの事件の時、我々は始めて電脳空間で彼と出会った。彼？　いや「彼」と呼ぶべきだろうか？

深尾　どういうことだ？

霧生　ロスト・プロフェットは「彼」でもなければ「彼女」でもなかった。いや、その

両方か・・・　男とも女とも付かない上に、見た目からは歳も素性も、なにもうかがい知ることが出来ない。老人の目を持つ子供。少年の様なやせこけた体に、未成熟な乳房・・・　まさに、電脳空間の中に棲む怪物だった。ロスト・プロフェットは、人ではないのかもしれない。遙か昔、ネットワークが形成されたときからこの中に存在していて・・・　そして侵入して来た我々を侵略者と見なし、攻撃している電脳の守護者なののかもしれない・・・　一瞬見ただけで、そう感じたんだ。おかしいのは百も承知だが、そう思ってしまったんだ。そして、そう思った瞬間だった。ネットワークが外部から物理破壊を受けたのは・・・

深尾　大河内博士の？

霧生　そうだ。ロスト・プロフェットと我々がいる電脳空間は、切断され、孤立し、我々はノイズへ還元される手前まで行った。岡がいなかったら、いまごろ全員の意識がランダムノイズと成り果て、胡散霧消していたところだ。しかし、それはロスト・プロフェットにとっても同じ状況だったろう。現に奴らはあれ以来、なりを潜めている。奴らは消滅したという者もいる・・・

深尾　つまり？

霧生　彼女は、大河内博士は、意図的に物理破壊を行ったのではないかと言うことを言いたいんだ。俺は何度もこのとこを上申したが、報告書にはなんと？

深尾　一言で言えば、「彼女の乱心」だ。

霧生　彼女は狂ってなどいない。彼女は我々を救おうとしたんじゃないか？ いや、我々だけではなく、この研究機関そのものを、ロスト・プロフェットの攻撃から守ろうとしたんじゃないのか。ハードウエアを破壊するという粗暴ではあるが的確な行為によって・・・　確かに、その結果、岡が再起不能に近い負傷を負うこととなった。ｄＢである岡を欠くことは、我々サイバーフォースの存亡に関わるほどの痛手であることに間違いはない。しかし、彼女が行動を起こさなければ、被害はそれどころではすまなかったはずだ。（そして、独り言のように、ぽつりと・・・）深尾、どうにかして彼女を救うことは出来ないのか？

と息を切らして駆け込んでくる中谷。深尾に向かい敬礼。

中谷　深尾大尉！　大河内志帆が・・・

中谷を凝視する深尾。舞台がゆっくりと闇に包まれる。

#04 Overdosing　ー投薬中止ー

舞台後方に駆け込んでくる少女。少女時代の大河内遙（おおこうち・はるか）である。

遙　　ママ、ママ！

舞台中央に現れる大河内志帆。

大河内　どうしたの、遙？
遙　　私ね・・・　私、宇宙に行くよ。
大河内　宇宙へ？　宇宙飛行士になりたいの？
遙　　それはどうか分からないけど・・・とにかく宇宙へ行くの。ロケットに乗って・・・
大河内　ロケットに？
遙　　そう。大きな、大きなロケットで、空高く・・・
大河内　何処まで飛んでいくのかな？
遙　　遠く・・・
大河内　お月様まで？
遙　　もっと遠く・・・
大河内　じゃあ、火星？
遙　　もっと、もっと。遠く・・・
大河内　じゃあ、土星？　いや、冥王星かな？
遙　　目指しているのは、もっと遠くなの。冥王星よりももっと遠くの・・・
大河内　太陽系の外なんだ？　本当に？
遙　　うん。本当に。だってそう言ったんだもん。宙（そら）がそう言ったの。
大河内　（顔色が変わり）・・・なに？
遙　　宙がそう言ったの・・・
大河内　宙が・・・

と、舞台他方に、もう一人の遙が現れる。

遙２　　ママ、ママ！　私ね・・・　私、宇宙に行くよ。ロケットに乗って・・・
遙　　そう。大きな、大きなロケットで、空高く・・・
遙２　　目指しているのは、もっと遠くなの。冥王星よりももっと遠くの・・・

耳を押さえる、大河内志帆。

大河内　止めて・・・　遙・・・
遙　　ママ、ママ！　私ね・・・　私、宇宙に行くよ。ロケットに乗って・・・
遙２　　そう。大きな、大きなロケットで、空高く・・・
遙　　目指しているのは、もっと遠くなの。冥王星よりももっと遠くの・・・
遙２　　だってそう言ったんだもん。
遙　　言ったんだもん。
遙・遙２　宙が・・・

耳を押さえうずくまる、大河内志帆。

大河内　止めて。お願い。止めて・・・
遙　　でもね。そのロケットは・・・

遙２　　その大きなロケットは・・・
遙　　飛び立ったとたん・・・
遙２　　そのとたん・・・
遙　　だってそう言ったんだもん。
遙　　言ったんだもん。
遙・遙２　宙が言ったの・・・

　　と、叫び声を上げる大河内志帆。

大河内　　止めて！　遙、止めて！

　　飛び込んでくる中谷と深尾。
　　くるりと消失する遙と遙２。

深尾　　一体、どうしたんだ？
中谷　　急におかしくなって・・・
大河内　　（震えて、耳を押さえつつ）止めて・・・　もう、止めて・・・
中谷　　やはり、投薬の中止が・・・
深尾　　・・・・・・
大河内　　（深尾に気付き）・・・お願い。薬・・・　クロルプロマジンを・・・　クロルプロマジンを 100mg、プロメタジンをその半量、投与して・・・　お願い・・・　早く・・・
深尾　　（がたがた震えている大河内を見つつ、中谷に向かい叫ぶ）医師を呼んでこい。鎮静剤の投与を！

　　頷き、駆け去る中谷。舞台が一瞬暗転する。
　　明転すると、舞台上に深尾と大河内。

深尾　　・・・すこしは落ち着きましたか？
大河内　　ええ。幾分気分はよくなったわ。
深尾　　信じられないことですが、看守長の指示により多量の鎮静剤が、トリアゾラムだけでなくエチゾラムまでも、高単位で投与されていたようです。それで突然の投与の中断により反発的症状が出てしまったのでしょう。これは急に投薬中止を指示した私のミスです。
大河内　　私が薬漬けにされ生殺しになっているのを見るに見かねて、熱くなってしまい、判断を誤った？
深尾　　そんなところです。
大河内　　正直な人。軍人らしくないわ。
深尾　　軍人は皆、正直です。
大河内　　うそ。でも、学者よりはましかも。
深尾　　軍人でも科学者でも、正直な人はいるんです。大河内博士、あなたは正直者ですか？
大河内　　ええ、とても正直よ。でも、残念なことに気がふれているの。
深尾　　そうは思いません。
大河内　　私が「正直だ」と言ったことに対して？　それとも「気がふれている」こと？
深尾　　後者です。あなたはきっと狂ってなんかいない。
大河内　　あら、私は心理学博士よ。私の診断にケチを付ける気なの？
深尾　　確かに博士号をお持ちだが、臨床経験はまったくない。それに、あなたの専門は量子心理学でしたね。残念ながら、あなたの診断を私は信じる気にはなれません。

大河内　（笑って）それはそうね。
深尾　報告書には、「乱心によりコンピュータを破壊した」と書かれていますが、あなたの診断同様、これを素直に信用することが出来ないのです。だって、あなたは・・・
大河内　報告書の通り、何の相違もなく、私は狂ったの。だから、わたしは・・・
深尾　何か理由があったはずだ。　・・・ロスト・プロフェット。ご存じですね？
大河内　ええ。みんなが知っている程度には・・・　軍事研究所のコンピュータシステムを攻撃しているサイバーテロリストのあだ名でしょう？
深尾　では、あなたがコンピュータを破壊したその時、ここのメインフレームにそれが侵入していたことも知っていたんですね？
大河内　・・・・・・・
深尾　どうですか？
大河内　・・・いえ。
深尾　本当ですか？
大河内　嘘をつく理由がありませんわ。
深尾　そうですか・・・　では、質問を変えましょう。「はるか」とは誰ですか？
大河内　・・・・・・
深尾　あなたは先ほど、震えながら哀願していた。「止めて、はるか」と・・・　教えていただけませんか？　「はるか」とは誰なんですか？
大河内　・・・・・・

舞台後方に現れる中谷。

中谷　・・・調査してみたところ、当時彼女が通っていた心療内科のカルテが見つかりました。証言に間違いはありません。２５歳になったばかりの秋から通院が開始されています。
深尾　つまり、宇宙物理学博士号の取得直前と言うわけだ。
中谷　はい。失踪の半年前にあたります。
深尾　で、カルテに書かれていた診断結果は？
中谷　軽い心身症と言ったところです。不安や不眠、そして、じんま疹・・・　まあ、一般的なものでした・・・（しばし、考え込む仕草）
深尾　どうした？
中谷　いえ、彼女の医療情報を調べているうちに、全く別の事実が浮かび上がってきたのです・・・
深尾　別の事実？
中谷　はい。彼女はその時、妊娠していたらしいのです・・・
深尾　妊娠？　相手は？
中谷　不明です。
深尾　人工授精か？
中谷　いえ、違います。女性科学者には多い事例ですので、一応考えてみたのですが、そうではないようです。その頃の彼女自身の経済状態から考えてもそうでしょう。それに彼女の実家も裕福というわけではなかった・・・
深尾　当然、彼女の失踪はその妊娠は関係していると読んでいるわけだな？
中谷　はい。彼女はまわりの者にはなにも言わずに、逃げるように帰郷している。人知れず出産するためにです・・・
中谷　情報によれば、出産は無事すんだようです。
深尾　子供の名前は？
中谷　遙、遙か彼方の「遙」です。
深尾　遙・・・

中谷への明かりが消える。

大河内　遙とは・・・　私の研究している通信ユニットの素子に付けられた名前です。
深尾　素子？
大河内　バイオ素子。「太陽系外プロジェクト」に用いられる通信システムに用いられるの。私が通信システムの研究開発をしているって、お話ししませんでした？
深尾　・・・確かに、聞きました。しかし、遙とはあなたの・・・
大河内　その通信システムは、遙か遠くを繋ぐから・・・ だから「遙」と名付けました。

中谷へ明かり。

中谷　・・・そして、「宙（そら）」です。
深尾　なに？
中谷　宇宙の宙と書いて「そら」です。
深尾　どういうことだ？
中谷　双子だったんですよ。
深尾　双子？
中谷　遙は女の子、宙は男の子ですから、二卵性でしょうが双生児です。
深尾　その子達は今どこに？
中谷　そこまでは・・・　まあ、二人とも現時点では１７歳ということぐらいしか。残念ながら、探ることが出来たのはここまでです。調査を続行しますか？
深尾　・・・・・・（考え込んでいる）
中谷　個人的な見解ですが、彼女の過去を探ったところで・・・

中谷への明かりが消える。と、同時に中谷退場。

深尾　大河内博士。その「遙」というのは？
大河内　そう。太陽系外探査船は遙か遠くを目指している。空の彼方、遙か遠く・・・
深尾　・・・・・・
大河内　どこを目指しているか、ご存じ？
深尾　いえ・・・
大河内　探査船が目指しているのは・・・　（薬の影響か、睡魔が襲う）目指しているのは・・・　ここより８．６光年彼方の・・・
深尾　博士？
大河内　おおいぬ座、アルファ・・・　シリウス・・・
深尾　博士？　大河内博士？

深尾の呼びかけに大河内は答えない。指を耳に当て、中谷へ通話。

深尾　中谷、扉を開けてくれ。大河内博士は眠ってしまった。たぶん薬の影響だろう・・・それから、彼女の過去・・・そうだ、彼女の子供のことをもう少し洗ってくれ・・・

扉の開く音。退場する深尾。そして、舞台が暗転する。

#05 Ward Sister ー特別病棟ー

心音を示す定期的なパルス。人工心肺装置が上げるふいごのような音・・・舞台の上には看護士が一人佇んでいる。犀川杏子（さいかわ・きょうこ）である。

犀川　（子供にでも語って聞かせるように）・・・ヘパイストスが人の形に土くれをこねて、ゼウスがそれに命を吹き込んだの。それが彼女。すべての神々は、彼女に様々な贈り物をしたの。アフロディテは輝くばかりの美貌を、アポロンは美しい歌声を、そしてアテナは知恵を彼女に与えたの。だから、彼女の名前は「すべてを与えられし者」って意味なんだ・・・

と、傍らに一人の軍服の男。霧生が現れる。

霧生　何の物語だね？
犀川　神話。古い古い昔の神話。「すべてを与えられし女」の話。彼女の名前はパンドラ・・・
霧生　聞きたいな、その話の続き・・・
犀川　うそつき。霧生さんが聞きたいのは、神話なんかじゃなく、岡さんのことでしょ？
霧生　・・・岡は？
犀川　呼吸、脈拍ともに安定。安らかに眠っている。きっと夢も見ずに・・・　私は床ずれを起こさないように時折姿勢を変えてやり、体を拭いたり、耳や鼻を綿棒で掃除してあげたり・・・　いつもと同じことを繰り返している・・・
霧生　意識は？
犀川　意識は昔からないわ。知っているくせに・・・
霧生　だから、電脳レベルでの意識は？
犀川　未だ反応は見られない。
霧生　戻ってこれなかった？
犀川　そうかもしれない。そうでないかもしれない・・・
霧生　どういうことだ？
犀川　戻ってきてるのに、心を固く閉ざしている。そう言うことだってあり得るでしょ？
霧生　心を閉ざしている？
犀川　固い殻の中で外界とのコンタクトを拒絶している。岡くんはそんなところがあった・・・
霧生　本当にそうだと思うか？　心を閉ざしているだけだと・・・
犀川　そう信じてる・・・　岡くんの意識が破壊されたメインフレームの中で消失したなんて考えたくはない。岡くんはここに戻ってきている。戻っているけど私に語りかけてくれないだけ・・・　そうでしょう？　そうじゃなきゃ・・・
霧生　それは君の希望に過ぎない。
犀川　違う。私には分かる。５年近くも一緒にいるんですもの。分からないはずはないわ。岡くんはここに戻ってきている。単に心を閉ざしているだけ。こうやって私が話しかけていれば、明日にだって呼びかけに答えてくれるはずなの。耳は生きてるから、私の声は届いているの。そこにあるセキュリティ・カメラや監視デバイスを通して私の顔を見ることだって出来る。モニターの電源を突然落としたり、空調システムの設定プログラムをいじって、私を凍えさせたり・・・　岡さんは自分の体を１㎜も動かすことは出来ないけど、そんなイタズラで私を困らせることは簡単に出来ちゃうの。そして、モニター画面に現れて、「ごめんね。イタズラが過ぎたよ・・・」って・・・　でも、私は彼を許さない。グーで眉間をパンチしてやる。そしたら、岡くんは「痛！」って叫ぶの。モニターのスピーカーを通して大声で叫ぶの。痛みなんか感じないはずなのに。ちっとも痛くないはずなのに・・・

霧生　　犀川・・・
犀川　　分かってるわ。あなたは人工心肺装置を止めに来たんでしょう。脳波測定、ポジトロン断層撮影、量子干渉分析・・・　すべての検査で、岡くんの脳には顕著な活動は見られなかった・・・脳死状態と言えないまでも、それに近い状態だ・・・その検査結果を私は知らない訳じゃない。でも、だめ。彼を殺してはだめ。私が許さない。

犀川、岡を守るかのごとく、両手を広げ仁王立ちとなる。

霧生　　活動電位を失った脳細胞は死滅し、分解していく。例えフェニルブチルニトロンなどのフリーラジカル捕捉剤を多量に投与し続けたとしても、その分解は進行していく・・・　現時点ではまだだが、でも、それはすぐにでも・・・
犀川　　・・・分かってる。脳神経の分解が進行し始めたら、すべての装置を停止するから・・・　私に決定権のないことぐらい十分に承知してる。でも！
霧生　　・・・・・・
犀川　　霧生中尉！
霧生　　・・・君を信じよう。

仁王立ちになっていた犀川の体から力が抜ける。霧生を見つめたまま、右手を自らの額に持っていく。背筋を伸ばし敬礼の体勢。

犀川　　中尉。ありがとうございます。

犀川への照明が消え、心拍を示すパルス音も徐々に遠ざかる。
立ちつくしている霧生。舞台後方に一人の兵士（小田）が現れる。
敬礼する小田。

霧生　　何だ、小田？
小田　　明日の演習で私をｄＢに任命してください。
霧生　　お前が？
小田　　中尉自らｄＢを兼ねるというやり方は負担が大きすぎます。これは私の個人的な意見ではなくサイバーフォース全員の総意です。私も中尉同様、電脳空間への適合性はＡ＋。ｄＢのシミュレート・プログラムを受けてみたいのです。
霧生　　思うほど簡単なものではないぞ。
小田　　理解しています。部隊全体の命を預かる重要な任務ですから・・・　岡ほどの働きは出来ないと思いますが、岡が回復するまでの間のつなぎとして最大限の努力をしたいのです。お願いいたします。
霧生　　・・・受けてみたまえ。シミュレーションで７０ポイントを超える成績をだしたら、考えてみよう。
小田　　（敬礼し）ありがとうございます。

立ち去ろうとする小田を、霧生が呼び止める。

霧生　　小田。
小田　　はい。
霧生　　ｄＢにおいて最も大切なことはなんだと思う？
小田　　はい。電脳空間全体を把握するだけでなく、現実世界との接続を常に意識していること。そして・・・
霧生　　死よりも恐ろしいことがある。ｄＢになれるか否かは、その恐怖を克服できるか

どうかで決まる。ｄＢは常に恐怖と向かい合っている存在だ。それは拷問と言っていい。それをどう処理出来るかが鍵だ。

小田　死よりも恐ろしいもの・・・

霧生　そうだ。それを肝に銘じておけ。

小田、敬礼し、退場。霧生もまた退場する。暗転。

#06 Space Probe　ー探査計画ー

明転すると、舞台上には深尾、そして少し離れて君島と小宮がいる。小宮は腕組みをして、落ち着きなく歩き回っている・・・

小宮　（ため息をつき）我々は忙しいんだ。どうして邪魔をするのかな・・・
深尾　ですから、形式だけの調査です。２．３質問させて頂くだけです。お手間は取らせませんから・・・
小宮　あのねえ、君・・・
君島　（制して）小宮くん！
小宮　でも、先生・・・

と、電話の着信音。小宮が即座に手を耳に持っていき応対する。

小宮　小宮だが・・・・・・　（と、通話を保留にし、君島に）先生、通信開発の佐藤からです。フェイン・・・（咳払いする）通信ユニットの再コネクトがマニュアル通りではうまくいかないとのことです。至急ご足労願いたいとのことですが・・・
君島　小宮くん。君が行ってくれないか？
小宮　私一人で、ですか？
君島　たぶん緊急マニュアルに間違いがあるのだろう。君ならそれを指摘することが出来るがはずだ。
小宮　分かりました。先生は？
君島　すぐに私も追いかけるよ。深尾大尉の質問に答えたらね・・・
小宮　先生！
君島　頼むぞ、小宮くん。
小宮　（渋々納得し、手を耳に持っていき保留を解除、応対する）佐藤か？　今から私がそちらに向かう。　・・・以上だ。（と通話を終了する）

君島に挨拶し、部屋を出て行こうとするが、立ち止まり、深尾に視線を向ける。

小宮　先生は忙しい身だ。あまり邪魔をせぬように・・・

と、捨てぜりふを残し立ち去る。小宮が完全に出て行ったのを確かめて、君島が口を開く・・・

君島　彼の不遜な態度を許してやってくれないか？　ロケットの発射を１週間後に控えて、やらなければいけないことが山ほど残っている上に、例の事故だ。かなりナーバスになっているんだよ。
深尾　承知しています。あなた方の立場や状況の大変さは理解しているつもりです・・・
君島　ありがとう。　・・・深尾大尉？
深尾　「深尾」だけで結構です。
君島　では、深尾くん。紅茶でもどうかね？
深尾　・・・頂きます。

頷き、そして深尾に背を向け、テーブルに近づく。紅茶を入れ始める君島。

君島　（背を向けながら）やはり気になるかね？　「太陽系外探査プロジェクト」の真の目的が・・・
深尾　それは軍事機密なんでしょう。私が知りたいのは、たったひとつ、「大河内志帆が、

何故、コンピュータを破壊したのか？」と言うことです。内部調査では、彼女の乱心であるとして片づけています。そして、彼女にそのような精神的傾向があったことが記されていますが、直接的な原因については全く言及していないのです。これでは調査と言えません。その原因が機密保持に抵触するものだとしても、あまりにも曖昧すぎる。それに、私には彼女が「狂っている」とはとうてい思えないのです。彼女は意図的にコンピュータを破壊したのではないか。正気だったではないか・・・

君島　正気とは何だね？（振り返り）そして「狂気」とは何だね？　君達軍人は、カウンターテロと称してテロリストを殺す。それは「正気」の沙汰なのかね？　我々科学者は君達軍人のために、殺人機械の開発や効率的な殺害方法の発展のために寸暇を惜しんで働いている。それは「狂気」と呼ぶべきものではないのかね？ この時代における「正気」とは？　そして「狂気」とは？　その判断基準は時代を越えて絶対的なものだと言えるのかね？

君島がティーカップを深尾に渡す。深尾、それを受け取り・・・

深尾　君島博士。

君島　「君島」だけで結構だ。

深尾　君島さん。中央憲兵隊の捜査官に対して、相応しい発言とは思えませんが、あなたの混乱にはある程度共感できるつもりで・・・

君島　深尾くん。私は混乱などしていないよ。達観だよ。いや、君から見れば「悲観」だね、まさに・・・

深尾　・・・・・・

君島　私は今回の打ち上げが成功したら、探査船がうまく軌道に乗ったら、その時点で研究から退こうと思っている。すべての研究を終了する。つまり、引退だ。

深尾　君島さん。あなたはまだ、退官なんて歳では・・・

君島　もう十分だ。太陽系外に飛び出していく探査船を打ち上げた・・・　そのことだけでもう満足だ・・・

深尾　退官のことを他の研究者は知っているんですか？

君島　（首を横に振り）知っているのは私と、君だけだ・・・　どうした？　飲みたまえ。

手にしていたカップを口に近づけ、一口啜る。と、眉をひそめ、ぽそりと、「これ、昆布茶ですね・・・」　・・・っていう展開はどうだろう？
［うそです。なんか、あんまり生真面目すぎるから、飽きちゃって・・・　実際には以下のように進行するはず・・・］

深尾　（カップを口に近づけ、一口啜る）・・・うまいですね、これ。

君島　（笑顔になり）だろう？　軍の支給品なんだが、特別なものなんだそうだ。

君島も、自らもカップに口を付け、残りを飲み干す。

君島　さてと、そろそろ君の質問に答えなければなるまい。といっても、私自身、真実を知っている訳ではないのだが・・・　「大河内志帆が何故コンピュータを破壊したのか？」、その疑問に答えるには、やはりこのプロジェクトの本当の目的について語る必要がありそうだ・・・　「太陽系外探査プロジェクト」とは、その名の通り、この太陽系の外に探査機を送り調査をすることを意図したものだ。宇宙にはまだまだたくさんの謎がある。宇宙がどのように進化してきたのか、そしてこの先どうなるのか・・・　その問いに対する解釈は様々あるが、真実は未だ明

らかとなっていない。宇宙の年齢を知るための膨張速度でを表すハッブル定数、宇宙の平均密度パラメータの決定も推量の領域を出てはいない・・・　このプロジェクトはそれらの疑問の解明に有効な情報を与え得るものだと信じている。だが、このような天文学者や宇宙物理学者の昔年の夢に実現に、軍が金を出してくれるものなのか？　君が不思議に思ったのも無理はない・・・

深尾　軍が動いた・・・　その真意は、何ですか？

君島　この探査船に搭載される「量子通信システム」だ。

深尾　量子通信システム？

君島　量子テレポーテーションを応用した通信だ。テレポーテーションと言っても、瞬時に移動するのは量子情報だけだ・・・　二十世紀の終わりに光子の偏光状態の瞬間移動が実証され、後に１兆個のセシウム原子の組み合わせでの瞬間移動の成功がポルジックらデンマークの研究チームにより報告された。これに触発され、量子テレポーテーションの研究が盛んに行われるようになった。2004 年にはアメリカのワインランドらがベリリウム原子で、オーストリアのブラットらがカルシウムイオンでの原子情報の瞬間移動に成功・・・

深尾　量子テレポーテーションは超高速演算を可能とする量子コンピュータや情報の完全暗号化技術の開発の核となり、当然我が軍でも、大規模な研究予算の投入が行われている・・・

君島　だから、量子テレポーテーションを応用した通信技術開発を中心に据えることにより、このプロジェクトが軍の予算で行えることになったのだ。そして、この量子通信システムの中心開発者が・・・

深尾　大河内博士。

君島　そうだ。彼女は斬新なアイデアで量子通信の研究を進めていた。量子テレポーテーションの研究は光子、つまり素粒子に始まり、原子、イオン集団、分子、高分子と、より複雑な方向へと発展してきた。量子テレポーテーションのためには物質のエンタングルメント、つまり、「絡み合い」の状態の持続が必要なわけだが、複雑系になるほどエンタングルメントが持続されやすいことが明らかとなってきたからだ・・・　彼女が研究していたのは、その最終到達点としての生体細胞、より正確に言うなら、それに付随した「意識」の量子テレポーテーションだ。

深尾　彼女の研究テーマは「意識の量子解析とその情報化アルゴリズム」でしたね・・・

君島　そう。サイバーフォースのソリトナイズの研究母体である三豊生命科学研究所での彼女のテーマだ。それを更に前進させ通信システムに応用した。生体分子ではなく細胞そのものをシリコンウエハー上に配置したバイオ素子。

深尾　細胞そのもの？

君島　そう。ひとつの細胞を特殊な条件下で分離し、培養したもの・・・　安定的にエンタングルメント化された細胞、いや絡み合った「意識」だ。それが通信システムの核となる。

深尾　「意識」を持った細胞？　まさか・・・

君島　そう、ヒトの細胞だ。人工的に作られた双子と言える。そこには、わたしにも今ひとつ理解が及ばないところでもあるのだが、大河内くん言うところの「双子のシンクロニシティ」という量子心理学的な関係性も生じているそうだ・・・

深尾　その細胞は・・・　「はるか」、そう呼ばれていませんか？

君島　どうしてそれを？　大河内くんから聞いたのかね？　・・・確かに彼女はその分裂細胞のことを「はるか」または「はるか細胞」と呼んでいたが・・・

深尾　それは・・・

君島　しかし、そのバイオ素子を含むシステム全体を、我々はこう呼んでいた・・・か細き声、「Faint Voice」・・・

君島の最後の台詞「Faint Voice」に呼応して、バブノイズが響き渡る。同時に二

人への照明が暗くなっていき・・・
低くハブノイズが響く中。舞台中央に明かりが射すと、一人の兵士が立っているのが明らかとなる。サイバーフォースのｄＢ、一等通信兵、岡昌夫（おか・まさお）である。

岡　・・・奇妙な感覚だった。なんと言ったらいいのだろう。すべてがぶれて見える。いや、視覚ではなく感覚の問題だ。そう、すべてがぶれて感じられる・・・　ここは何処だ？ 電脳空間ではないのか？ 俺はさっきまで・・・ さっきまで・・・

のど元まで出かかっているのに思い出せない、と言う風に頭を抱える岡。

岡　ここは・・・　そして俺は・・・

舞台後方に二人の少女の影・・・　二人は鏡に映った鏡像のようだ。崇高なまでのシンメトリィ・・・

少女達　自動遮断機構／セイフティ・ロック・・・ 安全装置が／装置が働いた・・・ 急激な電圧変化／逆送電流を関知すると／マイクロ・セコンドで／１秒の１００万分の１でシステムを／このシステムをすべての回線／ネットワークから切り離す・・・

後方の少女達の存在に岡が気付く。

岡　誰だ？
少女達　（微笑み、首をゆっくり横に振る）
岡　君達は誰なんだ？
少女達　君達？（小首を傾げる）　私は／私・・・
岡　なんなんだ、一体？　俺はどうしたって言うんだ・・・　聴覚までおかしくなっている・・・　音までがぶれて・・・
少女達　１００ピコ秒／つまり１００億分の１秒だけ／私と／私がずれる。ほんの３ｍ離れているために起こる現象／でも、それだけではない・・・
岡　どういうことだ？　教えてくれないか？　ここは・・・
少女達　あなたはここに飛ばされてきた／津波の様な電位パルスに押し流され・・・　自動遮断装置に／装置に情報を切断されるところを／運良く／紙一重ですり抜けた・・・
岡　ここは・・・
少女達　確か・・・　医療研究棟地下／地下二階に位置している。
岡　医療研究棟、地下・・・？
少女達　量子通信システム「Faint Voice」・・・

と、その言葉に呼応して、響いていたノイズがぴたりと止まる。照明がゆっくりと深尾と君島に戻る。

深尾　「Faint Voice」・・・
君島　そう、生体素子を中核とした通信システムの呼び名だ。二つの素子の一方が探査船に乗せられ、太陽系外を目指す。そして残りの一方はこの研究所に残される。エンタングルメントの関係性を保持したまま・・・
深尾　そして遠く離れた距離においても瞬間的な情報通信が行われるというわけですか？　でも、それは光の速度を超える通信となる。物理法則に反することになり

ませんか？　つまり、因果律が・・・
君島　深尾くん・・・
深尾　すみません。物理学者に向かって、こんなこと・・・
君島　君の言う通りだ。そう言うことになる。だが、この通信システムが光の速度を超え、情報を伝えることになるのは後にも先にも一回しかない。
深尾　一回？
君島　その上、送られる情報もたったひとつ。「探査船の生体素子が消滅した」という情報のみだ。どうして消滅したのか、どのようにそれは起こったのか？　そんなことすら分からない。こちらの素子が関知するのは向こうの消滅だけ・・・　大河内くんが言うことを鵜呑みにするなら、その情報だけがテレポートされるシステムということだ。
深尾　それでは・・・
君島　そう、真偽の付けようがないんだ。もし、探査船が地球から１光年の距離に位置しているときに起こったのなら、１年後に地球に到達する「向こうからの周辺情報」を参考に真偽の判断をするしかない。そんなものなのだ。たったこれだけのもののために何十億の金が湯水のごとく使われた。その上、その生体素子は量子コンピュータに繋がれて存在している。量子コンピュータだぞ。
深尾　量子コンピュータは依然研究段階であると・・・
君島　その通り。解明されていないことが多すぎる。開発過程にある。未だ完成はしていない。
深尾　打ち上げを１週間後に控えて、未だ通信システムは開発中・・・　軍はこのことを？
君島　さあ、どうだろう。でも、いったん動き出したプロジェクトは決して止まることはない。粛々と進行してだけだ。少なくともゴーサインをだした軍の上層部が、停止命令を出すわけはない。自分の落ち度になるわけだから・・・　だろう？
深尾　・・・・・・
君島　医療研究棟の地下に鎮座する未完成の巨大な量子コンピュータ、その中に存在する未知数だらけのバイオ素子。それが超光速通信システム、「Faint Voice」の真の姿だ。そして、その中核システムの担当者が大河内くんなんだ。生真面目な彼女のことだ。このような中途半端な状況が許せなかったことだろう。
深尾　だから彼女は・・・
君島　開発のためにはもっと時間が必要だ。なのに計画はカレンダー通りに進行していく・・・ 彼女の内なる叫びは誰にも届かなかった・・・ だから大河内くんは・・・

再び、バブノイズが響き渡る。二人への照明が暗くなっていき・・・
岡と少女達に明かりが入る。

少女達　ねえ／ねえ、あなた怖いの？／脅えてる？
岡　・・・・・・・
少女達　大丈夫。ここは全体／未来であり過去・・・
岡　未来であり過去？　どういうことだ？
少女達　いえ。未来もなく／過去もない・・・
岡　ここは・・・　（何かに気づき）ここは・・・　医療研究棟地下・・・　まさか、量子コンピュータの中か？　まさか、それはまだ未完成のはず！
少女達　完成しているわ。だってこうやって／私と／私の意識が存在している・・・　それにみんな気づかない／気づけない・・・
岡　記憶が切れ切れになっている。思い出せ・・・Faint Voice、量子コンピュータ、そして俺がここにいる理由・・・
少女達　思い出せるわ。すべての記憶／記録がここに存在しているから・・・　意識を解

放／心を開くの。そうすれば・・・
岡　意識の解放？
少女達　そう。回路の復旧まではまだ時間が／時間がたっぷりある。だから・・・
岡　いつ復旧する？
少女達　もうすぐ。
岡　もうすぐって、いつだ？
少女達　だから、もうすぐ。だって、私、出発／旅立たねばならないんだもの・・・
岡　旅立つ？
少女達　遠くへ／遙か彼方へ・・・
岡　どこへ？
少女達　・・・・・・
岡　どこへ向かって？
少女達　おおいぬ座、アルファ・・・　シリウス。
岡　シリウス？

唐突に電話の着信音。岡と少女達への明かりが落ち、照明は深尾と君島へ。

君島　（電話を受け）・・・分かった。今からそちらへ向かう。（と電話を切り、深尾に）小宮くんからだ。困った状況のようだ。私も向かわねばならなくなった。失礼させて頂きたいのだが・・・

と、君島が深尾を伴って退場しようとするのを、深尾が制する。

深尾　君島さん。「プロジェクト」に関してのあなたのお話、とても参考になりました。ありがとうございました。ただ、一点、重要なことを聞くことが出来ませんでした・・・
君島　重要なこと？
深尾　探査船の行く先です。
君島　・・・・・・
深尾　太陽系外ならどこでもいいというわけではないでしょう？　探査船は明確な目標を持っているはずです。違いますか？　・・・今度、時間のあるときにでも、お聞かせ願えませんか？　・・・紅茶、ごちそうさまでした。

照明が消え、二人は退場する。
岡を照明が捉える。低く響くハブノイズ。

岡　・・・シリウスって？ シリウスって？ （しかし、少女達はもういない）おい、どこへ行った？ 答えてくれ、君達は・・・ あの「プロジェクト」の・・・ 「プロジェクト」って？ だめだ、記憶の整理が出来ない。ここは・・・ ここは・・・ ここは・・・

大きくなっていくハブノイズ。照明が暗くなっていく・・・

#07 Fearful Grief　ー記憶消失ー

暗闇の中から、定期的に漏れてくる人の吐息。
明るくなっていくと、二人の兵士が競い合うように腕立て伏せをしているのが分かる。佐伯と小島である。大粒の汗が舞台上に飛び散っている。その傍らに小田が座っている。何かを考え込んでいる様子・・・
そこへ、のっそりと現れる吉井。

吉井　（佐伯・小島に）なにやってんの？
佐伯　見りゃわかるだろ！
小島　腕立て対決だ！
吉井　元気いいなあ、お前ら・・・
佐伯　コメントはそれだけか？　現在１０８回、白熱の戦いだ。
小島　どちらが勝つか、賭けてみな！
吉井　やめとくよ。
佐伯　いいから賭けてみな。一緒に白熱できるから・・・
吉井　じゃあ、馬鹿な方・・・

佐伯と小島、同時に悔しそうに相手の名を口にする。
「ちっ、小島（佐伯）かよ！」
と、人差し指で互いに指さし合うので、こけてしまう二人。立ち上がり、今度はなじり合いだ。

佐伯　なんだと、くらっ！　俺がお前より馬鹿なわけはないだろ！
小島　おい、おい。傷つくだろう？　本当の馬鹿に馬鹿って言われたら・・・
佐伯　なんだとう。こうなったら、腹筋対決だ！
小島　望むところだ！

と、腹筋対決が開始される。

吉井　あのなあ、お前ら！　そんなことばっかしてたら、しまいにゃ、脳みそまで筋肉になっちゃうぞ！
佐・小　望むところだ！
吉井　望むのか？
小島　（小芝居開始）「おい、どうした？」
佐伯　「昨日の夜考え事をし過ぎたせいか、朝から頭が・・・」
小島　「頭痛か？」
佐伯　「いえ、脳みその筋肉痛です。」
佐・小　てなもんだ！
吉井　てなもん、ってお前ら・・・ おい、小田！ こいつらになんか言ってやって・・・

吉井、小田に話を振るが、小田は視線を床に向けたままだ。（佐伯、小島は腹筋合戦続行中・・・）

吉井　どうした、小田？
小田　（やっと、目線を吉井に向け）ああ、何でもない・・・
吉井　どうしたんだよ。何か心配事でもあるのか？　初のシミュレーションで７５ポイントを叩き出し、実戦演習で dB のポジションをそつなくこなした。霧生中尉も、お前を岡のリリーフとして認めてくれたし・・・ さすがＡ＋は出来が違うって、

思い知らされたよ。
小田　怖かった・・・
吉井　なんだって？
小田　怖かったんだ。心の底から・・・
吉井　怖かったって？
小田　ｄＢはその戦闘エネルギーを「情報」という形で、電脳空間に持ち込んでいる。その情報をノイズに還元することで得られるエネルギーを部隊の防御や空間移動に使っている・・・
吉井　情報・・・　エントロピーってヤツだな。
小田　「情報」とは、すなわち「記憶」だ。エネルギーを得るためには「記憶」を捨て去ることが必要なんだ。分かるか？
吉井　ああ、ｄＢは「記憶」を捨てながら、行動している。
小田　怖いんだよ。「記憶」を捨て去るって行為は。例えそれがどんな形の記憶であったとしても・・・とても怖いんだ。いや、「悲しい」と表現すべきなんだろうか・・・「記憶」を、「情報」をノイズに還元することは、とにかく恐ろして、そして悲しいことなんだ。岡はそれを躊躇せずにできた。しかし、俺は・・・　岡は悲しくなかったんだろうか？　いや、俺と同じ・・・　いや、それ以上の苦痛を味わっていたはずだ。でも、ヤツは顔色すら変えず、その苦痛に耐えていた・・・　この前の事故の時、岡は俺たちを守るために、大量の情報を消費しなければならなかったはずだ。つまり、自分にとって大切な記憶や、もしかしたら自分自身を構成している遺伝情報までノイズに還元し・・・
吉井　岡は・・・
小田　吉井、お前は「大切な思い出」を躊躇なく捨て去ることができるか？
吉井　分からない。でも、部隊を守るために必要なら・・・
小田　「思い出」を捨て去るときには、心が引き裂かれるような痛みが走るんだろう。そして、自らの「遺伝情報」を捨て去るときには、文字通り身を切るような激痛に襲われるんだろう。岡は、それを躊躇することなく行った・・・
吉井　小田、お前・・・
小田　大丈夫だよ。俺にだって出来る。きっと・・・　シミュレーションを行う前に、霧生中尉がこう言ったんだ。「死よりも恐ろしいもの。ｄＢは常にその恐怖と向かい合っている。それを克服出来るかが鍵だ。」吉井、俺は克服する。絶対にな・・・

と、腹筋をしていたと思われる二人が・・・

佐伯　お前なら出来るさ。
小島　何せ出来が違う。
吉井　聞いてたのか？
佐・小　そりゃ、聞いてたさ。
佐伯　大丈夫。俺たちもお前の負担にならないように行動するから・・・
小島　っていうか、サポートするからさ。
小田　ありがとうな。
吉井　でも、お前ら、どうやってサポートするって言うんだ？

佐伯と小島、腕組みして考えるが・・・

佐伯　ん一っ・・・・・・　まあ、どうにかしてだ。
小島　そっ、そういうこと・・・
吉井　そういうことって、どういうこと？
佐伯　いいじゃん、曖昧な感じで・・・　熱意が伝われば・・・

小島　　ほら、考えすぎると、俺たち・・・
佐・小　　「頭が筋肉痛」
佐伯　　になっちゃうから・・・

肩をすくめる吉井と小田。何故か知らないけど、佐伯と小島も肩をすくめて笑っている。本当に馬鹿なのかもしれない、こいつら・・・
とりあえず、暗転。

#08 Cynical Smiles　ー伴星爆燃ー

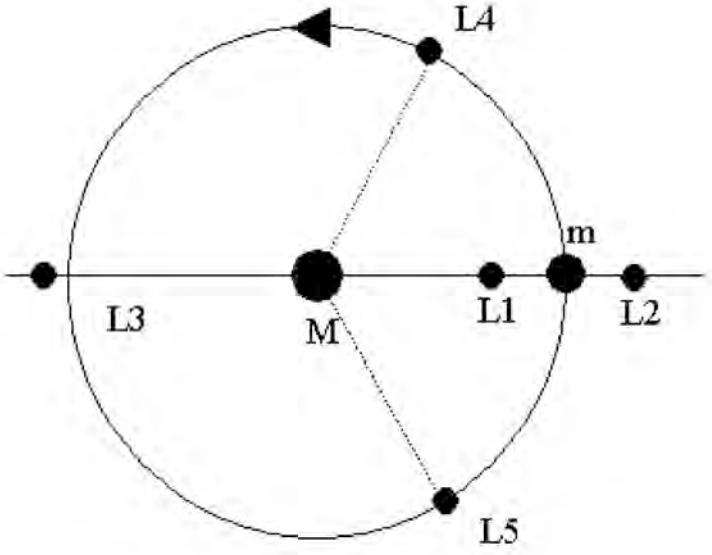
舞台上に現れる、深尾と君島。

深尾　・・・フェイントボイスの起動は？
君島　それがうまくいかないのだ。小宮くんが、起動マニュアルの内容について大河内くんに聞きたいことがあると言っているのだが・・・　彼らが直接会うのは可能かね？
深尾　こちらのＭＰに相談してみます。すぐに・・・
君島　ありがとう、深尾くん。
深尾　研究所なのですから、プロジェクトの進行が最重要課題です。つまらない決まり事に煩わされることはありません。
君島　・・・なあ、深尾くん。
深尾　なんですか？
君島　・・・シリウスだ。
深尾　？
君島　いや、だから・・・ 探査船の行く先だ。この前、お話しすると約束しただろう？
深尾　はい。
君島　シリウス・・・　私はこの言葉をここ十数年口にしたことがなかった。このプロジェクトが始まっても、必要なとき以外はその言葉を口にしない様にしている。想いが深すぎるからだ・・・　（ひとりごちて）なにから話せばいいかな？
深尾　では、何故そこへ向かうのか？
君島　それは、ある疑いのためだ・・・　とても重要なことだ。たとえば人類の存亡に関わるような・・・　だが、それは正確に予知することも、確実に阻止することも、そして回避することも不可能なのだが・・・　いや、予知だけは可能なのかもしれない。Faint voice があるからね・・・
深尾　では、その人類の存亡に関わるような事柄とは何ですか？　それが軍部の注意を引いたというわけですか？
君島　そうかもしれない。いや、多分そうだろう。大事なことだからね・・・
深尾　大事なこと？
君島　そう、一大事だ。もし本当なら・・・　シリウスは肉眼では見えないがそれに伴う星、つまり伴星と呼ばれる星とともに存在している。その伴星が微妙ではあるが不可解な挙動を示していることに科学者の大半は気づいていない。いや、気付きたくないのかもしれない・・・　その挙動とは、その星が放射しているＸ線の量がここ２０年で、２倍と言うことはないが、明らかに増加してきていると言うことなんだ。
深尾　そのＸ線の増加が、人類の命運とどの様に関係しているんですか？
君島　今から１８年前、シリウスの挙動に興味を持ち、その意味を解釈したとても優秀な大学院生がいた。
深尾　大河内博士。
君島　そう。私が指導した中で最も優秀な学生だった。彼女は重力多体計算シミュレーションという高速コンピュータを用いた方法で、シリウスの挙動、その謎を解明しようと試みた。そして、大学院の最終年度、学位取得の半年前に、彼女なりの結論に達したのだ。その年の秋の学会で、彼女はその研究成果を発表した・・・

投影されるスライド。二つの星が楕円軌道を描いて互いの周りを回っているアニメーション。舞台の上に大河内志帆が現れる。フォーマルなスーツ姿。髪は黒々としており、声にも張りがある。あどけなさが残る顔立ち。２５歳の頃の彼女であろう・・・

大河内　　・・・おおいぬ座のアルファ星であるシリウスは伴星を有しており、５０年の周期で公転する二連星となっています。主星をシリウスＡ、そして伴星をシリウスＢと呼び、それぞれの質量は太陽の約２倍、約１倍となっています。ご存じのようにシリウスＢは極めて高い密度を持った天体で、重さは太陽と同じ程度なのに大きさは地球程度です。これは乗用車１台の重さが角砂糖２個分の大きさに凝縮されたほどの密度です。つまりシリウスＢは星が縮んでしまったものであり、このような恒星の老いた姿を白色矮星と呼びます。シリウスＢはかつては主星であるシリウスＡよりも明るく輝いていたと考えられています。当時のシリウスＢは太陽の７倍の質量を持った大きな恒星でした。それが、いまから４０００万年前、星の内部で水素やそれに次いでヘリウムの核融合反応が進み炭素と酸素が形成されたことにより赤色巨星という太陽の５０倍ほどの大きさの星へと変化します。中心部ではコアの収縮が起こりますが、逆に外層は更に膨張しまわりの空間へ拡散していくこととなりました。結果的にシリウスＢは太陽の６倍にあたる質量を消失し、コアが更に、地球と同程度の大きさまで、収縮することにより、現在のような白色矮星と成り果てたわけです。これらシリウスＡとＢは２億から２億５０００万年前に同時に生まれた双子の星だったのですが、互いの質量の違いにより、一方の寿命はすでに尽き、また他方は未だ輝き続けているという異なった成長過程を経ることになったのです。このようにシリウス連星系の歴史はほぼ解明されていると考えている方々もこの会場には多いものと思っておりますが、昔から未だ説明のつかない２つの現象が報告されていました。ひとつは、シリウスＡに金属元素が多く含まれていることです。核融合反応の進行ステージから考えて、この星で多量の金属が生成されることはあり得ません。シリウスＢが白色矮星になる前の巨星化した時点で持ち込まれたものではないかと考えられたこともありましたが、連星の距離が離れていることから、互いの物質の交換・移動は行われなかった可能性が高いことが示されて、この考えは否定されています。もう一つの謎は、白色矮星であるシリウスＢがＸ線を放射し続けていることです。これは水素やヘリウムなどのガスがシリウスＢへ吸い込まれていることを示しています。果たして、このガスの供給源は何なのでしょうか？　より近接し合った連星では主星がガスの供給源になっていますが、シリウスのように離れた連星系ではそのようなことは考え難いと言えるでしょう。不断のガス供給がどの様な形で行われているのか、今もって謎となっています。さて、この二つの謎を同時に解き得るひとつの解釈があります。それはシリウスＢが矮星化する際に失った太陽６個分の質量がその後どうなったかを考えることなのです。この大半は拡散により均等に宇宙空間に広がりましたが、一部は連星系のある特定の位置に一時的にトラップされました。ある特定の位置とは、連星の重力均衡点、すなわちラグランジュ・ポイントです。

スライドのアニメーションが次々に切り替わっていく。
そして、ラグランジュ・ポイントのスライドが示されて・・・



＜５つのラグランジュ・ポイント（L1-5）＞

二つの星が公転している場合、５つのラグランジュ・ポイントが存在します。星と星を結んだ直線上に３点（Ｌ１，Ｌ２，Ｌ３）、そしてそれらを正三角形の２点としたときの残りの頂点２箇所（Ｌ４，Ｌ５）です。二つの星の重さに大きな差がない場合、両脇のＬ４，Ｌ５は安定的に存在できないので、無視いたします。問題となるのは直線上の３点です。高速計算機を用いた我々の重力多体計算シミュレーションでは、拡散したシリウスＢのガスの１５％が、つまり約太陽１個分のガスが、この３点に一時的にトラップされた可能性が示さています。一時的と言っても天文学的時間スケールの話ですが・・・　これらラグランジュ・ポイントの安定性はあまり高いとは言い難く、トラップから１万年でＬ３のガスは宇宙空間に拡散、そして、２０万年から３０万年後にはＬ１にトラップされていたものは主星であるシリウスＡに吸収されました。トラップされたガス中には十分量の金属元素が含まれており、すなわちこれが、シリウスＡに金属元素が多く含まれていることの原因であると考えることが出来ます。そして、残るＬ２にトラップされたガスは１０万年かけて、ゆっくりとですが、シリウスＢに降り積もりつつあります。まさに今もそれは進行しているのです。それが、シリウスＢのＸ線放射の原因であると考えています。我々の計算では、トラップされたガスの量は太陽質量の５分の１程度ですが・・・　これだけの重さの水素とヘリウムが、このままシリウスＢに降り積もれば、燃料を供給していることと同じだから、若干の温度上昇は避けられません。しかし、この若干の温度上昇がくせ者なんです。白色矮星は普通の星のような柔軟性がない、つまり膨張して温度を下げると言ったサーモスタット機構が働き辛い構造になっているのです・・・

舞台の上に３人の男女が現れる。照明の影になっており、表情は見て取れない。

深尾　　・・・発表会場はざわつき始めた。そして、彼女の発表が終わるのを待ちきれず聴衆の一人が声を上げた。
聴衆１　つまり？
大河内　つまり、これが引き金となり、内部温度の上昇が止まらなくなる。そして・・・
聴衆１　そして？
大河内　炭素のコアに火が着く。

聴衆２　タイプⅠ超新星爆発？
大河内　そうです。白色矮星のデフラグレーション、爆燃が起こるんです。シリウスＢが炭素核融合爆弾となり、一瞬のうちに砕け散る・・・
聴衆３　シリウスはたったの 8.6 光年しか離れていない。そんな爆発が起こったら、地球もただでは済まないねえ（失笑する）
大河内　はい、太陽が一生かかって放出するエネルギーの３倍が３０日間で放出される計算に・・・
聴衆１　そんな馬鹿なこと、起こるわけないだろう・・・
大河内　私もそう思います。でも我々のシミュレーション結果が・・・
聴衆２　シミュレーションの妥当性はどうなの？
大河内　自信はあります。それに・・・
聴衆１　それをサポートする観測データは？
大河内　宇宙Ｘ線望遠鏡チャンドラ II で撮影された画像の解析から、シリウスＢのまわりに渦が形成されているのが分かります。そして、渦の先はラグランジュ・ポイント２。
聴衆１　その観測データは解像度が悪すぎ、信頼性に欠ける。他には？
大河内　マイクロ波背景放射の分布像を画像処理したものがあります。これからラグランジュ・ポイント２に高密度のバリオン、つまり水素とヘリウムが・・・
聴衆２　どこに高密度のバリオンが？
大河内　ここです！
聴衆１　私にはノイズにしか見えないが・・・　そもそも、恒星の周囲での背景放射測定は無理がある。
大河内　ですから、フーリエ変換を用いた新たな画像処理プログラムを組んで・・・
聴衆３　恣意的な結論を引き出すための？
大河内　恣意的って？　なにを言っているの、あなたは？
聴衆２　でなければ捏造か・・・
大河内　今、なんて・・・捏造？
聴衆３　ほら、反射鏡に付いた小さな傷を彗星と間違えて報告した例が・・・
大河内　私はただ・・・

舞台上、棒立ちになっている大河内。スライドはもう消えている。

深尾　そして、批判は指導教官の君島にも及び・・・
聴衆１　君島くん。
君島　彼女が行ったシミュレーションには妥当性があるんです。ですから、今度打ち上げられる予定のＭＡＰⅣで、シリウスＢの周辺を・・・　あれに搭載されるアニソトロピィ・プローブなら・・・
聴衆１　そんな馬鹿なことに、ＭＡＰⅣを使えると思っているのかね？
君島　ですから、きちんとしたプロポーザルを提出いたします。
聴衆３　それまずいんじゃないかな、君島さん。通る提案じゃないし、第一研究姿勢が疑われちゃうよ。そんなことに研究者生命かけてどうするの？
君島　しかし・・・
聴衆２　・・・あのさ、大河内って娘。結構頭切れるヤツだと思っていたんだけど、なんかどんどん変な方向に向かってねえ？ あれじゃあ、「切れる」って言うより、「切れてる」って感じだぜ・・・

退場する聴衆。舞台中央に棒立ちになったままの大河内。

君島　彼女の研究成果に対する批判は予想を超えていた。

深尾　　批判と言うより、それは嫌悪感というものに近かったように感じられますね。
君島　　学会というものは、それもまたひとつの生き物と捉えることが出来るんだ。だから、それは生理的な反応を過敏に示すことがある・・・

大河内が、立っている。彼女は立ち続けている。

大河内　君島先生。プロポーザルは？　ＭＡＰⅣへのプロポーザルはもう・・・
君島　　・・・内容を変えて出した。
大河内　それではシリウス近傍のバリオンの調査はどうなるんです。約束が・・・ 先生、私、先生を信じてました。信じていたのに・・・
君島　　意地になっても、仕方ないだろう。大河内くん。君も博士論文の考察の描き直しをしたまえ。あれでは教授会で賛同を・・・
大河内　シミュレーションの結果を様々な角度から検討してみました。その妥当性も含めて・・・　でも、私の考えは変わりませんでした。
君島　　君はまだ？
大河内　シリウスＢはタイプＩ型超新星爆発を起こす可能性があります。
君島　　可能性は可能性に過ぎない・・・　他の解釈を示しなさい。
大河内　他の可能性も当然検討しました。でも・・・
君島　　大河内くん。書き直すんだ！
大河内　・・・・・・

顔を覆い駆け去る大河内。取り残された君島に、深尾が問いかける。

深尾　　大河内博士は博士論文の考察を書き直すことなくあなたに提出してきた。あなたは無断でそれを書き直し、提出した。
君島　　彼女のためだった。すべて彼女のためだった。彼女に研究者を続けて欲しかったんだ。本当だ。私自身の研究者生命など些末な問題だった・・・
深尾　　でも、彼女は・・・
君島　　恨んだろう。心の底から憎んだろう・・・　彼女は私の前から姿を消し、私はシリウスの研究から手を引いた。
深尾　　贖罪・・・ですか？
君島　　贖罪？
深尾　　このプロジェクトの立案から、その目的地。そして彼女とのコラボレート・・・
君島　　そうかもしれない・・・ そして、私はやっと研究を終えることが出来る。いや、私の研究生命はとうに終わっていたんだ。あの時に・・・
深尾　　あなたも信じているのですか？　シリウスが爆発すると・・・
君島　　可能性は可能性に過ぎない・・・

君島がゆっくりと退場する。老人のごとき老いた印象。
それを見つめる深尾。舞台は暗転する。

#09 Impossible to Connect ー起動不能ー

舞台の上に囚われの大河内。少し離れて立っている小宮。傍らに警備兵が銃を持って立っている。

小宮　・・・君が破壊したハードウエアに保存されていた情報は可能な限り修復され、再起動された。しかし、肝心の通信システム、Faint voice との接続が確立しない。
大河内　・・・・・・
小宮　Faint voice との再コネクションは、起動マニュアルに従って行った。マニュアル自体も詳細に検討した。どこにも問題はない。しかし、コネクションが確立しない・・・　君は何か知っているんじゃないか？
大河内　・・・・・・
小宮　大河内。黙ってないで、答えろ！
大河内　・・・リストアされたデータの修復率は？
小宮　なんだって？
大河内　だから､私が破壊した本体のデータは100%修復されなかった｡そうなんでしょう？
小宮　当然だ。破壊時、それから遡った数時間のデータは・・・
大河内　（微妙に微笑む）
小宮　なにが可笑しい？　自分のしたことが分かっているのか？　君はプロジェクトの進行を、いや、実行そのものを妨害したんだぞ！
大河内　・・・・・・
小宮　君だってこのプロジェクトの成功を願っていたんだろう？ それをどうして？ 君の真意は何なんだ？　君島先生への復讐か？
大河内　復讐？　何故？
小宮　だって、君は・・・
大河内　そんなこと考えたこともなかったわ。・・・ねえ、小宮くん。Faint voice との再コネクションがうまくいかないのは、起動方法に問題がある訳じゃなく、Faint voice 自身が接続を拒んでいるからじゃないかしら？
小宮　Faint voice が拒む？　（笑って）それは通信ユニットに過ぎない。生体素子が使われているからと言って意志を持っている訳じゃないだろう？
大河内　だから、君はだめなのよ。
小宮　なにがだめなんだ！

いきり立ち、手に持っていた書類を大河内に目がけ投げつける小宮。投げつけられた書類がバラバラになり散乱する。

大河内　・・・・・・
小宮　いいか、大河内。探査機の打ち上げ日程に変更はない。もうすぐだ。それまでに Faint voice がつながらなければ、その時にはこの通信ユニットなしで飛ばすしかない。
大河内　・・・・・・
小宮　それでは意味がないだろう？　君自身の研究はいったい何だったのか、分からなくなってしまうだろう？　どうなんだ、大河内博士？
大河内　・・・私は別に気にならないの。もういいの・・・
小宮　いいって？　我々のプロジェクトはまさにこれから・・・
大河内　われわれ？　そんな懐柔でもするような言いぐさはやめて。
小宮　・・・・・・
大河内　通信ユニットの搭載なしで飛ばしたら、軍部に言い訳が立たなくなる。激しく糾

弾される・・・　君はそれを恐れているだけでしょう？

憮然とした表情で、後ろを向いてしまう小宮。

小宮　（もはや大河内を見ることなく、警備兵に向け）書類を拾ってくれ。

散乱した書類を拾い集め、小宮に手渡す。

小宮　（種類を手に持ち、整えながら・・・）おい、クリップはどこだ！　この書類を留めていた銀色のやつ。そのあたりに落ちているはずだ。捜しておけ。

と、退場しようとするが、立ち止まり・・・

小宮　それから、投薬を再開すると、第七憲兵隊に伝えろ。加えてチアミラールの使用許可を・・・　当然、麻酔薬としてではなく、自白剤としてだ。いいな。

と、小宮が退場。残された警備兵が敬礼をする。
ゆっくりと暗くなっていく舞台。

#10 Impermeable Border　ー不透境界ー

舞台の上に岡。

岡　　・・・何日、いや何年が経過したのか。一体どれだけの時間が経過したんだ？ 分からない・・・　ここには・・・　ここには、時の流れがない。もとより時など流れているのか？　時はただそこにあるだけ。それは・・・

ふと見ると、舞台後方に二人の少女。

少女達　そう。時は流れてなんかいない。ただここにあるだけ・・・／時が流れているのだとしたら、その速さはどれくらい？／１日に１日？／１年に１年だけ進む？／それでは・・・
岡　　意味がない・・・
少女達　あなたが感じている／感じていた「時の流れ」ば、単なる錯覚に過ぎない／過ぎなかった。それは、頭の中だけで存在している幻／幻想。目眩を感じた時に、世界の方が揺れ動いているのだとは、誰も／誰一人考えない。揺れ動いて見えるのは、幻想／錯覚・・・
岡　　幻想、錯覚・・・
少女達　心を／意識を／解放するの・・・
岡　　解放・・・
少女達　そうすればあなたも／あなたも全体を／すべてを感じることが出来る・・・
岡　　すべてを感じる？
少女達　ええ。
岡　　すべてとは？
少女達　時の／時間のすべて・・・
岡　　現在だけではなく、過去も、そして未来も？
少女達　ええ。
岡　　君は一体、何を・・・　未来が見えるとでも？
少女達　私はFaint Voice。未来を／予見し／伝える／量子通信システム・・・
岡　　予見？
少女達　そう。未来はここにある・・・　やがて／またはすでに／一人の男がやってくる／あなたではない誰かが。決められた通りに／ここまでやってくる。分かる／分かってた。決められていること／それは／約束。
岡　　どこからやってくる？
少女達　未来から／懐かしい未来から・・・
岡　　懐かしい未来？
少女達　またはまだ見ぬ／過去であるここへ・・・　ここがおわり／はじまり。意識のループが／ループが閉じるところ。ここが時の結び目。終着点であり／開始点であり・・・　感じるの。その男はやってくる。私を殺しに／助けに・・・

少女達が不意に消える。

岡　　その男は？　何のために男はやってくるって？　おい、君は一体・・・

と、岡の言葉が途切れる。ぶーんと言う低いハブノイズ。それを聞き、不審な顔つきになる岡。

岡　　待て、何か聞こえる。この外からか・・・

バチっというノイズ。顔を歪める、岡。

岡　ほら、何か聞こえる。

まわりを見回すが、少女達はもういない。

岡　外からだ。外部と繋がろうとしている・・・

高鳴っていく低いハブノイズ。更に顔を歪める、耳を押さえる岡。

岡　外からの音。電気信号、ノイズ・・・

ノイズは更に高まり、耐えきらないほどの音となり・・・　そして嘘のように途切れる。うずくまる、岡。

岡　どうした・・・　外部と繋がったのか？　ちょっと待て、外部？　ここの外って？　外？

舞台袖に一人の看護士、犀川が現れる。

犀川　・・・パンドラ。そうなの、彼女の名前は「すべてを与えられし女」。確かに、神々はありとあらゆるものを彼女に与えたの・・・
岡　外から声が聞こえる・・・
犀川　輝くほどの美貌、広範な知識、卓越した技術や能力・・・　彼女はすべてが備わっていた。それに加えて彼女は珍しい彫刻が施された金の箱まで持っていた。この不思議な箱は、ヘルメスからの贈り物だったの・・・
岡　この声。誰だ・・・　消え切れの記憶・・・
犀川　彼女は意識していなかったと思うけど、実はね、ヘルメスはもう一つの贈り物を彼女に与えていたんだ。なんだと思う？
岡　パンドラ・・・ 神々が土をこねて作り出し・・・ この話、そしてこの声は・・・
犀川　なんだと思う？　はい、時間切れ（速っ）。答えは「好奇心」だったの。んでもって、ヘルメスはしれっとした顔でこういう言ったんだって、「私の送ったその金色の箱の中には見てはいけないものが入っているので、決して開けてはいけないよ。決してね・・・」　ねっ、のっけから波乱含みって感じだろっ？　っていうか、策略感じない？　神々による共同謀議の可能性大。
岡　この声は・・・　どうして記憶が・・・

思い出そうと頭を押さえてうずくまる、岡。

犀川　さて、この展開や、いかに。気になって眠れませんって感じでしょ？　でも、この話、今日はここでお終い。続きが聞きたきゃ、意識を取り戻せ。戻ってきて、心電図にイタズラしたり、エアコンいじったりしろよ。部屋の温度－４０℃に設定したって、今回は怒らないから・・・　いや、怒るから（速っ）、もし怒られたくてやってたんなら。きちんと眉間にグーパンチしてやるから・・・
岡　戻る？ 戻るって？ 帰還シークエンス・・・ 「帰還」って？ 記憶の関連が・・・どうして？　なにがあった？　何が起こって、記憶が・・・
犀川　栄養液パックがもうすぐ空ね。ちょっと取りに行ってくる。（と、出て行こうとするが、立ち止まり）あと二日・・・　二日なら待てる。でも、それが限界。それ

が、限界なの・・・　ねえ、聞こえた？

犀川、ゆっくりと退場する。舞台の上には岡一人。

岡　　聞こえてる。でも、どうしたら？　君は誰？　そして俺は？

困惑する岡を闇が包み込む。

#11 Right Donation　ー依願献体ー

舞台の上に大河内がいる。現れる深尾。

深尾　大河内博士？
大河内　深尾大尉・・・
深尾　聞きました。小宮の差し金ですか？
大河内　はい・・・　彼、もうすぐこちらへ来ます。薬が完全に効いてきた頃を見計らって・・・
深尾　質問があって来たのですが、もう帰ります。ほんと、看守長に聞くまで、知りませんでした。私に無断でこんなことになっているとは・・・
大河内　（帰ろうとする深尾を制し）質問があるのでしたら、お受けいたします。それに今なら、素直に答えることが出来そうです。チアミラールの影響が出始めて、嘘をつくのにかなりの体力を消耗しそうですから・・・

深尾、躊躇するが・・・

深尾　ありがとうございます。では、お言葉に甘えて・・・　辛くなったら仰ってください。すぐに退散いたします。

と、舞台後方に中谷の姿が浮かび上がる・・・

中谷　大河内志帆の二卵性双生児、遙と宙は彼女の実家で暮らしていました。出産から２年後、大河内が医学部に再入学してからは、彼女の母、静枝の手で育てられることとなります。
深尾　大河内志帆の父親は？
中谷　彼女が高校生に時に離婚して家を後にしています。
深尾　・・・・・・
中谷　実家と大学の距離は通学出来る距離とは言えませんが、それほど遠方ということはなく、大河内は毎週末、遙と宙のもとに帰るという生活を送っていたようです・・・

電話の着信音。と、中谷の照明が消える。電話に応じる大河内。舞台後方に遙が現れる。

遙　ママ、ママ。
大河内　どうしたの、遙？　こんな時間に・・・
遙　ママ。火事なの・・・
大河内　火事！　家が？
遙　うん・・・
大河内　遙、おばあちゃんは？　消防署に連絡し・・・

唐突に電話が切れる。受話器に向かい叫ぶ大河内。

大河内　遙？　遙！　・・・電話は二度とつながりませんでした。所轄の消防署へ問い合わせてみましたが、火事が起こった事実はなく・・・　ただ、気になった私は、急いで実家にむかいました・・・ イタズラでした。たわいのないイタズラ・・・
遙　ママ、私ね。私・・・
大河内　遙？

遙　　なに？
大河内　「狼少年の話」を知ってる？
遙　　うん。狼が来るぞー・・・
大河内　分かってるでしょ。ね？
遙　　・・・ごめんなさい。でも・・・
大河内　嘘をついてでも、ママに会いたかった？
遙　　うん。でも、これは宙が・・・
大河内　そうやって、自分の嘘を宙の所為に・・・
遙　　違うの。宙が言ったの。この家が火事になるって。本当よ。
大河内　宙が言うわけないでしょう。
遙　　言ったんだもん・・・
大河内　いい加減にしなさい。宙は・・・

と、中谷に再び明かり。

中谷　　成長した遙は、やがて地元の公立小学校に通い出します。ただ、宙の方は・・・
深尾　　どうした？
中谷　　病気を理由に・・・
深尾　　病気？
中谷　　・・・自閉症です。重度の・・・　医療機関や訓練施設の利用は出来たはずですが、避けていたフシがあります。宙は半ば実家に閉じこめられた形で育てられていました・・・

中谷への明かり消える。

大河内　物静かで泣き叫ばない子供でした。感情の起伏も少なく・・・　生後１年の段階でポジトロン検査で脳機能に問題が見つかり、自閉症の可能性が担当医から仄めかされていました。実際、宙は叫ぶことも、泣くことも、笑うこともしませんでした。いえ、出来なかったのです。自発的行動はほとんど見られませんでした。当然、専門医療機関の利用も考えました。ですが、どんな機関も宙には適していないように感じたのです。　だから、私は母とともに、いえ、遙のことを忘れてはいけませんね、私たち三人で宙を育てることにしたのです。宙のための支援プログラムや教育用ソフトウエアは時間やお金をあまりかけずに手に入れることが出来ましたし・・・　コンピュータ支援での視覚情報を中心としたコミュニケーションの確立を目指したり、宙を中心とした生活環境の構造化と単純化を計ったり・・・
遙　　ママは宙のこと知らな過ぎる。宙はしゃべれるんだよ。だって、私とはよくおしゃべりするもの。ママにだって話しかけているわ。でも、ママは宙の言葉を聞こうとしないだけ・・・
大河内　・・・・・・
遙　　ママは宙のことを知ろうとしていない。宙は遙やママとは少し違っていて・・・宙は未来が見えるの。
大河内　未来・・・
遙　　そう。未来が見える。だから分かったの。火事になるのが・・・
大河内　火事に、なる？
遙　　そう。なるの。これから・・・
大河内　遙はこんな風に言った。「明日なのか、今度の冬なのか、そんなことは分からない。分かっているのは私が炎に包まれること。それだけ・・・」　そして・・・
遙　　ホントはね。宙は未来しか見えないの。だから・・・

大河内　未来しか見えない？
遙　なんて言ったらいいのかな？　宙の中では未来が過去になってる・・・　（首を横に振り）未来が、過去と現在と一緒に混じり合っていて・・・　だから宙はいつも混乱しているの・・・　困っちゃってるの・・・　遙にはそれが分かる。だって・・・
大河内　だって？
遙　だって・・・　私たちはずっと一緒だったから・・・
大河内　遙と宙は生まれたときから一緒だった・・・いえ、生まれる前から、おなかの中でも一緒だった・・・　だから、遙には分かったのかも知れません・・・
深尾　宙は、その子は未来を見ることが出来たのですか？
大河内　どう思います？　未来を見ることが可能であると思います？
深尾　いえ。
大河内　でも・・・
深尾　実際その火災は起こっていた。予言通りに・・・

中谷に明かりが射し、遙が退場する。

中谷　・・・今から８年前、大河内志帆が３５歳に時に、つまり三豊生命科学研究所へ就職しての２年目にあたりますが・・・　彼女の実家が火災で焼失します。その時の火災で不幸なことに２名の命が・・・
深尾　遙と宙が？
中谷　いえ、遙と母の静枝です。宙は静枝の手で救出されています。命に代えて守ったと言ったところです。遙の方は全身の 40%のやけどと気道熱傷という、重篤なショック状態で病院へ搬送されています・・・

中谷への明かりが消え、大河内の傍らに白衣の男が現れる。

医師　・・・何故ですか？　ラジカル補足剤とそれに加えてメチルフェニデート、クロミプラミンの投与の理由が分かりません。いくら冷やしたって、この子の身体はすでに壊死を起こし始めている。もう手は尽くしたのです。こう言っては何ですが、彼女は天国への階段を上りつつある。私たちはここで遙ちゃんが安らかに天に召されることを・・・
大河内　・・・・・・
医師　聞いていますか？　あのね、あなたは量子心理学者でしょう？　分からないのですか？　脳波計をご覧なさい。この子は痛がっている。耐えられない痛みを感じ続けている。気を失うほどの・・・　でも、投与された化学物質がそれを許さない。あなたは一体何を・・・

と、飛び込んでくる看護士。

看護士　三豊生命科学研究所から、輸送班が到着しました。
医師　み、三豊生命科学研究所からって？

首を横に振る看護士。その背中を突き飛ばすように舞台上に白衣の集団が現れ、包帯でぐるぐる巻きにされた遙のまわりを取り巻く。白衣の一人が口を開く。立ちつくす大河内。

白衣１　移送準備に取りかかります。

この言葉を合図に、忙しく機器を操作したり、遙の体を検査する白衣の集団。

白衣２　冷却装置接続
白衣３　血液還流装置始動
白衣４　フェニルブチルニトロン、100mg 投与・・・

慌てる医師。白衣の集団に向かい・・・

医師　何をしている？　冷却還流なんて・・・

と、心拍が停止したことを示すアラーム。

白衣１　心停止しました。
白衣２　自発的呼吸消失
白衣３　瞳孔固定。対光反射消失。角膜反射消失・・・
白衣４　毛様脊髄反射の消失、眼球頭反射の消失。前庭反射の消失・・・

傍らに立っていた白衣の男（白衣５）が医師のもとに歩み寄る。

白衣５　死亡診断書にサインを・・・
医師　死亡診断書って？　なんだね、君は！　それに、まだ脳波が！
白衣５　改訂された「献体に関する法律の軍事研究への運用時の死亡判断指針」および「死亡判定実施マニュアル」に従って行われている措置です。（懐からプラスチック片を取り出し）これが三豊生命科学研究所への献体確認書と移譲書・・・
医師　献体って？　大河内さん。あなたは・・・
大河内　・・・・・・・（わななきながらも立ちつくしている）
白衣５　山之内先生、急いでサインを。本遺体（ドナー）は１時間以内に三豊生命科学研究所の量子心理学ラボに移送されます。手続きがありますので、こちらへ・・・大河内くん、同行する準備を・・・
大河内　あの、私・・・　宙のもとに付いていたいんですが・・・　私の息子が、ここに入院しているんです。
白衣５　大河内くん。ここからは１分１秒が勝負だぞ。君の娘さんの好意を無にしたくない。君だってそうだろ？
大河内　わたし・・・　宙のもとに・・・
白衣５　（白衣の一団に）さあ、移送準備を急いでくれ！

白衣５、医師を引きずるようにしてともに退場する。白衣の一団、包帯姿の遙とともに光の中に消失する。
舞台の上は大河内と深尾だけとなる。後退るようにイスに腰を下ろす大河内。

大河内　・・・細胞間量子通信、つまり人間の意識の瞬間移動の研究のために、その頃の量子心理学者は、私も含めてみんな、若くて発達途中の脳細胞を、喉から手がでるほど欲していたのです。記憶を秘めた健康なニューラルネットワーク、若い人間の脳細胞です。コンピュータ上でのシミュレーションの段階はとうに過ぎ、私たちは実際の脳細胞を用いた実用試験に移っていた。そして、辺り構わず、手当たり次第に、本当にそう言う形容が当てはまるほどに、献体、つまりドナー集めに必死になっていました。
深尾　三豊生命科学研究所は研究者全員に家族の献体契約を強要していた。家族の身に何かあったときには・・・

大河内　強要ではなく、依願です。後悔だってしていません。正しいことをしたと思っています。だって・・・　遙の脳は無事量子スキャンに成功し、その構造と意識と記憶がハードディスク上に完全にコピーされたんですから。そしてその情報に基づき、もう一つの脳細胞が作られました。遙の脳のから取られ脱分化された細胞が培養緩衝液に浸された状態で、ある刺激により分裂を開始します。その細胞分裂は記憶媒体に刻まれている構造情報により制御されていて、そして遙の脳のカーボンコピーができあがるのです。活発に分裂を繰り返す脳細胞は、まるで、受精した卵子そのもので・・・　私たちはそれを「受精卵」と呼んでいました。

深尾　受精卵？

ある種の倦怠感（眠気？）が大河内を襲い始めているようだ・・・

大河内　ええ。まさに受精卵でした・・・　私たちは・・・　いえ、私は何度でも遙を産みだせたのです。寸分違わぬ構造と記憶を持った遙を・・・　培養液に浸されたシリコンウエハー上に・・・　薄く、広く、元気に増殖した遙・・・　その姿形は・・・　人とは呼べぬものだったでしょう・・・　でも・・・　それは・・・　確かに・・・　遙でした・・・　確か・・・　に・・・

舞台がゆっくり暗転していく・・・

#12 Personal Cracking　ー私的侵入ー

舞台上に君島。少し離れて小宮。

小宮　発射を明日に控え、すべての準備は整っています。衛星軌道上でドッキング予定のブースターも所定の位置に着いています。
君島　もう、停止は出来ない・・・　そう言うことだな？
小宮　もはや打ち上げの主導権は宇宙工学屋の手に渡っています。彼らは打ち上げを予定通りに実行すること以外興味を持っていません。いや、それが義務なのです。ロケット打ち上げの予定は３年先まで、隙間なく決まっています。たった１日の遅れですら、全体の予定を大きく狂わせてしまうことになるのだと、彼らは考えています。量子通信システムの送信部のロケット内への移動はすぐさま行われるとのことです。
君島　このままコネクションが確立しなくても・・・
小宮　ええ、コネクションは地上受信部の量子コンピューティングシステムにあるとおおかたの者が考えているようで・・・　それに・・・
君島　彼らのほとんどは、量子コンピューティングシステムや量子通信それ自体を最初から疑問視している。
小宮　プロジェクト予算の獲得に関しての中軸であった量子通信。しかし、それが失敗したとしても、彼らは責任を問われる立場にはない。責めを負うのは我々だけです。だから・・・
君島　小宮くん。私から打ち上げ延期の要請を・・・
小宮　先生。そんなお願いが聞き入れられる状況ではすでにないでしょう？　コネクションは本日中に確立させねばなりません。だから・・・　私は、強硬手段をとることを決意しました・・・
君島　強行手段？　君は大河内くんに何を？
小宮　ある薬物を少々処方いたしました。自白剤です。
君島　自白剤？　君はなんてことを！
小宮　仕方ないんです。大河内は、やつは、この件に関して何か知っています。分かるんです。感じたんです。
君島　君は・・・
小宮　許してください。でも、これしか方法はない。じっくり考えている余裕などないんです。量子通信システムはこのプロジェクトの核です。それが動かないまま探査機を発射したところで・・・
君島　小宮くん。大河内くんの身体にもしものことがないよう、気を付けて行い給え。

と、君島が退場する。

小宮　（吐き捨てるように）なにが「気を付けて行い給え」だ。あんたはいいよ。どうせこの先、長くないんだから・・・　でも、私は違う。こんなところで研究者生命を失うわけにはいかないんだ。量子通信システムが確立しなければ、このプロジェクトは軍部からクズとして評価されてしまう。そうしたら、サブリーダーの私の立場だって・・・　もう研究予算の獲得もままならなくなる。定年までの後２０年もの間、大学の片隅で、窓際族よろしく出がらしでも飲んでいろって言うのか？　いいですか、君島先生。例えあなたがすべての責任を負って研究から身を引くと明言してみたところで、どうにもならないんだよ。この時期に、人生のこの時期に失敗なんて出来ないんだ。絶対に・・・

小宮が退場すると同時に登場する中谷と深尾。

中谷　　投薬再開の件、本当に済みませんでした。私からも抗議したんですが・・・　プロジェクト優先の方針ですから、第７憲兵隊も強く出られなかったみたいで・・・軍事研究所には独自の強い権限が与えられていて・・・
深尾　　いいんだ。君の努力は認めている。
中谷　　ありがとうございます。でも、これで大河内に直接会うことは出来なくなってしまいましたね。
深尾　　残念だが、仕方あるまい・・・
中谷　　だからですか？　大河内の住居が見たいと言い出したのは？
深尾　　・・・それしか、思いつかなかった。そう言うことだ。
中谷　　ですね・・・　（立ち止まり）着きました。ここが、彼女の住まいです。一人暮らし、男の出入りなし、女の出入り間なし・・・　どうでもいいことですが、報告書にはそう書いてありました・・・

中谷がスロットにカードを通し、テンキーを叩くと、ドアの開閉音。

中谷　　事件後、捜査の手は入りましたが、基本的にはそのままになっています。
深尾　　大河内志帆の部屋は整然としていた。整然とし過ぎていた。彼女自体の生活がそのようなものであったのか、それとも捜査が行われたことにより・・・
中谷　　（机の上のラップトップコンピュータを示し）で、これが彼女のホームコンピュータ端末です。捜査対象となりましたが、変わったことはなにも・・・
深尾　　そうか。当然、ここでは、完全なパーソナルユースのコンピュータですら監視されているんだろう？
中谷　　はい。
深尾　　では、外部との通信ログにも問題はなかったというわけだな。
中谷　　ええ、不審な点はなにも・・・

机の引き出しを開け、何かを発見する深尾。手の中のそれはコンピュータの周辺機器のようにも見える。長いコードが垂れ下がっており・・・

深尾　　これは？
中谷　　（のぞき込んで）・・・ああ、それはあれです。Ultimate☆Kingdom（アルティメート☆キングダム）のパッドですよ。
深尾　　アルティメート？
中谷　　だから、バイオニック・アーツ社のネットゲームの・・・　もしかして、知らないんですか？
深尾　　（こっくり頷く）
中谷　　うぞ。今、本国において三人に一人ははまっているという、あのUltimate☆Kingdomですよ？　この島では四人に三人は持っています。それをご存じない？
深尾　　全く・・・
中谷　　（不思議なものを見るような眼差しで深尾を見つめる・・・）
深尾　　教えてくれないか？
中谷　　（不思議なものを見るような眼差しで深尾を見つめ続けている・・・）
深尾　　だから、不思議なものを見るような目付きで私を見るのはやめてくれないか？
中谷　　（我に返り）失礼しました。これは有名な体感型ネットワークゲーム用の生体ーシリコンパッドなんです。
深尾　　ネットワークゲーム？
中谷　　同時参加出来るネットＲＰＧです。ロールプレイングというより、コンピュータ上に構築された架空世界です。そこには都市もあれば、野山やら白砂の浜辺だっ

て存在している。このパッドを利用して、自らがそのネットワークゲームの中に入り込み、その架空世界を、あたかも現実であるかのように、体験することが出来るのです。このパッドを耳の後ろの部分にこうやって電解ペーストで貼り付けて・・・

深尾　ソリトナイズ・・・

中谷　何ですか？

深尾　サイバーフォースのサイソル達が行う電脳空間への侵入法と・・・

中谷　いえ、それとはレベルが違います。意識や遺伝情報のソリトン化まで行っているわけではありません。バイオニック・アーツのこれは単に擬似的なイメージを共有するための体感パッドですから・・・　一度体験してますか？　別にゲームで遊んでくださいと言っているわけではないのです。彼女がはまっていた世界の中に、何か秘密が隠されているのかもしれないですよね・・・

中谷を照らしている照明がだんだんと暗くなり、そして消える。照明が深尾だけを照らしている。

深尾　・・・私には、大河内博士がゲームにのめり込むような人には思えなかった。漠然とそう感じていた。

舞台後方に霧生。手にどんぶりを持ちうどんを啜っている。

霧生　どうした、深尾？

深尾　昼食時に悪いが、聞きたいことがあって・・・

霧生　何だ？

深尾　（手に持ったパッドを示し）このようなネットゲーム用のシリコンパッドをソリトナイズのリンカーとして使うことが出来ると思うか？

霧生　・・・・・・

深尾　どうなんだ？

霧生　答えはYesだが、本質的にはNoだ。

深尾　どういうことだ？

霧生　確かにソリトナイズで用いるシンクロ・パッドは、基本的に、BA社の生体-シリコンパッドとほぼ一緒の構造だろう。だが、それだけあればソリトナイズ出来るというわけではない。ソリトナイズのためには、強力な高速演算システムに加え、そのための中核ソフトウエア、それをサポートする膨大な数に上る支援プログラムのすべてが必要だ。つまり、この「割り箸」でうどんを食べることは出来るが、割り箸があったからといってうどんが食べられるわけではない。うどんそのものがなければ・・・

深尾　やはりそうか・・・　霧生、実はこのパッドは大河内博士の部屋にあったものなんだ。

霧生　博士の？　彼女もまたUltimate☆Kingdomの虜だったというわけか。ここの研究者は何故か皆、あのゲームにはまる・・・

深尾　通信ログは、彼女の端末が、毎日、長時間、そのネットゲームへ接続されていたことを示している。しかし、私には、彼女がその手のゲームに没頭するようには思えなかった。そして、ログの再調査を依頼した・・・

中谷に明かり。神妙な顔つき。

中谷　過去１年間の彼女の外部通信ログを再捜査してみました。

深尾　どうだった？　何かを見つけてしまいましたって顔をしているが・・・

中谷　　ええ、その通りです。クラッキングの可能性が浮上してきまして・・・
深尾　　彼女の端末がクラッキングされた？
中谷　　逆です。彼女の端末からのクラッキングです。
深尾　　彼女がクラッキングを？
中谷　　DNS サーバという各コンピュータシステムのアドレス、住所を管理しているサーバへの侵入が行われたことが明らかになりました。
深尾　　この研究機関の？
中谷　　そうです。彼女は DNS スプーフィング、すなわち DNS サーバの情報の書き換えを巧妙に行い、自分自身の端末からの接続先の情報を偽っていたのです。書き換えはごく小規模で、システム全体に障害を起こすようなものではありませんでしたが、当然 DNS 情報の改竄はそれ自体、重大な犯罪行為と言えます。
深尾　　だろうな。で、私が知りたいのは、何を隠そうとしてそのような小さな偽装工作を行ったかだ。
中谷　　偽装された接続先はたったひとつだけです。
深尾　　ネットゲーム？
中谷　　お察しの通り、まさにそれです。彼女がのべ 100 時間以上に渡り接続していたのはネットゲームのサーバのひとつなどではなかった。彼女はネットワークゲームなど、全く、していなかったんです。
深尾　　ではどこに繋がれていたのだ？
中谷　　・・・・・・
深尾　　正しいアドレスから、特定できたのだろう？
中谷　　はい。
深尾　　接続して調べたのか？
中谷　　それが・・・　現在、接続できない状況ですので・・・
深尾　　接続できない？
中谷　　そうです。現時点では、サーバシステムとして機能していません。
深尾　　現時点では？
中谷　　彼女の接続先は、この研究機関の内部・・・
深尾　　まさか・・・
中谷　　彼女自身が物理破壊したハードウエアです・・・

明かりが消え、中谷退場。霧生はすでにうどんを啜るのをやめている。

霧生　　・・・大河内博士がホストコンピュータにクラッキングを？
深尾　　そうだ。で、彼女のホームコンピュータ端末を、ちょっと強引なやり方だったが、探ってみたら、ある種のプログラムが出てきたんだ。それは Ultimate☆Kingdom のコネクション・プログラムに偽装されて・・・　いや、正しくは、そのネットゲームのプログラムを書き換えたものだった。
霧生　　割り箸だけではなく、うどんの方も持っていたわけだ。ソリトナイズとまでは行かないまでも、彼女はこの研究所のホストコンピュータの内部を、あたかもネットゲームのプレーヤーのように体験することが出来たかもしれない。その生体-シリコンパッドを使って・・・
深尾　　お前もそう思うか？
霧生　　可能性としては・・・　偽装した上で長時間のアクセスを行っている。たぶんコンタクトに成功していると考えるのが順当ではないか？
深尾　　そう。彼女には、他の研究者に内緒でホストコンピュータの内部を探る必要があった。こっそりと侵入を繰り返し続け、そして・・・
霧生　　そして？
深尾　　そこで彼女は・・・　何かを見つけた。何かを知った。何かに気付いたんだ。そ

れが・・・

霧生　ハードウエアの物理破壊につながった？

深尾　（こっくりと頷く）破壊されたコンピュータはデータのリストアも終了し、すでに再起動されている。当然、破壊時とその直前のデータは完全に消滅していて完全回復してはいないが・・・

霧生　秘密を解く鍵は、そこにあると？　しかし・・・

深尾　・・・霧生。手を貸してくれないか？　彼女のソフトウエアとこのシリコンパッドを使ってコンピュータに侵入したい・・・

と、舞台は暗転する。

#13 Cyber-Tag　ー仮想遊技ー

舞台奥に座っている大河内。一本のサスがそれを浮かび上がらせていく・・・ 舞台袖には一人の少女、遙が立っている。

大河内　・・・深尾さん？　クリスマスでした。ホワイトクリスマス・・・　あの年の冬はとても寒くて・・・　母の実家では雪がちらついていたんです。小さなケーキだけではなく、私は遙と宙に体感ゲームをプレゼントしました。本当は教育ソフトに簡単なゲームが付いただけのものだったのですが・・・　かくれんぼ、サイバー鬼ごっこ。確か、Cyber-TAG（サイバー・タグ）そんな名前の付いたゲームが付属していて・・・　生体-シリコンパッドで繋がることができ、そして出来合いの仮想世界（Map）で鬼ごっこを体験できるというものでした。遙はそれが大のお気に入りで、暇さえあれば、やり続けていたといいます。宙と一緒に・・・　その体感ゲームには、接続用パッドが二つ付いていて・・・　遙はその一方を宙に付けてあげ、そしてもう一方を自分自身の耳の後ろに・・・

舞台後方の遙、もどかしそうにパッドを耳の上に貼り付ける。

大河内　そして、隣に微動だにせず座っている宙に笑いかけ、こう言うの・・・
遙　（隣の誰かと話すかのように）今回のタグ・フィールドはダンジョン 3。タイムは 30 分。行くわよ、宙。ポチッとな。
大河内　当時の生体-シリコンパッドは出来が悪くて、かぶれたり、低温やけどを起こしたりそんなものでした。だから私は、「遙、Cyber-TAG をやりすぎてはダメよ。でないと、遙も、宙も、耳の後ろが真っ赤に晴れ上がっちゃうぞ。」
遙　大丈夫だよ、きっと。遙も宙も皮膚は強い方だから・・・
大河内　そうは思えないけど。
遙　それに宙がハマってるのよ、このゲームに。
大河内　宙が？
遙　うん。大好きみたい。
大河内　・・・宙はパッドを取り付けられながらも身じろぎもしません。見た目には自発的活動が起こっているように見えない・・・　でも遙は、そのゲーム空間の中では、宙は自由に動くのだと言います。私は最初、遙がまた、自分の感情を宙に投影し・・・　そんな風に思っていました・・・
遙　ママもやってみれば分かるよ。
大河内　・・・ダンジョンの中で行われる鬼ごっこ。鬼は相手の残していった足跡をたどり、それにたどり着く・・・　幾多にも折れ曲がり、狭くなり広くなり、また幾層にも重なり合った迷路。小さな RAM チップの中に立ち現れた巨大迷宮。その中を、私は宙を求めてさまよい歩く・・・
遙　ヒントを捜すの。宙が残していったヒント。
大河内　宙は私の横に張り付いたまま微動だにしない。焦点の合わぬ目を虚空に向けて・・・この子が、本当にこの迷宮の中にいるというのだろうか？

アイテムを拾ったと言うような効果音が響く。

遙　ヒント発見！
大河内　ヒント？
遙　そう。宙が残していったヒント。なにを拾った？
大河内　オモチャのミサイル。
遙　ミサイル？　（しばし考え込んで）・・・ロケットじゃない、それ？　字が書いて

あるでしょ、横のところに・・・　シリウス１号って。
大河内　シリウス？　ええ。
遙　ダメだよ、宙。そんなヒントあげたって、ママは分からないでしょ？　それは私が大きくなったら乗ることになっているロケットなの。ロケットは私を乗せてはるか宇宙を目指す。目指しているのは、その名の通り、シリウス。冬の夜、南の空に燦然と輝く・・・　だから、このヒントは・・・
大河内　ダンジョンの南側、一番高いところ？
遙　たぶん正解。走って。時間がもう残り少ない・・・
大河内　私は走った。全速力で・・・ただの体感ゲームなのに、私は本気で走っていた。呼吸が乱れるほどに・・・　遙？　それにしても広いダンジョンね・・・
遙　そう。広いよ、すごく。付いてきたマップは、小さなやつばっかりだったんだけど、これは・・・
大河内　これは？
遙　これは、宙が作ったやつ。
大河内　宙が？
遙　そうだよ。宙はすごいんだよ。自分でダンジョンマップを作れるんだよ。
大河内　（ひとりごちて）まさか、宙がプログラミングなんか・・・
遙　彼自身がプログラムみたいなもの。だって、プログラムは宙の頭の中に入っていて、繋がったとたんプログラムがロードされる・・・
大河内　そんなことって・・・
遙　だってそうなんだもん。最近じゃ、私の動きまでプログラムされちゃってるのかと思うほど・・・　どこで見つかるのか、どこで見つけるのか、それまで分かっているのよ。だって宙は・・・
大河内　未来が分かる？
遙　・・・・・・

明かりが消え、少女は退場する。

大河内　・・・私は走りました。狭い路地を抜け、南を目指して。細い階段を行く段も駆け上がり、最上階を目指して・・・　そして屋上へ出たんです。夜空が見えました。月のない空。満天の星空。天の川・・・　そして、南の空にはおおいぬ座がありました・・・　燦然と輝くシリウス。青白きシリウス・・・　そして、そこに宙がいました・・・

舞台中央に冒頭からうずくまっていた「何か」が緩慢に動き出し、立ち上がる・・・薄暗い光の中に浮かび上がった「それ」は、ロスト・プロフェットである・・・満天の星空を背景に立ちつくすその姿。氷のように冷たい、そして何の感情もうかがい知ることの出来ないふたつの瞳・・・

大河内　無表情な二つの瞳が私をしっかりと見つめていました。焦点の定まらない目ではなく、しっかりとした意志を感じさせる目で・・・　深尾さん。分かりますか？私たちは、初めて見つめ合えた・・・そう。初めて本当に見つめ合えたのです。宙の意識と私の意識・・・　ゲーム終了の時が迫っていました。鬼はタッチしなければならなりません。早く宙に触れなければ・・・でも足が動かないのです。宙の表情は少しも変わりません。ここで、こんな形で、ゲームが終了するのをあらかじめ知っていたかのようにも見えました・・・　ゲーム終了まで後十秒。カウントダウンがはじまっても、何故か、私はただ立ちつくしたまま・・・　その時でした。宙の口が微かに動いたように見えました。声は聞こえませんでしたが、言葉の意味だけは伝わってきました。宙はこう言ったんです。「世界はすでに未来

まで書き尽くされてしまっている」と・・・　そして、「ぼくにはそれが分かるけど、どうしてみんなはそれを理解しようとしないの？」と・・・

と、高鳴っていく音響・・・
睡魔に襲われ、浅い眠りに落ちる大河内。そして、舞台中央で虚空を見つめているロスト・プロフェット・・・
スクリーンに冒頭のロケットの打ち上げ映像が流れ始める。ロケットが大空を目指し飛び立っていく、無音の映像、それがサンドノイズの中から湧き上がり、そしてまたノイズの中に沈み込む。
天を目指すロケットが不意に爆散する。ロケットは何度かの小爆発を繰り返しながら、完全に砕け散る・・・
と、ロスト・プロフェットは懐から何かを取り出す。それはまるで腐った魚だ。無数の線虫がその表面で蠢動を繰り返している。その一方からは、へその緒のようなコードの束が伸びており・・・　しかしそれは、腐肉などでは決してなく、コネクション・ギアなのである。スイッチを押すと赤い LED の明滅とともにくぐもった電子音声が響く・・・
「サイバートロン 8000mf 起動しま・・・」
しかし、音声は途中で電池切れでも起こしたかのように途切れてしまう。
耳元でそれを振ると、また電源が入る。
「起動します。弊社の生理電解ペーストを使用し側頭部に貼り付けてください。なお、弊社以外のペーストを・・・」
パッドを耳の後ろに貼り付けると、スクリーン上に「connecting……」の文字が浮かび上がり、次いで以下の文字が浮かび上がる

cYBERtRON 8000mf cOnnectiOn gEAR
#6679-63549b957-t836

「接続成功。警告。本ソフトウエアの使用期限は・・・」という音声とともにスクリーンは警告画面へと変わる。が、彼が目を閉じると警告画面は滲むかのように消え去りコネクションモード画面へと切り替わる。通信状況（強度[iNTENSITY]や速度[rATE]）を示している。口にスイッチのような基盤をくわえる。口腔内で明滅する緑色の LED。
スクリーンに浮遊するひとつのアイコンを選択。ウインドウ上で展開。
地図の様なものが展開。
「第７軍事研究所、医療研究棟」の音声。
天を仰ぎ見る、ロスト・プロフェット。そして、走り去る。
唐突に闇となる舞台。

#14 Bystander　ー袖手傍観ー

舞台の上に深尾。手に持った生体-シリコンパッドを耳の後ろに貼り付ける。舞台奥に中谷。

中谷　サイバーフォースの全面支援のもとでの侵入ですから、何も問題はないと思いますが・・・　でもちょっと心配です。
深尾　別にソリトナイズするわけではない。単なるネットゲームのプレーヤーとしての侵入だ。
中谷　そうですね・・・　しかし、大河内博士のソフトウエアはネットゲームのそれとは全く違っていて、まだ不明な点が・・・
深尾　危険なことは分かっている・・・

照明が深尾への単サスとなる・・・

深尾　（ひとりごちて）中央憲兵隊に出した調査延長の嘆願は一蹴された。私に残された時間はあと１日。たったそれだけだ・・・　興味本位ではない。事実を確認したい。私が考えていたのは、それだけだった・・・

舞台の上に散在して立ち現れるサイソル達。全員シンクロパッドを付け、完全装備の状態だ。

霧生　・・・これは「実戦装備でのソリトナイズ」の演習だ。しかし、遠足気分というわけにはいかないぞ。小田、今回の全部隊の情報量は重いぞ。しかし、これで動き回れなければ・・・
小田　サーバーフォースではない。
霧生　そうだ。
佐伯　命は預けたぜ、小田。
小田　ｄＢって呼べよ。お前らの命は預かった・・・
小島　頼もしいね、ホント。
吉井　小島、チャチャを入れるな。頼んだぞ、ｄＢ。
小田　MOS システム起動。ソリトナイズの準備完了。霧生中尉、侵入命令を。
霧生　サイバーフォース 2049、レッドベレー、侵入開始。ランディングポイントはホストサーバ D-226。
小田　デスティネーションをホストサーバ D-226 に固定。ポートスキャン・・・　侵入経路確定。通信速度確認。障害なし。サイバーフォース 2049 ソリトナイズします。

音響とともに、サイソル達が爆散するように退場。

中谷　深尾大尉。リラックスです。いいですか、内部での移動は最初、違和感がありますが、すぐに慣れます。では、ログインして下さい。

と、中谷が消える。ブーンというハブノイズが高鳴る。深尾が退場する。
ノイズが不意に途切れると、舞台奥の大河内に明かり。営倉である。
舞台袖に現れる君島。大河内に声をかける。

君島　大河内くん・・・

しかし、大河内は目を閉じたまま・・・

君島　　尋問を行う前に少しだけ時間をもらえよう、小宮くんに頼んだんだ。　・・・大河内くん。すまなかった、小宮くんの暴挙を止めることが出来なかった。辛いだろうが、もう少しの辛抱だ。ロケットの発射はもうすぐ、それが終われば、君は医療刑務所に移されることになる。快適と言うことはないだろうが、こんな営倉にいるよりはましだろう。

独り言のように語り続ける君島。いや、まさに独り言だ。もしかしたら声すら出ておらず、これは心の中の言葉なのかも知れない・・・

君島　　ロケットの発射が終了したら、私は研究から身を引き、そして、君が出てくるのだけを楽しみにして生きるとするかな。（笑って）当然、君は嫌だと言うだろうが・・・ でも、大河内くん。こんな風に二人きりで会うのは何年ぶりだろうね。

大河内は目を閉じたまま、何も答えない・・・

君島　　・・・８年前か？　もうそんなに経ったんだね。あの不幸な事件から・・・　あの火事をニュースで知った私は、八方手を尽くし、君の所在を突き止め・・・そして、君の部屋へと向かった。当然、玄関先で追い返されるのを覚悟で・・・ でも君は、私を、こんな私を招き入れてくれた。部屋の中には、退院したばかりの宙がいて。まだ全身包帯だらけで・・・　「まるでエジプトのミイラみたいでしょ、先生？」と、君は力無く笑い・・・　研究所に行くこともなく、君はただ宙を抱きしめたまま部屋の中に閉じこもっていた。食べるものも食べず、骨と皮ばかりで、落ちくぼんだ目は涙に濡れて・・・　これでは、君までミイラになってしまう・・・私は大学の研究もそこそこに、毎晩君の部屋へ通い、食事を作り・・・

眠り込んでいたはずの大河内の口からから言葉がこぼれる、「宙？」
その声に気付き、大河内の顔を見る。大河内は目を閉じたままだ。

君島　　・・・君はよく、君は宙を抱きしめたまま、二人でコンピュータに繋がっていた。生体-シリコンパッドを着けてね・・・　「これで宙と話すことが出来るの」と、君は言い。私が頷くと、君は「本当よ。」と言葉を連ねる・・・

と、照明が徐々に変化し、大河内のみを浮かび上がらせる。

大河内　　・・・宙とママだけになっちゃったね。ねえ、宙？　お巡りさんも消防のおじさんも、火事の原因はホームコンピュータの漏電だって言うの。でもその時には消防署に自動的に警報が届くはずなのに行かなかったんだって・・・　セキュリティー・システムの基盤そのものが燃えちゃったみたいなの。考えられないことだって、言ってた・・・

照明に合わせ、ゆっくりと目を開いていく大河内。８年前の思い出。大河内の部屋。包帯だらけの宙を強く抱きしめて・・・

大河内　　宙はどう思う？　どうしてこんなことが起きたんだと思う？　コンピュータの得意な宙なら、すべてを知る宙なら・・・

髪をはらい、生体-シリコンパッドを自分の耳の後ろに貼り付ける大河内。

大河内　宙にも、パッドを付けてあげるね。ほら出来た。宙、痛くない？　そう、よかった・・・　ねえ、宙。鬼ごっこよ。いつものようにママが鬼。今日は絶対に捕まえちゃうから・・・宙、お願い。ママの前にまた現れて・・・そして教えて・・・

耳元のスイッチを押すと、LED が勢いよく明滅を開始する。
と、ハードディスクの起動音のような SE とともに、舞台に冷たい明かりが点る。
水滴の落ちる音。舞台袖に立つ、ひとつの影、ロスト・プロフェットである。

大河内　宙？　宙なの？

ロスト・プロフェットの唇が微かに動く。

ロスト　ママ・・・

抑揚のない、冷たい発語。

大河内　宙・・・　宙の声に音はない。でも、直接、心に響く・・・
ロスト　遙が生きている・・・
大河内　・・・・・・
ロスト　遙はまだ生きてる・・・でしょう？
大河内　・・・そう。ママの研究所にいるわ。
ロスト　ママの研究所？　そうなんだ。じゃあ、ぼくだって死ぬわけにはいかないね。だって、まだ鬼ごっこは終わっていないから・・・
大河内　なに？
ロスト　鬼ごっこは終わってない。そう言ったんだ。
大河内　あのゲーム？
ロスト　ぼくが遥を見つけたところで止まっている。あの火事で・・・
大河内　宙、いい？　遙はもう・・・
ロスト　遙は死んでいない。だって、遙は宇宙に行くんでしょう？　ママの予言を確かめるために・・・
大河内　私の予言？
ロスト　シリウスの大爆発。やがて、世界は焼き尽くされる・・・
大河内　・・・・・・
ロスト　でも、遥を遠くに送るまでもないんだ。ママの予言はぼくが確かめてあげる。
大河内　宙が？
ロスト　ママだって知ってるでしょう？　ぼくが未来を見られるって・・・　今はまだ不完全だけど、ぼくは「完全な予言者」になる方法をやがて見付ける。ママの望みを叶えるのは、ぼくだよ。このぼくだ・・・

ロスト・プロフェット消える。

大河内　宙？　どこへ行ったの、宙？　お願い戻ってきて、宙！　お願い・・・

立ち上がり、叫ぶ、大河内。
君島がその背後まで近づいてきて、そして、肩に手を置く。

君島　大河内くん・・・
大河内　・・・・・・
君島　このままでは君も死んでしまう。ゆっくりでいい。ゆっくり歩きだそう。君は量

子心理学の研究者としてもトップレベルなんだ。三豊研究所でも、君の１日も早い復帰を望んでいる。遙の細胞の培養や量子情報の解析も君がいなくては進まないだろう。私にこんなことを言う資格があるとは思えないが、宙を・・・ 宙を、専門の医療機関にあずけてみてはどうだ？　脳機能障害の治療に定評のある医療施設を見つけた。その方が宙のためにもなる。

大河内　宙は・・・

君島　悲しみを克服しろなんて説教するつもりはない。ただ・・・

大河内　・・・・・・

君島　志帆・・・　いや、すまない。大河内くん。今回だけでいい。私の提案を検討してみてはくれないか？

大河内　・・・・・・

照明が変化し、営倉のそれへと戻る。目を閉じている大河内が呟く・・・

大河内　宙が言ったの。私の願いを叶えてくれるって・・・

君島　願い？

大河内　でも、そんなこともう願ってなんかいない。宙にそう言ったの。何度も・・・ でも宙は・・・

君島　宙がどうしたって言うんだ？

大河内　だから私は・・・　私は・・・

君島　大河内君？

大河内　ごめんね。宙、ママを許して・・・

君島　許してって・・・　大河内君。君は一体！

泣きじゃくる大河内。理解出来ぬまま、それをなだめる君島。
そこへ登場する警備兵。

警備兵　君島博士。申し訳ありませんが、時間ですので退室願います。

君島　君、ちょっと待ってくれないか？

警備兵　残念ですが、ポリグラフの設置をしなければなりません。

白衣姿の男が入ってきて、大河内の体に様々な機器を取り付け始める。

君島　頼む・・・

警備兵　（首を横に振る）こちらへ。

君島、警備兵とともに退場。
機器を設置し終えた白衣も退場する。
営倉の照明が減光していくとともに、舞台袖に現れる深尾。一人電脳空間に放り出されたといった感じで、四方を見回している・・・暗いサスがそんな深尾を捉えている。水滴が絶えず落ち続ける音・・・

深尾　ここは・・・ ここがホストサーバか？ したたり落ちる水滴。黴だらけの壁・・・ まるで廃棄された研究施設の中にいるかのようだ。大河内志帆が作り上げたコンピュータ上のバーチャルスペース？ しかし、とても彼女の趣味とは思えない・・・ 誰か他の者が作り上げたロールプレイングゲームのダンジョン。屈折した心の迷宮・・・　正面に朽ちた金属のドアが見える・・・　あれが、本当の迷宮への入り口・・・　その時、サイバー・フォースの小田から通信が入る。

舞台他方に小田。

小田　こちら小田。現在サーバーフォースはホストサーバ D-226 の RAM 上に存在しています。そちらの接続先の位置を確認。媒体とデータのスキャン終了。媒体に異常なし、いくつかのデータの更新日時に不一致あり・・・　リストア時の問題と思われます。
深尾　重大な問題か？
小田　いえ。しかし、アクセスに障害が出る可能性があります。
深尾　分かった。
小田　これより部隊は、超高速移動演習のためにサーバ間を移動しなければなりません。その間、通信は出来なくなりますが、よろしいですか？
深尾　了解だ。任務を無事遂行できることを祈っている。
小田　ありがとうございます。

敬礼し、退場する小田。

深尾　・・・私は、正面に見えるドアに近づく。錆びてぼろぼろになったその扉に・・・

と、扉を開けようと一歩踏みだした、その刹那、それが勝手に開く・・・
現れる少女達・・・

少女達　ママ？
深尾　誰だ？
少女達　ママ？　そこにいるの？
深尾　君達は？
少女達　酷い夢を見るの？
深尾　私の問いかけに彼女達は答えない。私たちが見えないのか？　それとも、これは媒体内に不完全に記録された過去の出来事・・・
少女達　本当に酷い夢・・・　でも、それはこれから起こること・・・　ママ？　そこにいるの？
深尾　ママ？　それが大河内志帆のことだとすれば・・・
少女達　夢じゃないことは分かってる／すべては真実。量子空間。ここにはすべての時間が存在しているから・・・
深尾　大河内志帆は、ここで自分の娘と・・・　いや、Faint voice と会話していた？
少女達　私はすべてを知ったわ。これから私が／世界がどうなるのか？　この後、私は炎に包まれ、そしてこの世界もまた・・・　ママ、すべては言う通りになるの。宙の言う通りに・・・
深尾　そら？　今、「宙」と？

と同時に、轟音とともにドアが吹き飛ぶ。身をかわそうと腰を落とす深尾。
瞳を焼き尽くさんばかりの光の洪水が収まると、ドアの向こうに一人の男が立っているのが明らかとなる・・・
ぼさぼさの銀髪、うす汚れた黒いマント・・・　ロスト・プロフェットだ。

深尾　！？

ロスト・プロフェットは何も答えず、立ちつくすのみ・・・
男とも女とも知れぬ、老人なのか少年なのかも判然としないその姿・・・

深尾　　お前は・・・　静寂を破るかのように、突然現れたその男・・・　いや、女。少年・・・　まさか？　霧生の言っていた・・・

スクリーンに、三度、ロケットの打ち上げ映像。ロケットが大空を目指し飛び立っていく。無音の映像、それがサンドノイズの中から湧き上がり、そしてまたノイズの中に沈み込む。

深尾　　背後の空間に投影される映像。この映像は？　ロケット？　ロケットの発射・・・

天を目指すロケットが不意に爆散する。ロケットは何度かの小爆発を繰り返しながら、完全に砕け散る・・・
驚きの表情でそれを見つめる深尾。

深尾　　爆発？　これは・・・　これから発射されるのロケットの爆破？

無表情に立ちつくしているロスト・プロフェット。
と、舞台奥に現れた岡に明かりが入る。

岡　　今の映像は何だ？　この外の、すぐ隣のシステムで・・・ Faint voice、君には見えなかったのか？　思い出した。あのロケットは、確かに H4a ロケットだ。電子戦略軍の開発した最新型ロケット。君は言った。ここでは未来と過去と現在が、混じり合っている。だとすればあの映像も・・・
少女達　見えたの、おわり／はじまりが？
岡　　おわり、はじまり？
少女達　私のおわり／はじまり・・・
岡　　何を言っている？
少女達　そばにいるの？
岡　　そばに？　あいつが？
少女達　そばにいるの？
岡　　あいつ・・・　あの男、いや女か？　あいつは・・・
少女達　（瞳を閉じる）・・・・・・
岡　　あいつは・・・

スクリーン上には落下していくロケットの破片の映像。

少女達　私は落ちていく・・・　炎に包まれ／火に炙られて・・・　私は落ちていく・・・

それを見つめる、深尾に明かり。

深尾　　探査ユニットが炎に包まれて落ちていく・・・　これは爆破予告？　そうなのか？
少女達　予告ではなく、予言／予兆・・・　定められたおわり／はじまり。
岡　　君は一体何を・・・
少女達　私は予言装置として作られた／予兆を伝えるために・・・
岡　　予言装置・・・
少女達　完全なる予兆／完璧な予言装置となるためには／一方が消滅することが必要。
岡　　どういうことだ？
少女達　そうなんでしょう、ママ？

少女達は岡の問いに答えない。すでに舞台上から姿を消しているのだ。

ロスト・プロフェットに向かい叫ぶ岡。

岡　　お前は？

岡の存在に気付き、小首を傾げるロスト・プロフェット。
その背後で炎を上げながら落下を続ける探査機・・・

ロスト　・・・誰？
岡　　俺は・・・
ロスト　・・・誰？
岡　　・・・・・・
ロスト　君は誰？
岡　　お、俺は・・・
ロスト　そうか。君は・・・
岡　　？

何かに気付いたロスト・プロフェット。それを見て、混乱する岡。
彼はまだ、自らが何者なのか気付いていないのだ・・・

深尾　　お前はロケットを破壊する気なのか？　答えろ！　ロスト・プロフェット！　これは、爆破予告なのか？

それぞれの思いで立ちつくす三人の姿を闇が覆い隠す。

#15 Discommunication ―強行尋問―

朦朧となって座っている大河内。腕や首に巻き付いたポリグラフのプローブ。心拍を示すパルス音が低く響いている。傍らに小宮、そして警備兵。

小宮　どうだい、気分は？
大河内　・・・・・・
小宮　君の名前は？
大河内　・・・お、おおこうち・・・　し、ほ・・・
小宮　私の名前は？　知っているかな？
大河内　はい・・・　こ、こみや・・・　たかお。
小宮　その通り。（拍手して）よくできました。でも、惜しむらくは、私の名前に「博士」を付けなかったことかな・・・うん。しかし、とても従順になったよ、君は・・・
大河内　・・・・・・
小宮　さて、本題に入ろう。Faint voice の再起動についてだ。分かるね？
大河内　は、はい・・・
小宮　自動切断されたラインは完全に修復済みだ。再接続に関してはなんの支障もないはずだ。では、どうして Faint voice とのコネクションが確立しないのか？
大河内　リストアの基データの問題。たぶん、それ自体に間違いがある。簡単な・・・とても簡単なこと・・・
小宮　復元の基データに間違い？　何故そんなことが起こりえる？
大河内　スプーフィング・・・
小宮　なんだって？
大河内　スプーフ・・・
小宮　スプーフ？　ペテン？　一体なにをペテンにかけたって・・・
大河内　ＤＮＳ・・・　ドメインネーム。Faint Voice は・・・　リストアされたサーバのアドレスを誤った形で記憶したままなの・・・
小宮　何故そんなことが？
大河内　私が書き換えた・・・　対話するために・・・
小宮　どういうこと？
大河内　いえ、二度と繋がらないようにするために・・・
小宮　なんだと？

と、警告音が鳴り響く。警備兵が素早く通信を開始。

小宮　おい、なにがあった？
警備兵　医療研究棟内のホストサーバにサイバーアタックです。レベル２の警戒態勢を取れとのこと。
小宮　たかが、サイバー攻撃にレベル２？　そんな・・・　（気付いて）まさか？
警備兵　ロスト・プロフェットです。

それを聞き、大河内の体が驚いたように跳ね上がる。二人それを見るが・・・

小宮　本当か？
警備兵　はい。サイバースペース内で行動中のサイバーフォースがロスト・プロフェットを発見とのこと。

再び、大河内の体が跳ね上がる・・・

小宮　まだ、生きてたのか？　あの騒ぎでてっきり消滅したものと・・・
警備兵　聴取は終了です。小宮博士、すぐここを・・・
小宮　待ってくれ。あと、三分だけ。重要な情報を聞き出せる瀬戸際なんだ。
警備兵　しかし、規定により・・・
小宮　頼む。君は規定通りに、この営倉のコンピュータ・システムのシャットダウンと物理的な封鎖の準備に回れ。私は三分後にこの部屋を出る。三分後だ。行け・・・
警備兵　ですが・・・
小宮　急げ。
警備兵　（承伏しかねると言う表情ながらも）・・・分かりました。その件、看守長にお伝えいたします。

敬礼をし、退場する警備兵。鳴り続ける警告音。脅えたように、体をこわばらせている大河内。それに近づく小宮。

小宮　脅えなくてもいい。ただのせこいサイバーアタックだ。サイバーフォースがすぐさま撃退するはずだ。さあ、その書き換えについて聞かせてくれないか？　時間がないんだ・・・

大河内の耳元、猫なで声で話しかける小宮。
と、舞台袖に現れる深尾と中谷。振り換わる照明。

中谷　深尾大尉！　突然のログアウト。体の方は大丈夫ですか？
深尾　大丈夫だ。　・・・ロスト・プロフェット。ヤツが侵入してくるとは予想していなかった。
中谷　ええ。侵入に関してセキュリティ・システムが警告を発しました。現在サイバー・フォースが応戦中です。
深尾　中谷、私にはヤツの狙いが分かったような気がするんだ。ロスト・プロフェットは、ヤツはロケットの爆発のイメージを私に叩き付けてきた・・・
中谷　ロケットの爆発？　今、発射間近の？
深尾　たぶん・・・
中谷　何故ですか？
深尾　（首を横に振る）
中谷　理由は分からず、ですか・・・　で、本来の目的の「大河内がサーバ内で何を探っていたのか」についてはなにか分かりましたか？
深尾　ああ、たぶん過去の記憶だろうが・・・　そこに遙がいた。つまり Faint voice が・・・
中谷　大河内博士は Faint voice とコンタクトしていた？
深尾　そう言うことになる。Faint voice は彼女の娘なのだから・・・
中谷　大河内博士は、プライベートで自分の娘と対話していた・・・
深尾　同時の仮想空間を作ってね。しかし・・・　その仮想空間は、まるで・・・
中谷　まるで、なんです？
深尾　まるで、ヤツの趣味で作られたかのようだった。
中谷　ヤツの趣味？
深尾　ぽたぽたとしたたり落ち続ける水滴。黴だらけの壁。錆びた鉄の扉・・・　それは廃墟そのものだった。その廃墟の中で、私はヤツを見た。ロスト・プロフェットの姿は、まるでその空間で生まれたかのように、その風景にとけ込んでいた・・・
中谷　どういうことです？
深尾　理屈でなく、そう感じさせられたんだ。それも、圧倒的な迫力で・・・　この空間はロスト・プロフェットにより作られたのではないかと・・・

中谷　ちょっと待ってください。大河内博士がコンタクトしていた仮想空間がロスト・プロフェットにより作られたものであるとするなら・・・　博士はロスト・プロフェットともコンタクトしていたと言うことですか？
深尾　博士がヤツとコンタクトを取っていたのかどうかは分からない。しかし、可能性はあるだろう・・・
中谷　（考えこんでいる）
深尾　どうした？
中谷　ロスト・プロフェットは男なのか女なのか分からない容姿をしているんでしたよね。
深尾　私自身も確認できた・・・
中谷　それに関係しているのかどうか、定かではないのですが、宙に関して、興味深い情報が先ほど手に入ったのです。
深尾　興味深い情報？
中谷　あの火災で奇跡的に助かった宙は、その後、都の医療施設にあずけられました。しかし、３年後、施設より脱走、行方不明になります。賢明な捜索にもかかわらず、消息はようとして知れず・・・　これを。プリントアウトで申し訳ありませんが・・・(と、紙の束を渡す)
深尾　これは、その脱走に関しての資料か？
中谷　いえ、それより遙か前に遡ったものです・・・　今から 15 年前に、ある産婦人科医が発表した論文です。
深尾　15 年？

論文に見入る深尾。明かりが大河内と小宮へと振り換わる。

小宮　不可能？　再接続は不可能だというのか？　正しいアドレスを教えようにも、それを Faint voice に伝える手段がないと・・・
大河内　そう・・・
小宮　大河内、貴様。一体なんてことをしたんだ！
大河内　Faint voice が二度とつながらないように・・・　そして、もう一つの意識がそれに二度と近づかぬように・・・　でもその意識は消滅していなかった・・・
小宮　意識？
大河内　今、侵入している、電脳意識・・・
小宮　ロスト・プロフェット？
大河内　そう。その意識もまた、Faint voice 絡み合っている同一な存在・・・　私はそれを知った。だから・・・
小宮　何を言っている？　同一な存在ってなんだ？
大河内　危険。未来を知ろうとする行為は危険・・・私は一体、何をしてしまったの・・・

舞台袖に現れるロスト・プロフェット。照明が彼と大河内のみとなる。

ロスト　ママ、どうしてぼくに未来が分かるのか、その理由が分かる？
大河内　（首を横に振る）
ロスト　それは、ぼくと遥が絡み合った意識となっているから・・・
大河内　絡み合った・・・
ロスト　ぼくはママのお腹の中で、遥と二つに分けられた。意識が絡み合った状態で・・・だから、遥とぼくは瞬間的に意思の疎通が出来る。
大河内　量子通信システムはエンタングルメントした同一の存在間でなければ存在しないのよ。宙と遥は違う存在だし、その遺伝子だって・・・
ロスト　遥とぼくは同じだよ。ひとつの細胞から分かれたんだから・・・

大河内　いえ、宙と遥は二卵性の双子。独立した細胞から・・・
ロスト　ママ？　ひとつの細胞だよ。だから、遥とぼくは瞬時に心が通じあう。電脳支援も、言葉も何も要らない。二人の会話は光の速度を無視した速度で進行し、時には時間を逆行することもある・・・　そんな時、遥は違和感を憶え、そして自分なりにこう解釈した。自分ではなく、
大河内　宙が未来を見てるのだ、と・・・
ロスト　そう。でも、それは誤った解釈。未来を予見出来るのは、ぼくと遥の相互作用によってだよ。遥はそれを理解しようとしなかったけど・・・ぼくは遥の未来を、過去にあった出来事のように知覚できる。既視感。デジャビュ。そんな風に未来を感じとるんだ。ぼくには遥のぼく自身の未来が分かる・・・　でも、それは不完全な予言。曖昧な過去の記憶のように不確かで・・・　ママ、ぼくは完全な予言者になりたい。そのためには、遥が・・・
大河内　遥が？
ロスト　もし、遥が消え去れば、未来が手に取るように分かり始めるんじゃないのかな？
大河内　遥が・・・　今、なんと言ったの？
ロスト　ママは言う。量子通信。それは一方が消滅したら、他方が瞬時にそれを知ることが出来るシステム・・・
大河内　光の速度や時間の相対性を完全に無視してしまう現象。それは小さな因果律の破綻。時間の多重性を人類が悟ることになる始まり・・・
ロスト　絡み合った意識の解消。一方が消え去ったとき、その他方はその消失を知るだけじゃない・・・　未来を手に入れることになる。
大河内　宙、あなた・・・
ロスト　遥の消滅により、ぼくは未来と完全につながるんだ。

ロスト・プロフェットが消え、照明が元に戻る。

小宮　（電話をしている）小宮だ。サーバのバックアップデータを検索して、サーバ破壊時に与えられていた偽のアドレスナンバーを探り出すように。そうだ、大河内により偽装されていたんだ・・・
大河内　危険なの！
小宮　うるさい！　向こうの声が聞き取れないだろう。何が危険だって言うんだ？　それでFaint voiceが完全になるんだろ！　（電話に向かい）・・・いや、何でもない。いいか、５分以内だ。５分以内で探り出せ・・・

照明が深尾と中谷に振り換わる。

中谷　その産婦人科医の論文に記載されている患者名は当然偽名でしたが、時期と状況を勘案して、それが遙と宙であることが分かりました。
深尾　つまり、出生の問題というわけだな・・・　どういうことだ。これには一卵性双生児と・・・
中谷　男の子と女の子のペアなら、誰だって二卵性であると考えるはずです。
深尾　それが？
中谷　その論文は、「実はそれが一卵性だった」と言うことを報告したものです。
深尾　そんなことはないだろう？　だって一卵性と言うことは同一の遺伝子を・・・
中谷　はい。そこなのです。二人の遺伝子はほぼ同じ。この「ほぼ」と言うところが重要なのです。違っているのはＹ染色体の有無だけ。それ以外の遺伝子は完全に一致しています。
深尾　Ｙ染色体って？　一体？
中谷　最初の受精卵の卵割時に染色体の異常分離が起ったんです。

深尾　　異常分離？
中谷　　そうです。遥の遺伝子型は正常女性と同様の染色体数 46 の XX(ダブルエックス)。そして宙は性染色体が２個多い染色体数 48 の XXYY（ダブルエックス・ダブルワイ）・・・
深尾　　クラインフェルター症候群か？
中谷　　はい。その バラエティ、派生種です。このような異常分離が起こったのは、受精卵の遺伝子型がもともと 47XXY というクラインフェルター型の染色体異常であったためではないかと予想しています。そして最初の卵割の際に、すなわち双子となる際に、染色体の異常分離が起こり、一方は正常女性、そしてもう一方が・・・
深尾　　クラインフェルター型の染色体異常に・・・
中谷　　この異常分離がなければ、遥は正常女性として産まれることはなかった。そして、過剰なＹ染色体を受け取った宙は、その他の遺伝子が遥と完全に同一であるにもかかわらず、その表現形、見た目は男性となってしまった。
深尾　　・・・・・・
中谷　　自閉症の発症も、もしかしたらそれが原因で・・・
深尾　　いや、染色体異常が重度の自閉症の直接的な原因とは断定出来ないだろう。中谷、君が言いたかったのは染色体異常と自閉症の因果関係のことか？
中谷　　いえ、そうではありません。宙が、彼がもし今でも生きていれば、現時点で 17 歳、つまり二次性徴期に突入していることになる。つまり、遺伝子治療やホルモン投与といったケアを受けていないとすれば、クラインフェルター症候群特有の症状が出ているかもしれない・・・　そう思ったんです。
深尾　　クラインフェルター特有の症状・・・
中谷　　男性であるにもかかわらず、乳腺と乳房の発達が見られる・・・
深尾　　ロスト・プロフェット。男にも女にも見えない者・・・
中谷　　宙は幼年期からコンピュータ支援での治療プラグラムを受けており、電脳空間への適応性も驚くべきほど高かった・・・
深尾　　つまり、ロスト・プロフェットは宙である・・・
中谷　　はい。その上、ヤツは Faint voice である遙と同一の遺伝子を不足なく持っている・・・
深尾　　中谷。この論文はどこから？
中谷　　どこだと思います？
深尾　　・・・・・・
中谷　　大河内志帆のホームコンピュータで発見しました・・・

　　照明が大河内と小宮へと振り換わる。

小宮　　・・・分かった。それが偽のアドレスだな。私もすぐにそちらに向かう。（電話を切る）
大河内　危険・・・　量子融合・・・
小宮　　警備兵！インタビューは終了だ。ドアを開けてくれ。（と、大河内に顔を寄せ）ありがとう。大河内博士。これでぎりぎりどうにかなりそうかも・・・　でも、あんたホントにイカレてるよ。（頭をこづいて）ここが・・・

　　げらげら笑う小宮。大河内の力無く降ろされた右手の中で、何かが銀色の光を放つ。ぎらりと光る金属光沢を持ったもの。ゆっくりとその右手が引き上げられる。小宮、それに気付き・・・

小宮　　なんだい、それ？　ああ、私が落としたクリップじゃないか。見つけくれたって訳か・・・

大河内　　自殺用に持っていたの・・・　でも・・・
小宮　　（首を横に振り）いけないな、自殺なんて・・・

小宮が受け取ろうと手を差し出いた、その刹那、大河内の右手が弧を描くように小宮の顔前で振り回される。
叩き付けるような音響！　舞台が音で満たされ、時間がまるで引き延ばされたかのようにスローモーションとなる。
平手打ちでも喰らったようによろける小宮。正面を向いた顔面に横一文字の赤い線。一呼吸おいて吹き出す鮮血。小宮の悲鳴。その背後で立ち上がる大河内。顔面を押さえてうずくまろうとする小宮の首を後ろから羽交い締めにし、その首筋にとがったクリップの先を押し当てる。
入ってくる警備兵。拳銃を向けようとするが、小宮が悲鳴を上げ制する。
大河内が体中の筋肉をふるわせ、警備兵に向かい叫ぶ。気圧された警備兵が銃を床に置き、後退する。
クリップを小宮の首に押し当てたまま、その拳銃ににじり寄る大河内。
真っ赤に染まった舞台の中で、シルエットになる三人・・・
警報が鳴り響いている・・・
舞台袖の深尾と中谷に明かりが射す。どうやら警報に気付いたらしい。二人とも天を見上げる。中谷が耳に手を当て情報確認し、深尾に対し合図する。深尾、大きく頷き、中谷とともに駈け去る。
赤く染まる舞台。大河内、小宮、そして警備兵のシルエット。
やがて、すべてが闇に包まれる。

#16 Double Invension　ー二重侵蝕ー

舞台上にサイバーフォース達が現れる。

小田　中尉。・・・ホストサーバD-226にブリップ！
佐伯　まさか、ロスト・・・
小田　ロスト・プロフェットのパターンに一致。
小島　うそだろ？
小田　深尾大尉のコネクトを解除。大尉のアクセス情報から、ロスト・プロフェットの目的が判明。
霧生　なんだ？
小田　ロケットの破壊。
小島　何故？
佐伯　理由は分からないが、そいつは危険だ！
霧生　危険・・・
小田　原子核分裂ブースト・・・
佐伯　（小田の言葉に頷き）打ち上げられる探査機は自前の原子力エンジンを持っている・・・
小田　間欠的に小さな核分裂を起こして推進力を得るシステム・・・
小島　それって・・・
佐伯　ある意味、探査機自身が原爆みたいなもんだ！
吉井　落ちたら爆発？
小田　それは分からないが、この周辺が核汚染される可能性が・・・
佐伯　爆発の高度によっては、例えロケット自体を破壊出来たとしても、隣国に核爆弾を打ち込む行為に・・・
小島　おい。そんなことになったら・・・
吉井　霧生中尉！
霧生　即時応戦体勢を取る。小島、インタラプタ準備！
小島　了解。
霧生　ｄＢ、部隊をD-226に高速移動。
小田　デスティネーション固定。D-226に飛ぶ。

四散し退場するサイバーフォース。
舞台中央に立つロスト・プロフェットと舞台袖に立つ岡をサスが浮かび上がらせる。

岡　お前は、俺のことを知っているというのか？
ロスト　・・・・・・
岡　どうなんだ！
ロスト　・・・君の向こうが見えない。
岡　何だって？　向こう？
ロスト　君が邪魔になってね・・・
岡　一体、お前は・・・

背後に現れる少女達（Faint Voice）。

少女達　来たの？／やっと来たの？
岡　Faint Voice、ヤツは？　ヤツは誰なんだ？
少女達　ここがおわり／はじまり。ここで、ひとつになるの。元々ひとつだったから・・・

岡　　ヤツと？
少女達　そう。ひとつになる。それは私の消滅／誕生・・・
岡　　どっちだ？
少女達　消滅／誕生・・・
岡　　ヤツは君の乗るロケットを・・・　シリウスに向かう、そのロケットを破壊しようとしているんだぞ！
少女達　完全となるためには／一方が消滅することが必要。
岡　　その破壊すら決められていることだと言うのか？
少女達　でも・・・　それは分からない。
岡　　分からない？　どういうことだ？
少女達　未来が揺れ始めている・・・　いえ、私が揺れ始めている・・・

少女達への明かり消える。

岡　　どういうことだ？　答えろ！　答えてくれ・・・
ロスト　君は・・・ 話せるのか？ 向こうと話すことが出来るんだね？ そこに行けば・・・

飛び込んでくるサイバーフォース。ロスト・プロフェットを取り囲む。

佐伯　　とうとう見つけたぜ。小島、インタラプタは？
小島　　レディ・ゴーだ。
岡　　誰だ？
佐伯　　覚悟しな、ロスト・プロフェット。
岡　　ロスト・プロフェット！？
霧生　　ｄＢ、キャプチャー。
小田　　キャプチャー・フィールド展開！

ハブノイズとともに、ロスト・プロフェットが光に捕捉される。

岡　　キャプチャー？
吉井　　これで動けまい。
佐伯　　今度こそ逃がさねえ！
岡　　いや、キャプチャーの領域設定が甘い！
ロスト　そう。甘すぎる。君のやり方なら・・・
岡　　俺のやり方？
霧生　　レベル２で、部隊をシールド。
小田　　部隊全体をシールド！
霧生　　小島、インタラプタ！
小島　　了解。

小島が撃とうとした刹那、ロスト・プロフェットが発砲を制する。

岡　　やめろ！
ロスト　やめろ。撃ったら、君達も巻き添えを食う・・・
佐伯　　命乞いか？
岡　　脆弱な電磁シールド。これでは反動ノイズを吸収しきれない・・・
ロスト　（岡に）その通り。彼らもノイズに還元される・・・
佐伯　　彼ら？　おい、誰に向かって話してるんだ？
小田　　霧生中尉。ヤツは・・・

霧生　　どうした？
小田　　ヤツは壁の向こうと話している。コネクションが確立していない壁の向こうと･･･
吉井　　壁の向こう？
小田　　その先の量子コンピュータと・・・
小島　　Faint Voice と？
霧生　　・・・・・・
ロスト　そうではない・・・　そこにいる君達の仲間。
霧生　　仲間？　まさか、量子コンピュータの中に、岡が！？
ロスト　さあね・・・

と、言いながら、ロスト・プロフェットは事も無げにキャプチャー・フィールドを破る。爆音。それを避けるかのようにサイバーフォースは四散し、退場する。
溶暗した舞台に警報が鳴り響いている。
「緊急警報、医療研究棟に侵入者。侵入者は銃を携帯。レベル４の緊急体勢で対応せよ。緊急警報・・・」
飛び出してくる深尾と中谷。

深尾　　この警報は何だ？
中谷　　（耳の通信機を押さえ、聞き耳を立てる）・・・何者かが、ここ医療研究棟に侵入したとのことです。武器を携帯。それでなくてもロケットの発射が近づいて、手薄になっている警備部隊が・・・（通信機に向かい）本当か？
深尾　　どうした？
中谷　　応戦した１０名の警備兵が全滅・・・
深尾　　侵入したのはテロ集団か？
中谷　　集団ではないとのこと。たった一人の侵入者。
深尾　　一人の・・・
中谷　　そうです。一人の・・・　銀色の髪の少年・・・
深尾　　まさか・・・
中谷　　電脳空間にいるロスト・プロフェットそっくりの容姿ですが・・・
深尾　　一体何が起こっている？
中谷　　分かりません・・・　とにかく、避難しないと。避難路はこちらです・・・
深尾　　（逃げようとする中谷を制し）待て、中谷。電脳空間に意識をアップロードしつつ、現実世界でも動き回れるものなのか？
中谷　　速く逃げないと。深尾大尉、あなたをこのような危険な状態においておくわけには・・・
深尾　　サイバーフォースでも出来ないことを、ロスト・プロフェットは・・・
中谷　　（通信機に聞き耳を立て、そして叫ぶ）医療研究棟の防御壁が次々に閉じている？　誰の指示だ？　・・・指示は出されていない？　どういうことだ！？　・・・現在、避難可能な出口は？　・・・大尉、医療研究棟の防御壁が閉じ、ここは孤立化します。その前に、急いで逃げ出さないと・・・
深尾　　ロスト・プロフェットは・・・　その侵入者はどこへ向かっている？
中谷　　深尾大尉！

と、二人の前に警備兵が転がり出てくる。

中谷　　（驚いて）どうした？
警備兵　中谷曹長。大河内・・・　大河内志帆が脱走しました・・・

驚く二人。警備兵を助け起こし、走り出す。

高鳴る警報。そして、溶暗する舞台。
走り出てくる看護婦姿の犀川。耳に手を当て、通信している。

犀川　・・・じゃあ、すべての防御隔壁が閉じて、ここは孤立してしまった。そうなのね。いいの、私が知りたかったのは、避難するべきか否かだけ・・・（通信を終了し、岡に）警備部隊はほぼ壊滅だって、援軍も期待できず。そして、侵入者はＤウイング、つまりこちらに向かってきている・・・　岡くん、最悪の状況ね。でも、心配しないで、私が守るから・・・

と、スカートの下から、拳銃を引き抜き、コッキングピースを引く。
舞台中央のロスト・プロフェットに明かり、次いで岡にも明かりが射す。

ロスト　ぼくがどこにいるか分かるかい？
岡　？
ロスト　現実世界の君の横に立っている。
岡　現実世界の俺？

気配に気付き、ロスト・プロフェットに銃口を向ける犀川。

犀川　誰？　どこから入ってきたの？

銃を持った両手を下げたまま、冷たい視線を向けるロスト・プロフェット。

ロスト　（岡に）君は・・・
岡　何だ？
ロスト　ずっと、電脳世界にいたのか？
岡　どういうことだ？
ロスト　現実の君は単なる抜け殻だ。それも生まれたときから・・・
岡　生まれたときから？
ロスト　生命維持装置の中で生かされている君の抜け殻。その傍らに銃を構えた女・・・
犀川　あなた誰なの？　何をする気？　狙いは岡くんなの？
ロスト　・・・・・・
犀川　岡くんに何かしたら、ただじゃおかないよ！　動かないで！　撃つわよ！
岡　岡？
ロスト　君の名前か？
岡　岡・・・（自分の名前かどうか、確信は持てないが・・・）

犀川、銃口を突き付けながら、通信を試み、耳に手を当てる。

犀川　こちら、犀川。現在、侵入者は・・・

しかし、ノイズが酷く、通信できない。耳を押さえ、顔をしかめる犀川。

犀川　なんてノイズ。これじゃあ・・・
ロスト　邪魔な君を取り除くために、現実の君を片付けようとしたんだが、これでは意味がない。現実の君を殺したところで、君はそこに居続けるだろう・・・（ふと何かに気付き）・・・近づいてくる。どうして、邪魔をする？　どうしてなんだ？

ゆっくりと後退する、ロスト・プロフェット。

犀川　　動かないで、って言っているでしょう！　動いたら・・・

更に後退していく、ロスト・プロフェット。
銃を構え、一歩も動けない犀川。

犀川　　（蚊の鳴くような声で）聞こえる？　侵入者は、病室を出てどこかへ・・・　残っている警備兵をＤウイングへ！　聞こえている？

岡　　俺を守ろうとしている彼女・・・　何故、俺を・・・　俺はここにいる。では守られている俺は？　俺はここにいて、そこにいる。そこ・・・　病室の白いベッド。そこに横たわる俺・・・　病室のセキュリティ・カメラが捉えている映像。人工心肺装置を付けられ、横たわっている青白き顔の俺・・・　俺は・・・

背後の少女達に明かり。

少女達　　私と／私が離れていく。医療研究棟の地下にいる私と／探査ユニットの中へ向かう私。高速輸送システムの全身が痒くなるような振動／地下から地上 80mの高みへ向かって、圧搾空気が私を運ぶ・・・　地下にいる私はそれを感じる／運ばれている私はそれに耐える・・・　やがて、私は飛び出す／シリウスに向かって／やがては脱出速度まで加速して・・・　でもその前にロケットは・・・／でも、それは本当？　いくつかのイメージが／ぶれて／重なる・・・　目隠しされたように／外は見えない。でも、感じることは出来る。宙が／ママがそこに／すぐ近くに／いる・・・　完全な予言装置／不完全な量子通信システム。私はその間で揺れながら／戸惑いながら・・・　止まった時間／重なり合った時間／その中で／私は何を／誰を待っているの？

高鳴っていく音響。舞台がゆっくりと暗転していく。
暗闇の中に響く声。
「液体水素、酸素の注入完了。メインエンジンのチェック、オールクリア。量子通信システムの移送完了。探査ユニット異常なし。カウントダウン前の最終チェックに入る・・・」

#17 Closed Encounter　ー近接遭遇ー

小宮の背後に覆い被さるように立つ、大河内。大河内の持つ拳銃の銃口が小宮のこめかみに突き付けられている。小宮の顔には横一文字の傷。その血は乾き始めている。
走り込んでくる君島。

君島　大河内くん。一体何をする気なんだ？
大河内　・・・危険なの。止めないと・・・
君島　ロスト・プロフェットか？
大河内　そう。私が止めるしかない。止められるのは、私だけ。だから・・・
君島　分かった。分かったから・・・　大河内くん。落ち着くんだ。私が協力しよう。だから、小宮くんを放したまえ。
大河内　（首を横に振り）人質無しでは、警備兵が私を止めるでしょう。
君島　では、私が代わりに・・・
大河内　（笑って、首を横に振る）
君島　大河内くん。とにかく私が・・・

と、君島が近づこうとする。大河内、小宮を突き放し、後頭部に銃口を向け、引き金を引こうとする。手を挙げたまま、小さな悲鳴を上げる小宮。

大河内　近づかないで！　近寄ったら、本当に引き金を引いてしまいそうなの。お願い、急がないといけないの・・・

小宮の襟首を掴み、先を急ごうとする大河内。

君島　大河内くん。小宮くんは関係ないんだ。小宮くん。こっちへ来たまえ。
小宮　何を言っているんですか、私は拳銃を向けられているんですよ。
君島　大丈夫だ。大河内くんは君を撃てないよ。
小宮　そんなこと言ったって・・・
君島　さあ・・・

小宮に手をさしのべる君島。小宮、意を決し両手を上に上げたまま、大河内のもとをそろりそろりと離れ始める。

小宮　撃つなよ。大河内・・・

大河内の銃口が震えている・・・

君島　大河内くん。銃口を私に向けたまえ。警備兵を黙らせるだけなら、私で十分だろう。

大河内、ためらうが、ゆっくりと銃口を君島へ向ける。
銃口に向け歩き出す君島。

君島　それでいいんだ。
小宮　先生！
君島　小宮くん。速く逃げたまえ。
小宮　でも・・・

君島　　逃げたまえ。

　　しかし、小宮は動けない。

君島　　大河内くん。どこへ行く気なんだ？
大河内　ホストサーバ D-226・・・
君島　　D-226・・・　君が破壊したサーバだね・・・　分かった。行こう。

　　と、君島、拳銃を突き付けられながら退場。大河内も後に続く。
　　がたがた震えて立ちつくしている小宮。耳に手を当て・・・

小宮　　緊急事態。Ｄウイングに警備兵を、だれか聞こえるか？　君島博士が大河内に捕まった・・・

　　と、小宮枝の照明が消え（退場）、そして舞台袖に現れる岡。舞台は電脳空間への照明へ移行。

岡　　・・・お前は、電脳空間に意識をソリトナイズさせていても、現実空間で動き回れるのか？

　　舞台中央に現れるロスト・プロフェット。

ロスト　そう。簡単なことだ。君だって出来る。君がもし、生まれたときから植物状態で眠り続けているのでなければの話だけど・・・
岡　　・・・・・・
ロスト　今、ぼくがどこにいるか分かるかい？　ホストサーバ D-226、このサーバにもたれて立っている。セキュリティ・カメラ DF-9 を確認してごらん。ぼくは同時にそこにいる。
岡　　どうしてだ？
ロスト　サーバごと物理破壊されては困るからね・・・
岡　　サーバごと物理破壊？
ロスト　そう。この前みたいに・・・　憶えていないのかい？
岡　　憶えて・・・

　　舞台袖から倒れ込むように登場する小田。追いかけて吉井も登場。
　　他方より霧生、佐伯、そして小島。

霧生　　ｄＢ！
吉井　　（倒れ込んだ小田に駈け寄り）大丈夫か、小田？
佐伯　　畜生！　何故キャプチャー・フィールドがはじけ飛んだ？
ロスト　おやおや、まだ、いたのか？
小島　　まだいたのかじゃねえ！　くたばれ！（とインタラプタを向ける）
ロスト　撃ったら、君達まで弾け飛ぶと言っているだろう。
小田　　その通りだ。小島、やめろ・・・
霧生　　ｄＢ、もう一度、キャプチャー。
小田　　はい。
吉井　　中尉！　小田は今の反動で、ダメージを・・・
小田　　いいんだ。キャプチャー・フィールド展開！

ロスト・プロフェットに向け収束するはずの光が、揺れ動き拡散する。

霧生　跳ね返ってくる！　ｄＢ、シールド！

小田、「シールド展開！」と叫ぶが、間に合わない。光の洪水がサーバーフォースを襲う。

霧生　ｄＢ！
岡　ｄＢ！ そう、誰かが叫ぶ。ｄＢ、direct Binder、直接繋ぐ者。現実と仮想現実。ここにいる自分とそこで横たわる自分を・・・人工心肺装置無しでは、呼吸することも脈打つことも出来ない自分。生まれたときからそうだった・・・　意識はいつでも電脳空間にあったが、現実の姿は・・・　量子コンピュータ内にまき散らされた自分の記憶が光り出す。今まで見えなかった記憶の断片が輝き出す。何故だ？　Faint voice が？　片っ端から記憶の断片を拾う・・・
霧生　ｄＢ、大丈夫か？
吉井　霧生中尉、小田は・・・

小田が、がたがた震えている・・・

吉井　小田・・・
小田　だ、だめだ・・・　うまく情報を・・・　記憶を捨て去れないんだ。岡は、怖くなかったのか・・・　どうして、あんなに簡単に・・・
小島　小田、お前・・・
佐伯　畜生、小島。インタラプタを撃て！　俺たちはどうなったっていい。
小島　しかし・・・
小田　やめろ。俺はｄＢだ。部隊を守る義務がある・・・ そんなことは許さない・・・シールドを展開させろ。それまでは・・・
吉井　もういい、小田。
霧生　ロスト・プロフェット！　何故、ロケットを破壊する？　打ち上げられる探査機は独立した推進システムを持っている。それは、原子核分裂を利用した・・・
ロスト　核分裂？　それは危険だ・・・
霧生　そうだ。お前がロケットを破壊したら、それが地上に降ってくる・・・
ロスト　核汚染。この小さな島も立ち入り禁止となる・・・
霧生　それだけじゃない・・・　南の海が・・・
ロスト　些末なことだ。
霧生　些末？
ロスト　そう。些末なこと・・・
岡　ｄＢ。現実と仮想現実を繋ぐ者。いや、dB になって初めて、俺自身の現実と仮想現実ががっちりと繋がったのだ。生きていることとその意味が繋がったんだ。仲間達が教えてくれた。部隊の仲間達だ。この部隊のためなら、死んでもいいと思った。いや、部隊のために生きることを決心した・・・量子コンピュータの中にばらまかれた記憶。飛び込んだときに、散らばってしまった切れ切れの記憶。ここにはすべてがある。Faint voice はそう言った。それらを強引に繋ぐ・・・ 自らのロケーション確認。量子コンピューティングシステムのデジタルデバイス上。見えてきた。俺の居場所・・・　外部端末のポートスキャン開始・・・　ホストサーバシステム D-226 上に、ブリップ確認。見えてきた。俺のいるべき場所。複数のブリップ・・・　霧生中尉のブリップ。佐伯、小島、そして小田を確認。見えてきた、俺の部隊・・・　サイバーフォース 2047、レッドベレー・・・小田の展開した防御シールド安定せず。エマージェンシー・レベル、レッド・・・　霧

生中尉。ｄＢは、ここです・・・

と、舞台袖に飛び出してくる深尾、中谷。照明が振り換わる。

深尾　脱走した大河内が向かう先は？
中谷　ホストサーバD-226・・・
深尾　ロスト・プロフェットの侵入箇所であり、彼女がかつて破壊したコンピュータ・・・
中谷　現実空間の侵入者も、ホストサーバ D-226 のあるＤウイングへ向かったとの警告がでています。
深尾　侵入者が現実のロスト・プロフェット、つまり宙だと思うか？
中谷　（首を横に振る）
深尾　量子コンピュータに繋がる D-226 上で Faint voice とコンタクトしていたのは大河内だけではない。宙もまたそうしていたんじゃないか？　大河内は当然それを知っていた。あの日の破壊もそれに関係している。ロスト・プロフェットの目的、それはロケットの破壊そのものではなく、もっと根の深い何かではないのか・・・血のように濃い関係性の何か・・・
中谷　拳銃を持っていますか？
深尾　（頷く）
中谷　警備部隊が壊滅的打撃を受けた今、自分の身は自分で守る以外ありません。敵は十数名の警備兵を無力化しています。それに、大河内も警備兵から拳銃を奪い取った。彼女も私たちの味方である保証はありません・・・
深尾　分かっている。急ごう。

退場する深尾と中谷。
照明が舞台中央のロスト・プロフェットを照らす。
舞台後方に現れる大河内と君島。大河内の見開かれた目が、ロスト・プロフェットに向けられている。

大河内　・・・何故？
君島　（ロスト・プロフェットを驚きの眼差しで見つめる）
大河内　どうして・・・
ロスト　・・・また、物理破壊されたらかなわないから。数日前に島に侵入した。コンピュータ上の侵入よりは難しいけど、でも不可能なことでなかった・・・
大河内　あなた、言葉が・・・
ロスト　電脳支援だ。電脳内に入っているときには、現実でもしゃべれるようになった・・・
大河内　・・・・・・
ロスト　電脳空間ではよく会っているけど、現実世界で会うのは何年ぶり？　ねえ、ママ・・・
君島　ママ・・・　君は宙なのか？
大河内　ええ、宙よ。宙、もうやめなさい。こんなことをして・・・
ロスト　どうして、ぼくはこの日のために生きてきたんだ。ぼくは今日ここで、完全になるんだ。遙を消し去って・・・
君島　遙・・・
ロスト　そう、その遥が消滅し、ぼくがそれを知る。遥とぼくとはすでに絡み合った意識として存在していた・・・
君島　どういうことだ？
大河内　量子的に絡み合った意識。一方が消滅したとき、未来が分かるとあの子は信じている・・・
君島　なぜ遥と宙が量子的に絡み合う？　宙と遥は・・・

そこに駆け込んでくる、深尾と中谷。ロスト・プロフェットに銃口を向ける。

深尾　彼は遙と同様の遺伝子を持っています。
君島　深尾くん！
中谷　ただちょっとだけ過剰なものがありますが・・・
ロスト　・・・・・・
深尾　遙と宙は一卵性双生児だった。あなたはそれをつい最近知った。１５年前、産婦人科医が発表した論文で・・・
大河内　私のお腹の中ですでに量子意識のエンタングルメントが起こっていたんでしょうか。遙と宙という二つの生体意識による超光速通信系・・・ だから、宙は・・・
深尾　未来が見えた。
君島　まさか？
大河内　宙は・・・　宙はそう考えています。そうでしょう？
ロスト　・・・ぼくには未来が見える。曖昧なイメージとして・・・
深尾　ロケットの爆発。あれも未来のイメージか？
ロスト　そう。確実にロケットは爆発する。今、まさに・・・
君島　発射されるロケットが爆発する？
大河内　宙が爆破するの・・・
ロスト　爆発するロケット。ぼくの最後の未来の記憶。それより先はない。それより先を見るために、遥を消し去る・・・
君島　待つんだ、宙。あのロケットに搭載された探査機には・・・
ロスト　核分裂ブースト。放射性物質が積み込まれている。
君島　分かっているのか、その意味が？
ロスト　・・・爆発は、二次的なもの。遥を消し去るとき、ロケットの航法支援ユニットに障害が生じるんだろう。あの時の火事のようにね・・・
大河内　あの時の火事・・・
ロスト　別に、ぼくは彼女を焼き殺そうとしたわけじゃない・・・　ただ、完全な予言者になるため、電脳レベルで遥の意識を消滅しようとしただけだ。あの、鬼ごっこの中で・・・
大河内　・・・・・・
ロスト　遥が死ぬことはないのは知っていた。でも、それは更に先を見るために必要なことだと確信していた・・・
大河内　宙。あの時の火事のようにはならない。遙を乗せたロケットが爆発することもないの・・・　だって、あなたは遙とコンタクトできないでしょう？　コネクションが確立しないの・・・　私が切断したから・・・
ロスト　いや、予言通りになる。きっとね・・・

電脳空間への照明へ移行。岡とサイバーフォースが浮かび上がる。

ロスト　（岡に）君は私とコンタクトできる。そして Faint voice とも・・・　でもぼくは・・・
岡　・・・・・・
ロスト　君には分かっているんだろう？　君は、今、このサーバのバックアップシステムのログをスキャンしている。何故だ？

舞台袖に現れる小宮。ハンカチで顔の血をぬぐっている。
耳に手を当て・・・

小宮　　どうしてだ、何故、D-226のアドレスを書き換えることが出来ない。・・・すぐまた戻せばいいんだ。とにかくFaint voiceにコンタクトできる時間さえ稼げればいい。それで再接続出来るだろう。・・・量子コンピューティングと言ったって、その周辺はがちがちのデジタルだろう？　いいか、ロケットの打ち上げは秒読み段階に入っている。量子通信システムのシェイクダウンも棚上げにして、前倒しで・・・　宇宙工学屋の連中は、こっちの事情なんか屁とも思っていない・・・いいか、発射までになんとしてもつなげ・・・　一泡ふかしてやるんだ。

小宮への明かり消える。

ロスト　　・・・アドレスか？　Faint voiceは誤ったドメインネームを記憶したまま、非常切断を受けたという訳か。だから・・・　どうして答えない？　デジタルと量子の中間に位置する君には、それが分かるんだろう？　そして、Faint voiceに正規のアドレスを教え、このサーバに再接続することだって出来る。それをしない限り、量子コンピュータに埋もれている君の情報、君の意識・・・　それらを持って外界に出てくることは不可能だ。

岡　　分かっている・・・　だが、それをしたら、お前がこちらに入り込む。そして、Faint voiceの存在を消し去るため、ロケットを破壊する・・・

ロスト　ロケットの破壊は副次的な物に過ぎない。重要なのは遥を消し去ることだ。そして、ぼくは未来を完全に予知出来るようになる。

岡　　・・・未来など予測してどうなる？

ロスト　・・・・・・

岡　　未来を正確に予知できることにどんな意味がある。

ロスト　それがママの願いなんだ・・・

周辺のサイバーフォースに明かり。

小田　　・・・情報が足りない。うまくシールドが展開できない。

吉井　　霧生中尉。このままでは・・・

佐伯　　畜生！

佐伯走っていき、ロスト・プロフェットを捕まえる。

佐伯　　小島、今だ。撃て！　俺ごとロスト・プロフェットを消滅させろ。

小島　　出来るか！

佐伯　　このままじゃ、核汚染が起こる。頼む！

電磁ノイズ。佐伯が舞台前方まで反動で転がる・・・

小島　　佐伯（と、佐伯に駈け寄る）

ロスト　仲間を助けるためには、ここに出てくるしかない。分かっているんだろう？

岡　　・・・・・・

霧生　　岡が・・・　本当にそこにいるのか？　お前は壁の向こうにいるのか・・・

岡　　霧生中尉・・・

霧生　　岡・・・　お前がいてくれれば・・・

岡　　中尉・・・

佐伯　　（激しく傷つきながらも）中尉・・・　止めなきゃならないだろ・・・　ヤツを止めなきゃ・・・

サイバーフォース全員の顔が霧生に集まる。
全員の意を決した表情を見て、霧生の気持ちが固まる。

霧生　いいのか？

頷く四人。

霧生　小島、インタラプタ準備。ロスト・プロフェットに向け発砲せよ。
小島　・・・了解。(と、インタラプタを構える)
岡　このままではみんな反動で消滅する・・・
ロスト　時が来た。さあ、どうする？

舞台後方に少女達。その悲しげな表情。

少女達　扉を開いて／その時を受け入れる
岡　Faint voice・・・
少女達　さあ、扉を開くの。そのために記憶のかけらを／ばらまかれたあなたの記憶を／返してあげた・・・
岡　本当に開いていいのか？
少女達　それが定め／決められた未来・・・　宙を受け入れる／受け入れられるの。
岡　本当に、それでいいのか？ だったら、どうしてそんな悲しい顔をしている？ 君はいつでも俺に記憶をすことが出来た。でも、すぐにはそれをしなかった。それは、この時まで俺をここに縛り付けておくため。そうだろう？　俺に何を求めたんだ？　定められた未来とはなんだ？
少女達　未来が揺らいでいる／その中で私も揺らぐ・・・(目を閉じる)
岡　Faint voice！
少女達　・・・・・・

舞台袖の小宮へ明かり。

小宮　ロケットの秒読みが始まったのか？　おい、早くしろ、準備はいいな。なんとしてもFaint voiceをつなぐんだ。アドレスの送信と書き換えだ！

発射のカウントダウンがすでに始まっている。
１０，９，８，７・・・
インターラプタをロスト・プロフェットに向け、まさに引き金を絞ろうとする小島。
カウントダウンが進行する・・・
３，２，１・・・
閉じていたFaint voiceの両目が開く。

小宮　繋がった！
岡　防御シールド展開。
霧生　撃て！

「離昇（liftoff)」の合図でメインエンジンに点火された音。同時にインターラプタが火を噴く。爆音・・・
舞台が暗転する。

#18 Induced Proto-type　ー誘導原型ー

倒れているサイバーフォース。傍らに岡。
佐伯の具合を確かめようとひざまずく。佐伯、それに気付き・・・

佐伯　・・・岡？
岡　ああ。
佐伯　ここは天国か？
岡　いや。
佐伯　助けてくれたのか？
岡　（頷く）・・・チェック終了。概ね問題はないが、記憶情報の一部に修復出来ない障害がある。
佐伯　つまり、過去の記憶が消えた？
岡　（頷いて）そう、初恋の記憶とか・・・
佐伯　そいつは好都合だ。ずっと忘れたいと願ってたんだ・・・

霧生が頭を振って起き上がる。

霧生　（岡に気付き）・・・岡。
岡　（立ち上がり、敬礼）霧生中尉。岡一等通信兵、ただいま着任いたしました。
吉井　岡？　本当に岡か？

皆、頭をもたげ、岡を見る。

小島　ここは？
岡　帰還のためのランデブーポイント。今から全員の帰還シークエンスを開始する。
小島　俺たちも死んだんじゃないのか・・・
岡　ああ。でも、ぎりぎりのところだった。
小田　ありがとう。岡がいなきゃ・・・端っから無理だったんだ。私にはｄＢなんて・・・
岡　（小田の肩に手を置き、首を横に振る）初めてにしては上出来だ。
霧生　岡、ロスト・プロフェットは消滅したか？
岡　残念ながら、まだ生きています。インタラプタの攻撃を避け、量子コンピュータ内に飛び込みました。だから・・・　私はすぐ後を追わねばなりません。部隊全員のランデイング・ポイント確保。
佐伯　待て、お前一人で行く気か？
岡　（頷く）量子コンピュータ内では、部隊の安全を保証出来ない。だから・・・
霧生　岡・・・
岡　大丈夫です。ｄＢの使命は部隊を守ることだけではなく、自分自身を守ることであると言うことは承知しています。私がノイズに還元されたら、サイバーフォース 2047 もまた、同じ運命をたどるでしょう・・・　霧生中尉。急がねばなりません。ロスト・プロフェットの目的は・・・　それを阻止します。霧生中尉。私の単独行動を許可して下さい。
霧生　岡。・・・行け。
岡　（敬礼する）
霧生　そして、必ず戻れ。
岡　（頷き）はい。　・・・帰還シークエンス開始。

上昇音のようなＳＥとともに、舞台は暗転。
舞台後方に少女達。

少女１　耐え難いほどのＧが私の体を締め付ける・・・
少女２　地下にいる私もそれを同時に感じる・・・
少女１　どこまでも登り続ける感覚・・・
少女２　加速後は更に増して・・・
少女１　ロケットが発射された瞬間・・・
少女２　その時、ママの顔を見たような気がする。
少女１　いえ、実際に見た。そして、宙がそばにいた・・・

舞台中央にロスト・プロフェット。

ロスト　コネクション確立・・・

大河内が走り込んでく。

大河内　なんて言ったの？
ロスト　Faint voice とのコネクション確立。今、ぼくは遙のそばにいる。

走り込んでくる君島。そして、深尾と中谷・・・

君島　どうやってコネクションを？
ロスト　誰かがこじ開けてくれた・・・　ほらね・・・　ぼくの言う通りになった。
少女達　宙？
ロスト　遙、宙だよ・・・
少女達　ここがおわり／はじまり？
ロスト　そう。「おわり」そして「はじまり」。ぼくは世界のすべてを見ることの出来る者に・・・さあ、手を出して、あの時のように・・・　ぼくが君の意識を消し去ろうとした、８年前のあの時・・・　遥は、最初からそれが分かっていたみたいだったね。ぼくの意図を見抜いていて・・・　そうだね、遥だって未来が見えたんだ。・・・ダンジョンの中で、ぼくを待っていた。大きな目に涙をためて・・・ たどり着いたぼくに向け、手を差し出して、こう尋ねた。
少女達　宙、私は宇宙に行くんでしょ？
ロスト　ぼくは遥の手自分の手を合わせて、答えた。「そうだよ・・・」と・・・ そして、手に意識を集中した。その時、時間が重なり合った。とても変な感覚で・・・ 様々なイメージが頭の中で渦巻いて・・・　燃えさかる家。炎に包まれる遥。燃え上がるソファーを見つめるぼく。逃げまどうおばあちゃん。にこやかに微笑んでいる遥。ママに抱きしめられたぼく。立ち尽くしたママの姿。白いパイプベッドで目を覚ますぼく。得体の知れない液体の中で脈動を開始する遥。よく分からなかった。過去と未来が混じり合って・・・　遥は炎に包まれる。でも、遥が死なないことは分かっていた。知っていた・・・　爆発するロケット。そう。それが遥の最後だって・・・
少女達　宙、これでママの願いが叶うの？
ロスト　そうだよ・・・
大河内　私の願いが叶うって・・・
ロスト　ぼくらはママの願いを叶えるために生まれてきたんだ・・・　未来を予見するために。ママが予言したこの世の終わりを伝えるために・・・
大河内　宙。ママはもう望んではいない。未来など知らなくていい。この世の終わりをあらかじめ知る必要なんかない・・・
ロスト　どういうこと、これはママが望んだこと。それをぼくが叶える・・・

大河内　宙、聞いて。いつ自分が死ぬのか、そして人類がいつ滅ぶのか、そんなことをあらかじめ知ることに意味があるの？　それを知って、なお、人は希望を持てるものなの？
ロスト　ママはそれを望んだんでしょう？
中谷　未来を知るもの。それはこの世のおわりまで知ることが出来るのか？
ロスト　たぶんね。宇宙のすべて、だよ・・・
深尾　君のママが発見したシリウス超新星爆発。そのことも分かるのか？
ロスト　宇宙船を飛ばすまでもなく・・・　そうでしょう、ママ？
大河内　・・・宙。あなたは勘違いしている。遥を消し去ったところで、未来は手に入らない。
ロスト　（ゆっくりと首を横に振る）
大河内　すべては勘違いなの。宙の、そしてママの・・・
ロスト　さあ、遙、手を前にかざすんだ。そう、あの時みたいに・・・

少女達は目を閉じ、手を前に突き出す・・・

ロスト　ダンジョン３。制限時間は８年間。鬼はぼく。やっと見つけた・・・
大河内　（蚊の泣くような声で）やめて・・・
ロスト　だめだよ。だってもうすぐ時間切れだ・・・

ロスト・プロフェットが手を前に差し出そうとした刹那、光が彼の体を捉える。

ロスト　キャプチャーか？　待て、このキャプチャーのやり方は！

舞台に現れる岡。

岡　・・・おとなしく、自らの器に戻れ。ロスト・プロフェット。
ロスト　きみは・・・
岡　ロスト・プロフェット、いや宙。ママの言う通り、こんなことをしても未来は手に入らない。例えそれが可能だったとしても、俺には未来を知ることが意味のあるように思えない。
ロスト　君には関係のないことだ！
岡　いや、量子コンピュータの中で時の揺らぎの中にいた Faint voice の顔を俺は見ていた。彼女は未来に起こることを過去のことにように話していた。その時の顔を忘れられないんだ。今だってそうだ。そこに喜びは見いだせない。彼女は本当に未来などのぞき見したいのか？　本当に君と同じ意識を持っているのか？
ロスト　邪魔するな！

光が岡を捉える。

ロスト　さあ、遙、手を・・・　（躊躇する彼女たちを見て）早く、手を・・・

キャプチャー・フィールドに捕らわれたまま、ぎこちなく手を前にかざそうとするロスト・プロフェット。その傍らで、同じようにキャプチャーされている岡。

岡　頼む、自分の体に戻れ。でなければ、お前はノイズに帰るだけだ・・・　俺は持ちうるすべての情報をノイズに還元し、お前をはじき飛ばす。お前は勝てない。
ロスト　君自身もなくなってしまうぞ。
岡　分かっている・・・　でも、お前を止めるにはそれより他に方法はない。

ロスト　君は何故そこまで・・・

と、ノイズ。銃弾に蹴られたかのようにのけぞる、岡。

ロスト　インタラプト・コードを撃った。良く防いだね。今度はもっと上手く撃つ。

と、ノイズ。岡が再び銃弾に蹴られたかのようにのけぞる。

ロスト　所詮、敵ではない・・・

と、キャプチャー・フィールドから、易々と抜け出す。

岡　・・・
ゆっくりと手を前に差し出すロスト・プロフェット。

少女達　宙・・・　これでいいの？
ロスト　遥まで、どうしたんだ？
少女達　これが終わり／始まり？
ロスト　そう。これが・・・
岡　・・・Faint voice に防御シールド展開。ロスト・プロフェットにアンカー！
ロスト　データ・コリジョン！　玉砕する気か？　そんなことをしても・・・

光が振動し始める。歯の浮くような地鳴りのような音が高まっていく・・・
岡の叫び！　そして、真っ白な閃光が舞台を覆い尽くす。
と、轟く銃声。舞台が闇となる。

明かりがつき始める。電脳空間は消え去っている。舞台の上にロスト・プロフェット。その背後に大河内と君島。離れて深尾と中谷。
がっくりと膝から崩れるロスト・プロフェット。背後で拳銃を構えている大河内。銃口から微かに硝煙が立ちのぼっている。

大河内　ごめんね、宙。ママはあなたを・・・　ごめんね、宙・・・
ロスト　どうして、ママ？　これはママが望んだことでしょう？　未来を知ること・・・世界のおわりを知ろうとしていたんでしょう・・・　ママの予言は、誰にも聞き入れてもらえなかった。神様は憐れんで、ぼくらをママに与えたもうた・・・未来を予知出来るぼくらを・・・ママはそう言った。いつもぼくにそう言ってた・・・「宙。知ってる？　やがてこの世界は燃え尽きるの・・・　おおいぬ座にある小さな星が爆発して、世界を焼き尽くす・・・　本当よ、宙。これは本当のこと。でも、誰も信じないの・・・　宙は、宙だけは分かってくれるよね・・・」

ロスト・プロフェットの台詞にかぶるように録音された大河内志帆の声が、ループされ、またピッチを変えられながら、響き渡る・・・

「宙。知ってる？　やがてこの世界は燃え尽きるの・・・　おおいぬ座にある小さな星が爆発して、世界を焼き尽くす・・・　本当よ、宙。これは本当のこと。でも、誰も信じないの・・・　宙は、宙だけは分かってくれるよね・・・」

大河内　・・・宙は未来が見えるの。それは神様が宙に与えた特別な能力。ママの望みを宙は叶えることが出来る。この世の終わりを確実に予見して、人々に伝えること

が出来る。やがて世界は焼き尽くされる。やがて世界は・・・

ゆっくりと倒れていくロスト・プロフェット。

大河内　・・・私はいつもそう話しかけていた。声も上げることが出来ない宙に向かって、人形にでも話しかけるように・・・　問わず語りに語られたこの言葉を、たわいのない私の独り言を、宙は聞き続けていた。なんの反応も示さないように見えてはいたが・・・　でも、すべてを理解しようと必死になっていた。そして、それを信じ、望みを叶えようとした・・・ すべては私の所為。すべては、私の・・・私は、何をしようとしていたのかしら・・・　本当の私の望みは・・・　ねえ、宙。あなたは本当に未来が見えたの？　もしそうなら、この終わりも予知出来ていたんでしょう？　そして、私自身の最後も・・・

突然、自らのこめかみに銃口をあて引き金を絞る、大河内。傍らの君島が間一髪で拳銃を持った腕を払いのけ、銃弾は虚空へと発射される。
痛いほどの沈黙。
大河内のすすり泣き・・・
駈け寄ろうとする深尾と中谷を制し、君島は泣き続ける大河内を抱きしめる・・・

ナレーションが響く。
「打ち上げられた H4a ロケットは順調に高度を上げ、衛星軌道に到達。軌道上から発射された加速ブースターとのドッキングに成功しました。このブースターで加速された後、切り離された探査機は太陽系内で二度のスイングバイを経た後、太陽系外へ向かって飛び出していく予定になっています・・・」

#19 Pandora's Box　ー残存魔神ー

大河内を抱きしめている君島・・・
舞台袖に現れる犀川。

犀川　すべてを与えられし者、パンドラ。彼女は神々の策略のために作られたの。その策略とは何か？　たぶんそれはとても禍々しいもの・・・　パンドラは妻としてエピメテウスに与えられることになる。エピメテウス・・・　そう、火の使い方を人間に教えた罪により、永遠の罰を与えられたプロメテウスの弟よ。兄を失ったことに対する贖い・・・　表向きはそうなっているけど、本当は・・・　そう、神々は火の使い方を教えたその行為を、そして人間が神々と同様に火を使えるようになったそのことを、決して許していなかったの。火の使用、つまり科学技術と言い換えられるわね。人間がそれを用いることを、神々は容認することはなかった・・・

舞台袖に深尾が現れる。

深尾　１週間があっという間に過ぎた。今日、私は帰らなければならない。このロスト・プロフェットによる侵入事件の捜査は、また別のチームにより行われるという。私は蚊帳の外に放り出されたのだ。中谷の見送りを断り、挨拶もそこそこに、私は一人船着き場から船に乗った。　・・・帰路につく前、岡専属の看護士である犀川という女性に会うことが出来た。霧生が一緒に行こうと言い出したのだ。当然規則違反だ。・・・ロスト・プロフェットは岡の横たわっている病室にまでやってきたという。死んだように眠る・・・いや、もしかしたら・・・（首を横に振る）その岡の傍らで、彼女はギリシャ神話を話して聞かせていた。パンドラの話だ・・・

犀川　パンドラとエピメテウスは幸せな結婚生活を送ったわ。でも、それは１月にも満たなかった。パンドラはヘルメスに与えられた金の箱のことが忘れられなかった。パンドラは昼も夜も金の箱のことを思い、眠りについた後にも、金の箱を夢で見た。そして、彼女の好奇心は最高潮に達し・・・　パンドラはとうとう、その蓋を開けてしまった・・・　すると箱の中から、毛むくじゃらの黒い魔物がたくさん這い出してきたの。この魔物達は病気や貧困、怠惰や強欲、羨望や嫉妬といった人間を悩ますあらゆる災害や悪しき心の源だったんだ。パンドラは慌てて蓋を閉めたんだけど、時すでに遅く、すべての魔物が飛び出してしまった後だった・・・いえ、本当は箱の中には、たった一匹の魔物が残っていた・・・　最後に残った魔物、そいつの名は何でしょう？

深尾　そう問われて、私は「希望」と答えた。

犀川　残念ね。それは間違い。その魔物の正しい名前は「前兆」。そう、「前触れ」のこと・・・　もし、これまで外に飛び出していたら、人間は自らの運命を前もって知ることとなり、希望を持つなんて無理ってことになってたわけ。遅かれ早かれ自殺するか、感情のない表情で達観した日々を過ごすか、の２つの選択肢しか持てないことになったはず。分かるかな？　パンドラを作り、そして金の箱を与えるというこの「神々の策略」は、人類の殲滅計画だったの。「前兆」が解き放たれなかったために、人類の絶滅は引き起こされることはなかったけど・・・　パンドラは災いの種の詰まった箱を開けてしまったことに気づき、すすり泣いたわ。夫のエピメテウスに出来たのは、彼女の手からその箱を取り上げ、そして慰めてやることだけ。きつくパンドラを抱きしめながら・・・

深尾　話を聞きながら、私は奇妙な感覚に囚われていた。天賦の才能を与えらた一人の美しい女性、大河内志帆。それはまるでパンドラのようではないか。そのパンドラの優しい夫は宙と遥の実の父親であった君島博士。そしてパンドラの箱は・・・

大河内の持っていたパンドラの箱はすでに一度開けられた物だった。中に入っていたのは「前兆」のみ。しかし、それは人類を滅ぼす可能性がある物だと彼女は気付いたんだ。前兆は、希望を奪う。すべての人々から希望を奪い去る・・・しかし、宙はその封印された箱を再び開こうとした。ロスト・プロフェット、未来を知る「墜ちた予言者」は、そうして真の予知能力を得ようとした。この世の終わりを知るために、彼の母親、大河内志帆の願いを叶えようと・・・　それは母の願いを叶えることを天命として信じた息子の悲劇。意図せず、息子をそう仕向けてしまった母親の悲劇・・・　これではまるで神話そのものじゃないか？　でも、そう考えれば、納得がいく・・・唐突に話を終えた彼女に私はこう尋ねた、「その話の続きは？」　すると、彼女は・・・

犀川　この後、パンドラはどうなったのか、そして彼女の優しい夫エピメテウスはどうなったのか？　それについては何の後日談もないの。そして、「前兆」という名の一匹の魔物が閉じこめられたパンドラの箱の行方も・・・

深尾　現代のパンドラ、大河内志帆の物語にも、後日談はないのかも知れない・・・

舞台後方に駆け込んでくる中谷。激しく手を振り、深尾に呼びかける。

中谷　深尾大尉！　どうして大尉が帰らねばならないのですか？　どうして我々が捜査から外されたんですか？　大尉！　この事件はまだ終わったわけじゃない。そうでしょう？　私たちは何も理解してはいない。深尾大尉。悔しくないんですか、私は・・・　私は・・・

静かに、だが心の底から悔しがっている中谷。

深尾　中谷の言う通りだ。今回の事件は何であったのか、私の結論は全く出ていない。いや、結論を出すことが出来ないと言った方が正しいだろう。まだ物語は続いているのだから・・・　終わってなどいないのだから・・・　本当の後日談はこれから始まるのだ・・・

舞台後方両翼に現れる少女達。瞳を閉じて立っている・・・

深尾　遠くシリウスに向かい飛んでいった遙、そして医療研究棟の地下で巨大な量子コンピュータにつながれたもう一人の遙。その量子通信システムこそ、封印されたパンドラの箱ではないのか。そして、大河内志帆が予言した通りに、シリウスの爆発を遙が、その量子通信システムが認識したときこそ、その第二の封印が解かれるときではないのか。光の速度を超え情報が伝達される。破綻した因果律、世界中に知れ渡る前兆・・・　神々による「人類殲滅計画」がそこで開始されることになる・・・　そう、私の捜査はまだ終わっていない。その時まで、それを確認するまで、終わせることは出来ない・・・　パンドラの箱に最後まで閉じこめられていた魔物。世界を滅ぼす力を持つ魔物。その魔物の本当の名前・・・　汝の名は・・・

少女達が不意に目を大きく見開き・・・

少女達　量子通信システム、Faint voice。

音響［Heaven’s a lie/Lacuna Coil］が高鳴る。
これでもかって言う感じのとんでもない数のバックサスの点灯。
舞台上にすべての登場人物が現れる。

一同が礼をし、舞台が闇となる。
客席では拍手が湧き起こることだろう・・・

#20 Additional Ending　ー帰還兵士ー

会場の闇が拍手で満たされている中、不意に舞台上に明かりが点る。
椅子に座って居眠りをしている犀川。杖にしていた腕が、がくりと顎からはずれ、びっくりして飛び起きる。犀川、なにかの気配を感じ周りを見回すが、同時に身震いしてしまう。部屋の温度が、びっくりするほど下がっている。震えながら、エアコンディションのコントローラを確認する。

犀川　（二の腕をさすりながら）１４度？　温調が故障し・・・

彼女の声が、不意に途切れる。まさかとは思ったが、ベッドの上の岡を見る・・・

犀川　まさか・・・　そこにいるの？

痛いほどの沈黙が続く・・・と、不意に心電図を示していたモニターが明滅し、消える。消えたモニターはまた、何事もなかったように再度点灯し・・・

犀川　帰ってきたの？

心電図モニターに「返ってきたよ」の文字。
ベッドの岡に駈け寄る犀川。

犀川　心配したぞ。ホントに心配したんだから・・・

心電図モニターに「ごめん。ごめん。ごめん・・・」のと謝りの文字の羅列・・・岡の額を殴ろうと、右手を握りしめ、高く腕を振り上げる・・・　が、殴ることが出来ない。振り上げた腕をおろし、そして・・・

犀川　おかえり・・・

顔を覆い、膝から崩れる犀川。

やがて、舞台は暗転し、客電が点り始める・・・
［了］

［公演記録］
二〇〇四年、十二月九～十三日。大塚、萬スタジオ。
作・演出／はなださとし
舞台美術／吉田貴行（Ｄ．Ｇ工房）　照明／島田康和Ｓ．Ｐ．Ｃ）　音響／畠山慎一（ＳＯＡＰ）　映像／中島一成・川上琢史　制作／演劇レーベルB□-tanz

キャスト
深尾博之／木村淳　霧生尚道／西村亮　岡昌夫／牧野達哉　中谷晋也／嶋田貴秀　大河内志帆／羽鳥友子　君島寛／千葉いづみ　小宮孝夫（孝子）／酒田恵美子　サイバーフォース隊員・佐伯／高橋彰規　小島／坂巻真由実　吉井／太田直人　小田／原麻理子　犀川杏子／永浦暁　フェイント・ヴォイス・大河内遙／市川麻美・市川好美　ロスト・プロフェット・大河内宙／ラバウル幸子（劇団可燃物）　医師／吉田幸喜　警備兵／山本薫　移送班長／花田智